

新宿発



311号

「あの戦争」を語り継ごう I

私にとっての「満州」
中国残留婦人と中国残留孤児
シベリア抑留と強制労働補償問題
「戦争」に学ぶ



主語を刻む

しま・ようこ

そこはかつて裁きの石段だった

七人の男たちが時の底へ蹴られて間もなく

わたしたちは

行き場のないうめきの残響を消し

肥え太った

「プリズン」の跡に サンシャイン60が聳え

その顎下の石に 〈永久平和を願って〉の文字

ここを訪れるのは 〈日の丸〉に明日を流す男だけ

わたしは

石の苔文字に試され続けて

ツンドラの底から 飢えた骨が叫ぶ

黄砂の愛に育まれ 年老いた命を見放す

醜い島国の 忘れる前夜の物語

〈あやまちは 決して くりかえしません〉の呪文に

主語を刻む

不吉な朝焼けの始まりの日に

「戦時レジーム」の復活ではないか

井出孫六

今回の特集は、旧満州における「残留婦人・残留孤児」発生の背景と、「日本人捕虜シベリア抑留」の経緯に焦点が当てられている。「残留婦人・残留孤児」の多くが「満蒙開拓団」の子女であり、日本人捕虜の大半が関東軍兵士であり、その中にソ連参戦直前に根こそぎ動員の開拓団員多数が含まれていたなど、切り離すことのできない相關関係が内在している。「残留婦人・残留孤児」の国家賠償請求訴訟は、六年前から東京をはじめ全国都道府県一八か所においてすすめられているという点で、戦後六二年もたったいま、ホットな問題になっている。

この特集企画が実現する直前、「従軍慰安婦」に関する安倍首相のあいまいな答弁などをきっかけとして、中国、韓国などはむろんのこと、米国下院にまで抗議の声は波及してゆき、日本政府は苦しい立場に追いこまれている矢先、靖国問題が新しい様相を帯びてふたたびメディアに取りあげられるに至った。新聞の報ずるところによれば、一九五八年厚生省引揚援護局がBC級戦犯の合祀を靖国神社に強く働きかけ、従軍慰安婦請負業者までも名簿にまぎれこませていたという。BC級合祀が後のA級戦犯合祀の導火線になっていったのは想像に難くない。戦時レジームは国民の目の届かぬところでしぶとく生きつづけていたのだ。

一九五八年といえば、岸信介首相が露骨なまでの反中国政策のもと、それまで民間ベースで続けられてきた旧満州からの引揚げを途絶に追い込んでいったのと重なる。厚生省引揚援護局長は当時約六千の婦人・孤児が旧満州に残っていると声明しながら、引揚援護局の看板から「引揚げ」の文字が消え、「未帰還者特別措置法」の名のもと、「残留婦人・残留孤児」の名が『戦時死亡宣告』によって戸籍から次つぎに抹消されていくことになる。陸軍復員省の流れを汲む厚生省援護局は引揚業務から解き放たれ、軍人遺家族に向けての恩給と靖国合祀に主要な活路を見いだしていく。

安倍内閣の目標が戦後レジームの克服などではなく戦時レジームの復活と読めば、中・韓・米にノーの声が湧き起こっているのがよく分かる。

(作家)

「あの戦争」を語り継ぐ『あひろ』 311号 目次

表紙	新京敷島地区難民収容所の墓地（孤児たちが次つぎに葬られた）	増田 昭一	74
詩	主語を刻む	しま・よつこ	74
巻頭言	「戦時レジーム」の復活ではないか	井出 孫六	90
私にとつての「満州」			
平房——一九四五年夏		桑原ちえ子	8
私の張家口		酒井はるみ	21
風化させたくない葛根廟事件		大嶋 満吉	25
敗戦後の大連でのあれこれ		羽田 澄子	34
ハルビンで留用されて		高畠 雅映	42
満州の収容所で死んでいった孤児たち		増田 昭一	50
今も終わらぬ戦後 1 中国残留婦人と中国残留孤児			
中国残留婦人・残留孤児はなぜ生まれたか		小川津根子	74
「大陸の花嫁」と「勤労奉仕隊」の名のもとに	鈴木五三美さんの場合		90
関東軍にも国にも見捨てられ	松田恵子さんの場合		96



私が出会った中国残留婦人……………	班 忠義	102
「烏雲」の森——日中の架け橋になった中国残留孤児……………	小俣 光子	111
今も終わらぬ戦後 2 シベリア抑留と強制労働補償……………		
明治以降の大陸侵略がもたらした災厄——日本人捕虜のシベリア抑留とは何か？……………	白井 久也	126
シベリア抑留捕虜に対する不当な差別待遇——次代の人びとに、これだけは伝えたい……………	池田 幸一	144
シベリア抑留、そして北朝鮮へ移送 飢えと寒さの中で呻吟する……………	野口富久三	149
痛ましいシベリア抑留の思い出 全身大火傷の戦友は いすこに……………	岸本 美雄	154
ロシア オレンブルグ市で眠る父を訪ねて……………	高井 光子	162
「戦争」に学ぶ……………		
「撫順戦犯管理所」の六年……………	絵鳩 毅	166
日本軍の「生体解剖」痛恨の証言——未来に向けて……………	湯浅 謙	171
張学良と私の関係……………	儀我壮一郎	177
戦争史を学ぶ若者たち……………——最近の大学生の受講態度とその読書傾向……………	吉田 曠二	183
窓 違憲教育基本法の実現を許さないために……………	俵 義文	188
編集後記……………		192



旧満州国

——— 国境

()内は現在の地名

● は本文に出てくる地名など

満州国の位置図





私にとっての「満州」

平房——一九四五年夏

桑原 ちえ子

二〇〇〇年。節目になる良い年にしたい。——そんな思いで暮らしてきた。
その六月のある日。

「おかあさん、何を尋問されたの」
娘に聞かれた。

「ジンモン？ 電話のことね」

「覚えていません。知りません。ありませんって、答えていたじゃない」

そうなのだ。まったく！ 自分から電話をかけながら、なんともたまたした返事をしていたことか。
具体的なことは何もかもはつきりしないのだ。

いやいや、ひとつだけ答えることができた。

「上級生にK・Sさんがいました」

この一言で「私が私になれた」のである。

毎日新聞の「出会いふれあい」欄に、平房国民学校同窓会の案内記事が掲載されていた。

電話だ。何はともあれ電話だ。興奮した私は、受話器に飛びついた。私の耳に、落ち着いた男性の
声が答えた。

「……それでは、花園国民学校平房分校でなくて、平房国民学校なのですがね。校長先生のお名前は？ 覚えていませんか。担任の先生は？ 覚えていませんか。同級生はどうですか……。私の弟も当時三年生でしたよ。写真はありますか？ ないのですか」

なんとも頼りない私の答えに、先方は冷やかしの電話でもかかってきたかのような声になった。あせった私は、「上級生にK・Sさんがいました」と、急いで答えていた。

「いやあー そうですか Kさんですか。Kさんは同窓会に入っていますよ。間違いないですよ。会報を送りますよ。」

二〇〇〇年は、私にとって節目の年になった。五五年ぶりに満州時代の友の消息を知ったのだ。すぐ、会報は届いた。電話の相手・Tさんは、一号から一一号までを合本にしたものと、一四号を送ってくださった。

不正確だった文章

一九七七年五月一〇日発行の「あごら」141号に、「マーガラピー——戦争責任雑感」という、千字足らずの私の短文が載っている。二歳になるかならないかで疫痢で死んだ妹、「房子」の「房」は、「平房の房」。その平房で働く父の子として、英語は「サンキュー」、ロシア語は「ミール」、共に感謝を表す言葉から外国の言葉を覚えた私が、中国語は「マーガラピー」（バカヤロウ）から覚え、石を投げては逃げていた記憶に、「（自分は加害者でない）という自信は、まったくないと述べている。

その思いは変わらないが、事実の間違いが二つある。ひとつは「八歳の女の子が生後三か月の弟を背負って」は、「八歳の女の子が、満二歳二か月の妹を背負い、四歳の弟の手を引っぱって」と訂正。あとひとつ、「花園国民学校」を「平房国民学校」に訂正しなければならない。

私が花園国民学校と思い込んでいたのは、中学卒業のとき、就職するための履歴書に花園国民学校平房分校入学と書いて提出していた記憶があったためである。

弟と妹をとりちがえたのは、あの文を書いたとき、まさか八歳の子が二歳の子を負ぶって歩くだろうかと単純に思っ、小さいほうの弟にしたのである。それを読んだ母から、「首の据わらない子を背負わすわけがないだろう」と言われた。出産後三か月の母は、生まれて間もない下の弟を背負い、両手にいっぱいの荷物を持って、四人の子を譲りながら逃げたのだった。

そのように思い違いの多い私のこと。引揚げの時のことを書く勇気がなかった。しかし、Tさんから、会報『平房小会だより』を送っていただき、斎藤千代さんのすすめもあって、私なりの、「満州からの引揚げの時の記憶」を書いてみることにした。

平房最後の日

平房といえは七三一部隊、石井部隊、秘密部隊、生体実験、悪魔……などなど。

母は、「お父さんが七三一部隊でなくってよかった。勤めたくて勤めたのでもないのに、七三一部隊で働いていた人はいわいそうだ」そう言うのだが。

「敗戦の年の八月九日。七三一部隊のほうで、煙がモウモウと出てね。書類を焼いていたのだよ。」

どーん どーん、と音がしてね」これは母の話。

「平房小会だより」のなかには、

「八月九日昼ごろから、隣の七三二部隊から白煙が立ちのほり始めた。」

「(七三二) 部隊の東兵舎の近くに布陣した野戦銃砲兵が、爆破の目的で砲撃を続け、煙は空高く立ちのほり、飛行場は煙に包まれ、飛来する友軍機さえ、平房飛行場はすでにソ連軍に占領されたかと誤認する有様であった。」の文章がある。

これを読んだとき、私は納得した。そのとき、私は燃え上がる火を見、爆音を聞いた。

敵が攻めてきたのだ！ 大砲が打ち込まれている！ と思い、ぶるぶる震えていた。あれはやはり現実だった。

ただ違うのは、敵でなく、七三一部隊自らが爆破したのであったことだ。母の話す「書類を焼く話」と、私が「恐ろしくてぶるぶる震えて見た火」が同じものだと、五五年ぶりに理解できたのである。母は「空襲はなかった」とも言った。

「平房小会だより」には、「石井部隊の書類焼却のため煙が立つが、心配無用」の隣組回覧がまわっていた」とも記されている。母もこの回覧を見ていたのである。母は二八歳であった。

「七三二部隊の隣の部隊、お父様の働いておられた部隊は、関東軍八三七二部隊といって、航空機の修理をしていた部隊で、多くの技術を持った軍属が勤務していた。七三一部隊とは関係なかったのです。」と、これはTさんが私にわざわざ知らせてくださった話である(Tさんは、一九四五年三月、平房国民学校を卒業、「平房小会だより」を発行してくださった方)。

三班に分かれて家族は移動

八月九日からの部隊の動きは急だった。部隊命令として、家族と病人に対し、移動命令「部隊の行動を容易ならしむるため、貨車にて輸送する旨」が伝達されたとのことである。

一二日、一四日、一六日の三回に分かれての輸送計画は、おおむね、そのように実行されたようだ。私の家族は第一次の十二日出発組であった。それは「四歳以下の子どものいる家は第一次」と決められていたからとのこと。

母は、どこへ行くのか知らなかった。「疎開すると聞いた」と話していた。

『平房小会だより』小楠山藏氏（故人）の「忘れえぬ日」によると、「家族の移動先は確定したものではなく、安奉線沿線鳳凰城を目標にして、住むところは、現地到着後つくるということで、大変な困難が予想された」とある。小楠家の、いちばん小さい子どもは、五歳だったので、一二日出発組ではなかった。「二七日まで残り、第三次出発であった」と、記載されている。

逃走、また逃走

九日の我が家は、どんな生活だったのか。

父の姿はなかったように思う。疎開先への荷物は、布団から冬着まで最低限のものを準備したようだ。母は、食べ物も用意していた。お米を炒った。その中に金平糖を入れた。部隊の命令で動くのであるから、出発時は、それなりの支度をしたものと思う。ただし、「お米を炒った。金平糖を入れた。」

というのは、誰も覚えていない。私だけが覚えていることである。

出発は一日なのか、一二日なのか、はっきりしないが、一日から集まって、一二日の、まだ陽も昇らない朝、貨車に乗って出発したのではないだろうか。いずれにしても早朝であったという。

まだ敗戦になると思っていなかったときの出発は、命令に従うだけであつたらう。七三一部隊の火は、まだ燃えていたという。

私が敗戦を知ったのは貨車の中だと思う。

母は朝鮮との国境の町、新義州の小学校で敗戦を知ったとのこと。新義州の小学校で何日か過ごしたころ、「ソ連兵が来る」というので、貴重品と赤ん坊のおしめのかばんを持って、運ばれてきた荷物は置いたまま逃げた。

マッチの火もつけることを禁じられ、真つ暗な中、妹を背負い、弟の手をしっかりと握って逃げた記憶は、このときではないかと思うのだ。けれど確かなことはわかりません。貨車に乗り、京城まで逃げ、京城の南大門国民学校に収容された。そこで一か月近く暮らした。

私は「ソ連兵が……」と思っていたが、事実「付近住民の襲撃」があつてのこと。国民学校での生活がどんなであつたのかも、覚えがない。

釜山へ向かうため、夜、運動場に集まった。ざわざわしていた。

そのときも私は妹を背負っていた。そして弟の手をしっかりと握っていたと思う。極度に緊張していた。そのころ、貨車から子どもを捨てた人がいた。二人の兄弟の、病気がちの子のほうを捨てたという

のだ。「川で洗濯をしていた女に拾われ、無事だから連れに来るよう」連絡があったという。しかし、連れ戻しに行くことはなかった。

私は恐ろしくて、自分の母が妹や弟を捨てるのではないかと、不安になっていた。

合流した父親、来なかった父親

ざわざわが「お父さん、お父さん」という声になった。

あつちでもこつちでも、「お父さん、お父さん」

お父さんが来たのだ。

母が見つけたのか、父が見つけたのか、私たち家族は父と一緒にされた。

しかし、父親に会えない子どもたちがいた。運命は分かれた。何がそうさせたのか？

『平房小会だより』を読むと、父たちは「第三次の平房出発の最終貨車で南下した。敗戦の二日後である。鳳凰城に向かっていたのを通化に変更。第一次家族貨車と輯安で合流」とある。

真つ暗な運動場は輯安近くの国民学校であったのだろうか。母に聞いたときの答えは「京城近くの駅だった」という。私の記憶では運動場なのだが。

現れなかった父親たちは、どこへ行ったのか。——シベリアである。シベリアへ連行されたのである。軍人は、戦後はシベリアへと連行されて、満州には軍人はいなかったのではないかと思うほどである。その一方、八月一五日まで召集令状がきていたという。

すでに、フィリピンと沖繩戦に向けて召集されていた。関東軍八三七二部隊（第一二野戦航空修理廠）の軍人だけの話でなく、関東軍は南方へ召集されていたという話も、よく聞く。関東軍は国民を見捨てて逃げたというけれど、何を根拠にそう言われつづけてきたのか、知りたいと思う。

涙

平房から一緒に出発できなかった父たちは、第一次出発の家族を探しながら移動して、家族と合流することもでき、共に釜山へ向かった。私たちは、最も恵まれた組である。軍属であった父たちは、家族と会い、行動を共にすることができたが、軍人は、捕虜としてシベリアに連行されたのではないだろうか。

一方、父たち、軍属の仲間でも、第二次出発組は、不幸にも一年以上、中国に滞在することになった。そして、さまざまな苦難をしながら胡蘆島から引揚げたという。

しかし、恵まれた組も、さまざまである。引揚げの途中、Tさんの家族は、弟さんを、疲れと栄養失調で亡くしている。私も釜山近くで疲労と栄養失調で意識をなくした。釜山駅からすぐ病院へ行き、元陸軍病院に入院した。何日も意識をなくし、ベッドの上で「ぐたっ」となっていたとき、ある日、突然涙が落ちた。その涙で意識が戻った。

母が「涙が」と言った。

医師が「助かりましたね」と答えた。

私は気がついたのだ。

私はこのときのことを忘れることができない。「涙が出て助かったのだ」

と思った。「死ぬところだったのだな」と思った。

それからの回復は早かった。父親と会えたことで、「捨てられるのではないか」という思いが消えたのだ、
と思っっている。

突然、私が入院して、日本への出発が遅れたことを、「日本を目の前にしてザンネンだったでしょう」と母に話したとき、「それがそうではない。ちえ子が入院したことで、ほかの家族も、からだを休めたので、全員助かったのだ。それに、日本は台風とも重なり、交通機関は混乱していて、動きがとれなかったらう」というのが母の答えであった。

子を捨てた親

釜山に向かう前、貨車から子どもを捨てた人を目撃したことは、一生忘れられないほどのショックとなった。どんなになだめられても、妹が……、弟が……、そして自分もいつか……とおびえていた
気持ちは、いま思い出しても鳥肌が立つ。

中学生のころ、母に子どもを捨てた人のことを尋ねたことがある。

「口が裂けてもしやべれないこともあるのだよ」が、母の答えであった。

平房小会と連絡がとれたとき、母と話したなかに、川で子どもが流れてきた話があった。大急ぎで
助けたけれど、本当は親が流したのではないかと思っただけ。ひどい時代だったと思う。

日本への引揚げは釜山からであった。仙崎に渡り、瀬戸内海を通り、神戸にまわった。

瀬戸内海で機雷が爆発して、船が動かなくなり、代わりの船が来るのを一晩待ったりした。ボーボーと船は泣きつづけていた。

助け舟は金毘羅丸である。「こんぴらまるだから、もう沈まないよ」と誰かが言った。

松が見えた！

引揚げ船の名前は覚えていないのに、助けに来てくれた船の名前は覚えている。きっと「金毘羅丸は沈まない」の一言が、生命を救う言葉になったのであろう。

船に乗るときの恐怖も忘れることができない。引揚げ船に乗るとき、狭い板を歩いて乗り込むのであるが、海に落ちそうで怖くてならなかった。

日本が見えたときの大人たちの喜ぶ姿も忘れません。松が見えた！と喜ぶのですから。

「日本だよ、日本だよ」と。

母は神戸に着いた、というのですが、私は、尾道に着いたと思っっている。どうして尾道と思うのか、私にはわけがわかりません。神戸に向かう予定が、船の故障で尾道に……。とにかく尾道と思い込んでいる私がいるのである。

そこから汽車に乗り、浜松で降りました。

浜松は焼け野原でした。焼けた駅は、はだか電球がポツリとともり、駅員が「にやつ」と笑いました。怖くなりました。

駅から浜名湖畔にある母の実家まで、歩かなければならないことがわかり、舞阪まで引き返した。

舞阪で降りたのである。そのときも動き始めた汽車から飛び降りたのですから恐ろしかった。

いくらかでも近くなる舞阪からでも、母の実家がある古人見まで歩くのは、たやすいことではありません。それでも歩いたのである。

山崎ぐらいまで歩いたとき、おじいさんが荷車を引いて迎えに来ました。母の喜びようといったらありませんでした。どなたか知った人が私たちの姿を見て、知らせてくださったのだ。

大釜で煮た下着や洋服

母の実家には、祖父と祖母だけでした。叔父二人は、まだ戦争から帰っていませんでした。

私たちの着てきたものは、庭に大きなお釜を出して、煮ました。不思議なことをしたので覚えています。これはシラミやノミ退治のためだったと知ったのは、ずっとあとのことです。

季節は九月。お彼岸も終わりのころだったと思います。

母の実家での生活は、当時としては恵まれていました。転校も、古人見分校などという複式学級の、こぢんまりしたところで三年生を終えたのです。四年生からは本校に通いました。

突然の父の死

学校のある私を母の実家に残し、家族は独立して新しく塩作りの仕事をやることになった。翌年の一二月、父は事故で死亡した。

その事故が変わっていた。浜名湖を、小船で、弟と妹を乗せ、母の実家へ来た。その日に帰るはずが帰らなくて、翌朝、船が漂っているのが発見されたのである。

弟と妹は無事。父は凍死と診断された。推測されたことは、「慣れない父が航路を誤って、浅瀬に乗り上げ、水の中に入った。そのため、からだが冷えて凍死につながった」というものである。

弟と妹は、駐在所で、「おとうちゃんは起こしても、起こしても起きないんだ」と言って、集まった人の涙を誘ったという。

私はいえ、電話もない当時のこと、「弟と妹は助からないが父親は助かっているだろう」と祖母が話すのを、黙って聞いていた。

夜遅く家財道具も何もかも持って、亡骸なきがらと一緒に、親子が戻ってきた。

長い苦勞

それから母の苦勞の始まりであった。母はすっかり病人になった。

「病氣になんかなれる身でないのに……。」母はそう思っただけで何かと無理をする。薬を飲みながら、夜なべ仕事をする年月を過ごした。

引揚げのとき五歳だった弟は、一五歳になって、母の実家から、独立した。

私は中学を卒業するまでお世話になり、母より早く、古人見を去った。

私たちが母の実家にお世話になったことで、叔父たちの人生までも狂わせたと思う。

わたしは父が亡くなったとき、「お父さんは満州で悪いことをしたから、間が当たったのだ」と考えた。その思いを引きずってきたので、「平房にいた」父の仕事にこだわった。子どもは、とんでもないことを想像する。

貨車から子どもを捨てた人にもこだわった。その人が連れて帰るはずだった丈夫な子も、満州で亡くなったという。その人の行くえは、母も知らないという。ただ、「捨てた子を取り戻すのだと騒いだ」という話は伝わっている。

『平房小会だより』にも、軍人さんが我が子をどうにかした話がいくつかあった。悲惨である。

著名人から、無名の方まで、多くの引揚げ物語を、聞いたり、読んだりした。

みんな違う。違つて当たりまえ。

あの時、ゼロ歳だった弟が、いま、「お姉さん（私）は、八歳遠いだから、お父さんの顔を覚えているでしょう」という。

とんでもない話だ。覚えているわけがない。写真があり、いつも思い出話ができる環境にいなければ、よほど強烈な印象がないかぎり、覚えているものではない。

父が亡くなつてからのほうが、母には苦労が多かつたと思うが、母は「引揚げのときのことを思えばどんな苦労も耐えられると思つた」という。そして四歳だった弟のことを、「あの子は、どうやつて帰つてきたのだろう」と話したりした。そこで私は、やつぱり、いつも弟の手を握っていたのは間違いないな、と思うのである。

（千葉県白井市）

私の張家口

酒井 はるみ

石ころだらけの小さな黒っぽい山のすぐ向こうを万里の長城がどこまでも続くところ。中国側から見ると長城にはギザギザが刻まれているが、張家口側から見ると平板な壁である。それは、ここが守られるべき中国の外側にあることを示している。この山の中腹には見張台があり、兵隊さんが望遠鏡でいつも見ていた。そばを一群れの羊をつれた羊飼いが横切つてゆく。いつ戦場になるかわからないという戦争と日常生活が入り交じつて繰り返られていた場所だったのである。この小山の麓に張家口の町が広がっている。私たちは山に近いところに住んでいた。自宅から坂を下っていくと町の商店街に出る。

この町に來たのは私が二歳と九か月か一〇か月の頃である。一九四四年春のことであつた。

当時、陸軍省に属する善隣協会という組織があり、父は大学をやめて少数民族の研究するために赴任してきた。生まれて初めての私の記憶は張家口から始まる。私はここで四歳一か月まで過ごし、一九四五年一〇月に、誰一人置き去りにされることなく、模範的といわれた引揚げ、逃避行を経て、米軍の上陸用舟艇で雪の降る佐世保に上陸したが、一九四六年一月になつてゐた。

張家口は、現在のモンゴル自治区に位置するが、当時はしばらく行くと、もう地図のない地帯になる。父は馬に乗つて研究者グループの数人で調査に出かけていたからか、張家口で父と過ごした記憶はない。自宅は中国の家の形式のようで、石段をあがつて門を抜けると三方に家が配置されており、

この敷地内に防空壕が掘ってあった。

ここにはわが家のほかに、お隣に中年のご夫婦、向かいに日本人が何人かで雇っていたボーイさんが住んでいた。斜面を上がっていくとまた日本人が何人か住んでいたが、そのお一人は磯野富士子さん（『婦人解放論の混迷』「朝日ジャーナル」、一九六〇の執筆者）で、磯野さんにもボーイさんにもよく遊んでいた。ご近所は研究者が多かったなかで、お隣のおばさんは遠う霽間気を醸していたが、後に母から聞いたところでは、いわゆる現地妻という人であった。おじさんが軍服を着てゲートルを巻いて出征されたのを見ていた記憶がある。

坂を下りて商店街に出る角のところに、ケーキ屋さん？があり、白い服を着たおじさんが、湯気をもうもうと立てながら、蒸しパンをつくっていた。それを二つ重ねて、間に真っ赤な大きい棗をはさんでケーキのような形にして売っていた。面白いし美味しそうだし、いつも立ち止まって、じっと見ていたものだが、高かったからなのか、あまり衛生的でなかったからなのか、一度も買ってもらえなかった。

商店街は彩りのないたたずまいであった。この街路のどこかに池田満寿夫さんの母上が、カフェのようなお店を開いておられたと、池田さん自身が書いておられたのを読んだことがある。へえーと思いつながら、きつと彼と同じ列車に乗って引揚げてきたんだと、ちょっと嬉しくなった。

町にただ一つの洋装店があり、そのお店はちよつと豊かな女性が行くところらしく、華やいだ霽間気があった。この店の主はロシア人の女性であった。この町の住人だと自然に受け止めていたが、なぜこんなところにロシア人が一人だけいるのだろうと思わないでもなかった気がする。今にして思うと、彼女はロシア革命で、どのような事情からか張家口くんたりまで逃げてきて住み着いた、そこ以

外、行き場のない人だったのだろう。私たちはぜんぜん豊かではなかったが、一度だけ母と出かけて、そのお店で、色違いで形が同じブラウスを仕立ててもらった。今でもその形を思い出せるが、しゃれていた気がする。よほど高かったのか、引揚げるときも私の小さなリュックに入れて帰ってきて、日本でも二人して着た記憶がある。

私が四歳になったばかりの一九四五年、日本は敗戦を迎え、私たちは八路軍（抗日戦の軍隊）が追いかけてくるとか、ソ連軍が迫ってくるとかの噂のなかを、逃げ出さなければならなかった。

私はリュックを一つ背負い、母は一歳の弟を背負って風呂敷包み（ほとんどおむつだったとのこと）を一つ下げて自宅を出たということだ。留守を守っていた日本人の女と子どもばかりで、集合場所だった張家口駅まで坂道を下っていった。道の両側で中国人がいっぱい私たちを見ていたという。嘲笑したり、さげすんだり、侮辱的な言葉を吐いたりされることはなく、ただ黙って見ていたということだった。

そういう好奇の目のなかを逃げてゆくのは「それはみじめだった」と、母は「惨め」を繰り返した。もし九〇歳を過ぎていないときだったら、もっと繊細な表現で語ってくれたはずだが、いちばん最後まで残った強い印象は「惨め」だったのだ。

この衝撃的な経験は私の記憶にはない。しかし、長く私の中にあつたわだかまりが、この衝撃的な経験にあつたと気づくに至ったとき、私は六三歳になっていた。そのとき私が受け止めたものは、「屈辱を受けた」ということと「プライドをもつ」ということだったのではないかと思う。圧倒的多数の異民族のなかで、急に後ろ盾もない無力な少数者（マイノリティ）になってしまった日本人たちの、

屈辱を感じつつも負けてはならないというプライドだったのではないかと思うのだ。それは、きっと、坂を下りて駅に向かった女たちみんながもっていた心情で、それが私に伝わって私の記憶となつてしまったのだらうと感じている。

張家口駅には二〇〇人（と聞いたような記憶がある）の日本人が集まったが、すべての人が帰国するために来ていたわけではなかったということである。母によれば、ここで何人かの人と別れを惜しんだという。そのなかには、中国人が目指している新中国のために、革命の成功のために、働きたい、と言つて残留した人が一人ならずおられたという。本当に立派ないい人たちだったのよ、と、母からこの話を聞いたとき、私は混乱しそうになった。「戦争に負けたら、二人の子どもを連れてこの井戸に飛び込もうと覚悟していた」という母が、なんの抵抗もなく「革命」などという言葉で記憶の底から引き出してくることができたことに、である。

たぶん、張家口の日本人は数も少なく、中国人と折り合つて暮らしていたのではないだらうか。

この地の日本人のほとんどが軍人だったのか、善隣協会の人びとはどれくらいいたのか、民間の日本人がどれくらいいたのか、調べないかぎりなんともいえないことだが、いくつか読んだ文献から、ここで研究や調査に携わっていた人のなかには、官憲の目から逃れたくて着任していた研究者が何人もいたことがわかっている。中国人の町から最悪の撤退をしないですんだのも、あえて残留を選んだ人がいたことも、母がすうりと言つてしまったことも、そのあたりに理由があつたのかもしれないと思わないでもない。

（女性学研究者）

風化させたくない葛根廟事件

大嶋 満吉

私はその時、「満州国」の興安、在満国民学校四年生だった。

一九四五（昭和二〇）年八月九日、ソ連軍侵攻の報に、避難先としたラマ教の本殿がある葛根廟まであと三キロの地点に来ていた。私たち避難民の団は、興安街から三日間かけて、ようやく目的地を目前にしていたのである。持てるだけの荷物と幼児を抱えた母親たちは、氣息えんえんとして、隊列は乱れるままだった。

「休憩！　ここで休憩する！」「休め！　休んでよいぞ！——指揮する在郷軍人の声が聞こえた。

母、久め（三八歳）は、三歳の妹、美津子を背中から下ろし、「ああ、重たかったよ美津ちゃん」と、顔を見合わせるように微笑んでいた。僕も弟、潔（六歳）を横に、母が座りやすそうな場所に、着ていた外套を敷こうとしていた。

そのとき男の人が叫んだ。「戦車だ！　逃げろ！——」

見ると、後方の人が、波のように動いて散っている。小高い丘の稜線に、黒い大きな塊が、こっちに向かって動き出した。

すわ、大変だ！　僕は外套をつかむと一目散に坂下に走り出した。

母は、美津子を、もう一度背中に括りつけて、弟の手を引きながら駆け出した。後ろは振り向けない。夢中で走っていたら、偶然に壕のような窪みに飛び降りていた。勢いのまま砂利の中に顔を埋め

るように伏せた。ごうごうと戦車の唸る音が大地を揺るがし、機銃の音が絶えまなく聞こえる。

弾に当たったのか、ギャーという悲鳴や泣き叫ぶ声も聞こえる。容赦なく回転するキャタピラの金属音に、生きた心地はしなかった。

もう動けない。自分の伏せている場所は、敵からの射程方向になっていた。弾が近くの土手に突き刺さった。顔を埋めるように息を殺してじっと耐えていた。音が止んで戦闘が終わったかのような静けさが戻った。

三〇分余り蹂躪されていながら、自分が傷ついていないのが不思議であつた。顔を上げて、あたりを見回したら、自分たちのほかは、近くに親子一組がいるだけだつた。遠くの曲がつた辺りに大勢、人がいるのがわかつた。

下手の方を見たら、軍人が三、四人、こちらの方に向かって歩いて来た。僕は日本の兵隊さんが来たのだと思つて、嬉しそうな顔をしたらしい。母の手が伸びて私の頭を押さえた。その途端に、兵士の機関銃から火が吹いた。ソ連兵が壕の中に降りて来たのだ。私の真後ろから、けたたましい音をたてて機銃掃射されたのである。

曲がり角にいた一団が狙われていた。そのかたまりに銃を持った男性がいた。その銃を見たからソ連兵が撃ったのかもしれない。近くにいた女性も、ソ連兵に撃たれる前に、自分を先に撃つてほしいと絶叫して男性に頼んでいた。もう、これまでと、男性が立ち上がって女性に銃を向けようとした。その途端に、機銃の乱射を浴びて、全員が殺されてしまった。

僕の後ろを通る兵士の靴音が不気味に感じられたが、女と子どもしかいなかった僕たちは免れた。いや、銃を持った男が目に入らなかつたら、私たちも撃たれていたかも知れないのだ。

丘の上では勝ち誇ったような号砲が数発鳴り、戦闘は終わった。

父、肇（三七歳）と、兄、宏生（小学五年生）は、隊列から離れていた。

壕の中は、死んだ人と重傷で動けない人たちで凄惨を極めた。生き残ったのは、私たちのほか、一組の親子だけだった。父と兄の死体だけでも確認しなければと、母は、炎天下、日陰のない熱砂の中を何度も窪地を歩き回った。向こうから、在郷軍人らしい男の人が一人現れた。手帳に生き残った人を書き記していたが、父の名は、なかった。

国民学校の福岡先生が、銃を片手に無念の形相で死体となっていた。一二歳になったばかりだった。同級の橋本君のお母さんが現れ、「定夫君は弾に当たって死んだ」という。妹の二年生の恵子ちゃんは、足に弾が当たって引きずっていた。「痛いよ、痛いよ、死にたくないよ」と泣いていた。

三時間も捜しつづけたが、父や兄の姿はなかった。夕方になると、母は「どうしようかね」と、僕に問いかけた。四年生の僕には、答えようもなかった。

仲間が死に、頼りにすべき父や兄が見当たらない。住んでいた興安街は、暴動が起きて帰ることはできない。目的だった葛根廟にはソ連軍が先回りして待機している。食糧がない。武器もない。馬車もない。通信もない。道も分からない。守ってくれる軍隊もない。

どうすればよいのだ。母子だけでどうやって生きていくのだ。もう行く所はないのだ。

今度は別の在郷軍人が現われた。

「五体満足な人は四〇人くらいいません。傷ついて動けない人ばかりです。残っている人は全員自決と決定しました。一時間後に上手の壕に集まるよう申し渡します」

そう言つて、去つていった。そうか、やつぱり僕たちに生きる道は残されていなかったのだ。

母はとうとう意を決した。六歳の子のほかに、三歳の子を連れて、この荒野を歩くのは不可能だ。

「満ちゃんも聞いただろう。全員自決と決まつたつて。ここで一緒に死のうね」

「……僕は死にたくない……だけど、どうしようもない……」しぶしぶながら、同意するしかなかった。

母は美津子をそつと寝かして、近くで倒れている在郷軍人の日本刀を借りた。首から血を流している在郷軍人は、まだ意識があつた。「奥さん、早まつてはいけない。……生きるんだ。奥さん、早まつてはいけないよ……」。虫の息でも、自分の命に代えて、私たちを生かしたかったのだらう。

でも、母は、生きる望みを失つていた。死んだ母親に取りすがつて泣いている幼児をみるにつけ、この子を置いて死ぬわけにはいかない、と心にきめた。

「美津ちゃん、ごめんね。母さんもすぐ行くからね……」ついに母は日本刀を美津ちゃんの喉にあてた。鮮血が飛び、声も立てず美津子は死んだ。僕は、いつしか後退りしていた。美津子にすがつて、母は泣き崩れた。もう何も言わなかった。美津子は母の思いを知っているかのように、死んでしまった。まるで天使が芝居を見せているような綺麗な死に顔だった。

夕暮れの壕の中は、死を前にした重苦しい空気に包まれていた。足がちぎれそうだった恵子ちゃんは、出血多量で死んでしまった。母と僕と弟の三人は、指定された自決場所へ向かった。

そこへ国民学校の小山校長の子どもたち四人が現れて、僕たちと並んだ。長女の蓉子ちゃんは兄と同級生。長男の郁雄ちゃんは僕と同級。次男の隆造君は弟と同級。三男なつと喬敏君は妹と同年なのだ。

郁雄君は、弾が二か所もかすつて痛そうだったが、我慢していた。校長先生は弾に当たつて死に、

お母さんも近くで死んでいた。ともに自決するつもり私たちは、交わす言葉も見つからなかった。

それでも利発な蓉子ちゃんは、努めて明るく振る舞い、最後の晩餐会をやるうと、残り物をリュックから取り出して、皆で食べた。角砂糖、干しラーメン、乾パンなどだった。

上手から自決が始まった。日本刀で喉を突くのは生き残りの在郷軍人だった。あと七番目くらいで自分の番だ。立ったり座ったり、気ばかり焦り落ち着かない。何十人も手がけた在郷軍人は、残りが少なくなったのを確かめて、一息入れようと休憩した。夕陽が落ちて暗くなりかけた壕に、地元の満人たちが死んだ日本人の携帯品を盗みとる姿を見た。そこへまた、物盗りらしい二人の人影が近づいてきた。一人ひとり確かめるように覗き込む二人は、なんと、捜し求めていた父と兄だった。

「すぐに出るんだ。ここは島ではない。満州は広い。必ず道はある。すぐに行くんだ」父は言い放った。「美津子の死んだ場所であたしは死ぬ、と決めた。あたしは残る。あなたは逃げるなら、この子たちを連れて逃げておくれ」——母の言い分に困り果てた父は、無理やり、母を立たせた。小山兄弟には目もくれず、母の説得に終始した父は、強引に家族を壕から連れ出したのだ。

逃避行が始まった。父は新京（現・長春）を目ざすために、「東南に向けて歩くこと」「家族だけで移動すること」「人家を避けて歩くこと」の三点を、明確に決めていた。

野宿をしながら草原を歩きつづけた。いきなり人家の前に出た。迷いはあったが、食べ物誘惑にかられて、声をかけた。幸いにも興安街で顔見知りの人で、予期せぬ食事にありつけた。

父の背に負ぶさっている弟が、被っていた帽子やタオルをどこかに落としたことが発端になって、母と兄が草原ではぐれてしまった。二人を捜さなければならない父は、小高い丘に目印の鉄砲を立てて、「お

前たちはお父さんが帰るまで、絶対にここを動いてはいけないう」と言い残して原野に戻って行った。もし父も帰って来なかったらどうしよう。とても不安だった。

一時間くらい経って父は戻ってきた。が、誰も見つからなかった。ここにどまつていては餓死してしまう。移動して人家を探すしかない。歩きに歩き、日暮れどき、草原の一軒家にたどり着いた。

四〇代の夫婦は、見ず知らずの私たちに食事を出し、泊めてくれた。満語の達者な父は、家族を捜している事情を話した。主人の張営さんはいたいそう同情してくれて、転居の予定を一日延ばして、「捜索に協力する」と言った。

翌朝、周辺を捜したが、結局見つからなかった。だがそこで奇跡が起きた。張さんの家に立ち寄った蒙古人から、母が、避難団に救われて、馬車に乗せてもらっていることを聞き、母と再会することができた。食事がすんで話が弾んでいたとき、小さな黒い人影が、倒れそうになりながら庭先に現れた。それが、なんと、兄宏生だったのだ。そんな偶然が重なり、幸運にも一家は合流できた。

張さんは実家に引越すので、一緒に行くことになった。五キロほど行くと、四人の騎馬民兵に出会い、きのう父が歩いた周辺の村の状況を聞かれた。父は、母と兄を捜し歩いたとき、村には武器がないことがわかったので、そのことを話した。一時間ほどで張さんの実家に着き、張さんの客人として歓待され、食事も休息もさせてもらい出発したときである。ダーン、ダーンと銃声が響き、民兵が、私たちに、「戻れー」と怒鳴っていた。仕方なく戻ったら、父が「武器はない」と告げた村の家から狙撃されて、民兵の一人が撃ち殺されたという。「お前は『武器はない』と、うそを言った。仲間が殺された以上、お前たちを生かしてはおけない。全員銃殺にする」と、ものすごい剣幕で怒っていた。父がいくら説明

しても、許してくれない。取り囲んでいる村人が、「殺しはやめる」「無実ならどうする」「子どももいるのに……」と、口ぐちに叫んだ。「それなら子どもだけは解放してやる。しかしほかは銃殺だ」

ついに今生の別れと、子どもたちは大声で泣き出した。「殺さないで――誰か助けて――」

目隠しをさせられ、三人が銃の照準を合わせようとしたとき、一人の老婆が進み出て、首領の銃を押さえた。「殺すことはいつでもできる。だが助けることは、そう数あるものではない。この老婆の言葉を聞いてくれたなら、多くの友人をつくることになる。この場は老婆に少し時間をくれないか」銃を押さえられた首領は、村人の雰囲気を感じとって、老婆の言葉を受け入れた。

緊張の場面は、いつきにほぐれ、ほっとした空気が流れた。

部下を失った首領は天を仰いで、「俺は仲間に詫びて、お前たちを許す。俺の気持ちも分かってくれ」そう言つて馬に跨り、「お前たちは南に向かうと言つてたな。これを着けて行きなさい。私の名は、欧樹林だ」と、赤い布切れを切り裂いて渡してくれた。それが共産党の印であつたことは、後に知つた。翌日は、棍棒や鎌を手にした農民集団に追われて、川に逃げ込み、一時間も葦に隠れて難を逃れた。畑のまわ瓜やとうもろこしを荒らした報復であつたかもしれないが、ついに、われわれは、食べ物にあさる難民になつてゐた。夜の原野を歩くのは怖い。灯りにつられて入つた所が、飛行場の中だったので、肝を潰した。真夜中の雨にたたられて、仕方なく、雨よけに馬小屋に入つたら、家人に見つかり、そこでお金も持ち物も衣服も、すべて取り上げられた。

敗戦を知らされたのは、葛根廟から東方約五〇キロの鎮東（現・鎮賚）という所であつた。村の人に、日本人の難民収容所があるからそこに行くように言われた。半信半疑で街に入ると、旗やポスタ

ーが中国やソ連一色になっていた。疲労困憊した私たちは収容所に入った。

約二週間、収容所暮らしの後、ソ連の軍用列車に乗せられて新京に着いたのは、九月上旬だった。新京へ集まった各地からの避難民は、その日暮らしの毎日が続いた。

一二歳になった兄、宏生は、朝早く 新聞売りに出かけ、昼からは街頭に立って豆菓子売りをした。私も夕刊を売り、兄の豆菓子売りを手伝ったこともある。

六月ごろ、日本人の引揚げが始まっているとの情報が入り、私たちは一様に喜び、別人のように元気が出てきた。心配なことは、「鉄道路線の全部が重慶軍（蒋介石の国民党政府軍）の支配になるのが条件で、共産党の八路軍が途中の駅を占拠した場合は中断になる」との噂が流れたことだった。それでも帰国できるという希望で、人びとの表情は明るくなった。

新京を後にしたのは、九月頃だった。ポー！ と大きな汽笛が鉄傘を揺るがし、力強い蒸気の音とともに列車が動き出した。みるみるうちにビル街を通りすぎ、車窓に、のどかな農村風景がひろがった。その牧歌的なたずまいを見ていると、戦争の傷痕なんか、みじんもなく、素朴な安らぎを覚えた。絶対成功すると大見栄を切って渡満したであろう人びとは、いま、命からがら大地を後にしている。二度と、この大地を踏むことは、ないだろう。人生のすべてを賭けた青春が崩れ落ちていく。その波乱にみちた過去が車窓を追いかけていたに違いない。

三日目に葫蘆島に着いた。列車は毎日のように到着するが、私たちの乗船は、まだ先になるという。港湾近くにある仮設住宅で、何日か留め置かれた。九月の二〇日頃、ようやく乗船が許可された。いよいよ船上の人になるのかと思うと、万感が胸にあふれる。これで満州のお金とは、お別れだ。ソ連の軍票も使えなくなる。大事に大事に残しておいたお金で、最後の買い物を楽しんだ。

「蛍の光」が流れ、太くて低い銅鑼の音が響いた。岸壁では、仮設所の管理人、売り子、船員たちが、手を振ってくれる。舟が動き出し、五色のテープが舞うと、各人にどっと感傷がこみ上げてきた。

とうとう満州とも永遠のお別れだ。波止場が遠くかすんで見える。さようなら！ さようなら！

誰もがいつまでも対岸を眺めていた。そのとき人目もはばからず大声で泣き出した女性たちがいた。わが子进行い、名前を呼んでいた。

「ごめんね……タカシ……ああ……うう……タカシ……」「チカコ……生きていてね。ああ……」

とめどなく流れる涙。声は震え、息も苦しうに泣き伏してしまった。知人がそつと肩を抱いて、慰めていた。死別したのか生き別れなのか、二度と会えないわが子に、懺悔や呵責の念が追い打ちをかけてくる。そんな光景を見た人は、自分の喜びも吹っ飛んで、しばらくは苛酷な命運に思いを馳せた。子どもたちが無邪気に甲板で遊び出す頃、大海原に大きな夕陽が沈もうとしていた。

一九四六（昭和二一）年九月二四日、博多港に入港。伝染病検査などで港内に幾日も停泊させられた。一〇月一日、博多駅を出発し、郷里の群馬に帰り着いたのは、一〇月四日であった。

日本に帰国した父は、一九五五（昭和三〇）年から、八月一日を、葛根廟事件で亡くなった方がたの命日として、毎年、目黒の羅漢寺でゆかりの人びとと相集い、慰霊祭を続けてきた。一三〇〇人いたとされる避難民のうち、日本の土を踏めたのは、一五〇人に満たなかったという。

葛根廟現地に碑を建立することを終生の願いとした父は、九三歳になった二〇〇三年に、ようやく現地の寛大な理解を得て、バオの中に観音像を建立し、合同の慰霊祭を行なうことができた。

父は、その六年後、九九歳で旅立ったが、羅漢寺での慰霊祭は、これからも、私の体力が続くかぎり続けたいと思っている。

（葛根廟事件殉難者命日会代表・東京都）

敗戦後の大連でのあれこれ

羽田 澄子

一九四五年三月に東京の自由学園を卒業した私は、八月一日、大東亜戦争（太平洋戦争）の敗戦のときは、大連（現・中国東北地区）の自宅に戻っていた。そして戦時動員として、満鉄の中央試験所に勤めていた。敗戦の詔勅を聞いたのは、中央試験所の研究室でのことである。その日のことは前号の『あごろ』にも書いたが、いま一度、ここに繰り返す。ラジオの玉音放送はよく聞きとれないが、それでも無条件降伏をして、戦争は終わったことはわかった。最後の一人まで戦わなければならないと、本気で思っていた私は、このとき初めて「戦争をやめる」という選択肢のあることを知ったのである。たちまち私を襲ったのは「そんなら、なぜもつと早くやめなかったのか」という思いだった。そして自分でも驚いたことに、「負けた」というショックよりも、戦争がなくなった、という解放感のほうが大きかった。研究室の人たちは、「負けた」と誰かが言ったきり、言葉もなかった。

このとき驚いたのは、研究室の責任者の広田晃三氏が、腰掛けていた椅子を大きく揺すりながら、嬉しそうに笑っていたことである。この人はどうしたのかと不思議に思ったが、数日後に、広田氏は韓国の人だったことを知って納得した。広田氏は韓国名・田豊鎮氏、後に韓陽大学の学長になられたと聞いている。私にとって敗戦の日の強い印象の一つが、広田氏の笑顔である。

この後、ソ連軍が進駐するまで、試験所ではいろいろな書類が焼かれたりしていたが、私の周辺は戦争が終わったという、ほっとした雰囲気だった。しかしソ連軍の進駐が近づいて、戦時動員の人た

ちは退所することになった。そのとき研究室の人から「いざという時には、これを」といって青酸カリの入った小瓶を渡されたのである。今の感覚では考えられないことだが、そのときには何の不思議もなく、私はそれを受け取った。その後、私が青酸カリを持っているのを知った友人に、欲しいと言われて分けてあげた。ところが、しばらく後に彼女から「あの青酸カリは効かなかったわよ」と言われて驚いた。しかし、こんな話が平然と通る状況だった。青酸カリは潮解してしまっていたらしい。

大連は中ソ友好条約で、ソ連軍が駐留することになり、ソ連軍司令部がおかれ、権力の最高機関となった。この時から日本人の日本内地への引揚げが始まるまでの、大連とその周辺の大混乱については、すでにいくつかの著書があるが、著者の立場によって、体験にも視野にも違いがあり、当時の大連の全貌を描き出すことは不可能と言える。私がここで言えることも、全く個人のささやかな体験の一部である。

父は実業学校の校長だったが、敗戦とともに失業し、しばらく抑留されていた。なぜだかよくわからないが、この頃は組織の責任者は、いろいろな取調べを受けることが多かった。父を抑留したのは、おそらく大連市政府だったと思う。敗戦直後、父が「学校の小使いをしていた中国人は八路軍の工作員だった」と、驚いて話してくれたことがあったからだ。当時、中国は国・共内戦の最中で、大連には双方の勢力が潜入していた。しかしソ連軍の統治下にあるので、市政府は八路軍系が力をもつことになった。父は半月ほどたつてから、虱だらけになつてもどつてきた。

当時の日本人の生活手段は売り食いだった。大連は市街のあちこちに広場のある街だが、広場には日本人のさまざまな持物の露店がでた。女の着物が最も人気があり、母も着物を手に提げて売ったり

していたが、そのうち着物で洋服を縫って売るようになった。ソ連兵には女性の兵隊もいて、これはとても人気があった。「兵隊は男」としか思っていなかった当時の私たちは、「女の兵隊がいる」と仰天したものである。満州に進駐したソ連兵はシベリアの牢屋にいた囚人兵だったというが、その暴行は有名な話である。私の家の近くに來た軍隊は、すでに交替していたのか比較のおとなしく、家に「ダヴァイ」（この言葉は、いろんな意味に使われるが、この場合は「何かよこせ」といったニュアンス）とやってきた兵隊は一人だけ。急いで腕時計とタイプライターを渡したら、すぐ帰っていった。

私がソ連の兵隊で驚いたのは、歌がうまいことだった。日本の兵隊が軍歌を歌いながら行進しても音程がそろわず、歌は怒鳴っているようにしか聞こえなかった。しかしソ連の兵隊は、行進しながら歌いだすと、二部合唱、三部合唱になって、ロシアのメロディーが街にひろがっていった。

敗戦の年の暮れになって、私たちの学校（自由学園）の卒業生は、相談して、デパートでケースを借りて、知り合いの品物を預かり、委託販売する仕事をはじめた。これはとても成功して、みんなの生活の助けになった。

またこの頃になると、満州の奥地から開拓団の人たちが難民となってたどり着くようになった。

父のいた実業学校は難民の人たちの収容所になった。最初に到着したのは弥栄村の人たちだった。ほとんどが孤だらけの女性と子どもたちで、ほろに包まった人たちで、いくつもの教室がいっぱいになった。大連の日本人は、約二〇万人だったが、奥地から流入した難民は二万人といわれている。私たちは、難民の子どもたちになにかできないかと相談して、古い布をあちこちから集めて、パンツや下着を作ってあげたり、お話や紙芝居をしたり、人形芝居（ギニョール）をしたりした。私たちにでき

ることは、ささやかだったが、子どもたちはとても喜んだ。私の主な役目は紙芝居の絵をかくことだった。「どんぐりころころ」や「熊のプーさん」の絵を、クレヨンと水彩絵の具を使ってせっせと描いた。

一九四五年の一二月に、ソ連軍司令部は既存の日本人団体をすべて解散し、民主的労働組合のみの設立を認めるということになった。いろいろな団体の届出があったというが、こういう結果になったのだった。しかし労働組合とはいうものの、実質は日本人居留民団で、日本人全体の問題に対応する組織だった。結局この組織の組織活動に踏み切ったのは、大連にいた左翼系の人たちである。

私の家とお付き合いのあった満鉄調査部の石堂清倫氏も中心人物の一人だった。私がこの頃知った方で著名な方に、野々村一雄（一ツ橋大学教授、向坂正男（エネルギー経済研究所長）、土岐 強（共産党組織部長）、そして栗田 茂（作家の五味川純平）、高橋庄五郎（日中貿易事業）といった方たちがおられた。また、日本軍の兵士だったが八路軍の捕虜になり、延安で民主化教育を受けて大連にきた「外来幹部」といわれる人たちもいた。この人たちは皆、仮名だったので、その後の消息を知ることができない。

一九四六年一月に「大連日本人労働組合」が結成された。組合の大きな仕事は、組合員の職場の生産や業務の復興、生活の維持。大連に避難してきた日本人難民を救済する資金集め。さらに日本内地への引揚げのための資金を集め、引揚げを組織するのも組合の仕事だった。民主教育、民主化運動も組合の役目だった。組合の「資金獲得運動」は、多くの日本人が生活に困窮していた状況で行なわれたので、困難をきわめた。

大連の日本人社会で権力と財力をもっていた実力者の多くは、もともと左翼に反感をもっている。当然、労働組合の運動に批判的だった。また、組合の運動も、政治的に未熟で、行き届かない面が多

かった。そういう空気の中で、これはずいぶんのちに分かったことだが、「組合の人間だ」と言って、極左的発言で脅したり、組合の名を騙って、金をゆすつた人たちもいて、組合への反感がたかまり、大連の日本人社会は、複雑な様相を呈することになった。

一九四六年の五月、我が家は、ソ連軍の将校の住宅として接収された。これが始まりで、この後、ほぼ一年の間に九回も引越しをすることになった。なぜこんなことになったのか。日本の統治時代、金持ち以外の多くの中国人は、街はずれのひどい地域に住んでいた。一九四六年の夏、大連市政府は中国人の人たちが良い住宅に入れるよう、「住宅調整運動」を始めた。日本人の住宅を中国の人に明け渡す運動である。これは中国の人たちを喜ばせた。鉦や太鼓を先頭に行列を組んで、踊りながら住宅地に入って来たりしていた。何回も引越すことになったのは、この「住宅調整運動」があったからだ。組合はこの事業がスムーズに進むよう市政府に協力しなければならなかった。もちろん日本人に評判のいいわけはなかったが、日本人も早晚この地から日本に引き揚げることになることを覚悟している時だったから、こんなことができたといえる。私たちは一軒の家に幾世帯も一緒に住むようになり、最後にはリヤカー一台に布団と着替えと石炭を積んだだけで、あつという間に引越せるようになった。

このような情勢のなかで、私はどうしたか。

私は、戦後初めて、日本の戦争が中国に対する侵略戦争であったことを知り、大連で日本人が中国人に対してとっていた大きな態度がなぜかを知って、組合の運動に共感をもつようになった。家どうしのお付き合いで親しかった人たちが組合運動に参加していることもあった。私の妹も石堂氏に声をかけ

られて、組合の調査室の仕事についた。まだ一六歳の女学生だったが、学校は閉鎖されてしまっていた。そのころ、満鉄は中国に接収されて中長鉄路公司となり、中央試験所は科学研究所となっていた。

私はその科学研究所の組合支部の職員として働くことになった。当時の私はよく知らなかったが、実は、この科研からは中国に請われて残留し、新中国の建設に協力した科学者が何人もいたのである。後年、この人たちの著書で、私は初めて詳しいことを知った。

一九四六年は大連の日本人にとって辛い日々だった。力を失い、生活の苦しい日本人は、早く日本に帰りたいのだが、いつ引揚げ船が来るのか、全く判らなかつた。引揚げについてはたくさんのデマが流され、人びとをいっそう不安にしていた。それでも、ついに、この年一月一四日に引揚げが発表された。まず難民と生活困窮者が引き揚げた。

私の記憶に残っているのは、病院船としてきた高砂丸への乗船を手伝ったときのことである。担架をいくつか運んだが、そのひとつに両腕が肩からなく、両足が股の付け根からなくなっている兵士がいた。白衣に包まれていたが、まるで達磨のような姿だった。そのショックは、忘れられない。あの人は、あの後、どうなっただろうか。

引揚げは、一九四七年の三月いっぱいまで終わったが、引揚げがはじまって、私は組合の本部で働くことになった。石堂氏の要請もあって、私は大連に残ることになっていたからだ。しかし父は第一次の引揚げで帰っていった。父はその前の半年くらいは、難民収容所になっていた実業学校で、炊事係をしていた。自分が校長をしていた学校である。父は無口で何も語らない人だったが、校長時代に何人かの生徒を戦場に送り出したことに慚愧たるものがあつたようだ。母と妹と私の三人は大連に残った。日本に帰った父がどこでどうしているかは、当時は音信不通なので、全く分からなかった。

第一次の引揚げが終わって、残った日本人は、約七五〇〇人になった。この引揚げ事業がどのようなものであったかは、石堂清倫氏の著書『大連の日本人引揚げの記録』（青木書店一九九七年刊）に詳しい。

二〇万人もいた日本人がいなくなると、大連の雰囲気は一変した。まぎれもない中国の街になったのである。日本人の姿は街から消えて、街のどこでも通じていた日本語が通じなくなった。中国語のできない私は、大連を親しい土地と思っていた自分の意識を恥ずかしく思う変わり方だった。

「日本人労働組合」は、「日僑勤労者組合」になった。石堂氏が委員長になり、私は婦人部長の仕事をするようになった。いま思うと、満二一歳になったばかりなのに、婦人部の活動で、いろんな職場や地域で、話を聞いたり、おばさんたちの集まりで話したりしていた。怖いもの知らずであった。

私が引揚げたのは、この翌年、一九四八年の七月のことである。引揚げたのは母と私。妹は体調を崩していて旅行ができず、残留する親戚の家に残していくことになった。妹たちが帰国したのは、さらにこの一年後である。

引揚げのためにいろいろ整理作業をしていたとき、「組合が今までにつくった、たくさんの文書やチラシなどをソ連軍司令部に預けるために纏める」という仕事をさせられた。今と違いガリ版刷りで、紙も悪い。しかし組合が何をしたか、よく整理された資料が積みあがった。これらはいまどこにあるのだろうか。その後、誰も確かめていないと思う。

引揚団は、組合が、地域ごとに組織していた。近くの学校の校庭に集まり、トラックで、港に近い収容所に入る。広いフロアに雑魚寝である。ソ連の兵隊が管理していた。食事はソ連側が作るらしく、とてもご馳走なのだが、脂っこいものが多くて、何日も続くと、閉口してしまった。

いよいよ乗船。船は「山澄丸」。棧橋を渡りながら、再びこの地に戻ることがあるだろうか、という思いと、本当にすべての日本人が洩れなく帰国できるのだろうかという思いに捉われていた。乗船して最初の食事に、白いご飯と漬物と味噌汁がでた。久しく口にできなかった味だ。人びとから歓声があがった。私は嬉しいのと同時に、一所懸命ご馳走を作ってくれていたソ連の炊事係に悪いような気がした。

船が公海に出ると、船内の状況は一変した。すでに準備していたのだろう、たちまち「組合に反対する勢力がリードする組織」が立ち上げられた。やがて広い船室に人を集め、組合のメンバーを弾劾する集会が開かれた。何人かの組合幹部に混ざって、私まで台の上上げられて、悪口を浴びせられた。全く知らない顔が並んでいる。何を言われたか、具体的な言葉は忘れたが「労働組合は日本人を苦しめた」「裸にして海に放り込め」といったような罵詈雑言が浴びせられた。不思議なことに、船内はひどい騒ぎなのに、騒ぎが一段落するまで、船の関係者は一人も出てこなかった。

同じようなことは、入港した舞鶴の収容所でも起きた。実は「山澄丸」では天然痘が出たために、私たちは一か月も収容所に留められた。その間、組合の幹部は集会でつるし上げられ、その後、つぎつぎと、殴られていた。私も呼び出された。見たこともない男たちに囲まれて殴られ、体が吹っ飛び、顔はお多福のように腫れあがった。親に叩かれたこともないので、殴るとはこういうことかと、びっくりした。そしてここでも、CIAの調査は厳しかったが、騒ぎの間、収容所の係は、一人も出てこなかった。

一か月後、本籍地の静岡市の親戚に身を寄せ、父と再会することになった。引揚げるまでの体験の、これはほんの一端。今回、このような話を、組合運動の中心だった人たちに確かめたいと思ったが、もはやほとんど他界されていた。

(二〇〇七年三月一〇日 記) (記録映画作家)

ハルビンで留用されて

高島 雅映

一昨年の夏、ウラジヴォストックへ旅行した。

東京から一番早く行ける外国の都市がウラジヴォストックである。何しろ新幹線で新潟まで一時間半、新潟から飛行機で約一時間で、ウラジヴォストック空港へ着く。

極東のいくつかの都市を訪ねたが、どこへ行っても「六〇周年」というポスターに出会った。何からの六〇周年かという、「ファシストへの勝利から六〇年」と書いてある。「平和と繁栄の始まりの六〇年」とも書いてある。私たち日本人にとっては、六〇年の始まりは八月一日が常識だが、このポスターには九月二日とある。「東京湾のミズーリ号の甲板上で降伏文書への署名が行われた日」が、連合国の人びとが祝う平和到来の日である。

一九二八年に生まれた私にとって、物心のついていない頃の世界恐慌に始まり、日本の満州事変（中国人が九・一八と呼んだ戦争）、そして支那事変（日中戦争）、さらに大東亜戦争（太平洋戦争）と、私の青春は戦争のなかに明け暮れていた。周りみんな競って軍国少年たらしめたなかで、教練や武道を大の苦手とした私は、一九四五年度の敗戦に、正直ホッとした。「生き延びた」という感覚であろうか。一九三五年、父ができたての満州国（中国人は偽満、ウェイマンとよんでいた）に招かれ、一家を挙げて移住した。建築と土木を専攻した父は、満州北部の都市、ハルビンの都市計画を行うために、

日本の内務省（現・国土交通省は内務省の一部だった）から派遣された。この移住が小学校へ上がったばかりの六歳の少年にとつて、どれほど大変なカルチャーショックであったかは、ご想像にまかせる。ハルビンの語源は、満州女真族家栄から転訳したものであるらしい。元来モンゴル人の漁師がこの街に面する満州一の大河、松花江（ロシア語でスنگリ）で魚を捕っていた、という名もない寒村であった。そこに一八九六年、帝政ロシアがシベリア鉄道の支線、北清鉄道（清国北部鉄道・満州里（綏芬河間）新設の拠点として、パリに倣った近代ヨーロッパ風の都市を建設したものであった。

日露戦争後、ロシアは北清鉄道を日本に譲った。それらの権益をもとに、一九〇六年、満鉄（南満州鉄道株式会社）が設立された。住民は約百万人で、中国人、日本人、朝鮮人、モンゴル人、アイヌ人などの極東の少数民族、ユダヤ人、回教徒（トルコ系の言葉を話すウイグル人など）と、実に多彩であった。もちろんロシア人やウクライナ人、中央アジア諸国民の多くは、ロシア革命を逃れて亡命してきた人びとで、エミグラントとよばれていたが、北清鉄道従業員のソ連人も、少なからず住んでいた。それに加えて欧米諸国からも経済利権を求めて来ており、特にユダヤ系の人びとが目立った。

当時、満州国では、「五族協和」のスローガンが唱えられ、日本人、満州族、漢民族、蒙古族、朝鮮族を五族とし、「すべての民族は平等」と教えられた。しかし、実態は支配民族の日本人の横暴は目に余るものがあつた。日本人中学へ進学すると、いきなり講堂へ集められ、「チャンコロ（中国人への蔑称）を殴れ」と檄を飛ばされたのには、驚きと怒り、軽蔑さえ感じた。日本人には、敗戦まで米が配給されたが、それ以外の民族（当時日本の植民地にされ、公式には日本人とされていた朝鮮人も含め）は、高粱^{ゴリヤン}、トウモロコシなどの雑穀しか配給されず、もしも米を持っていると、ただそれ

だけで、犯罪とされた。

一九四五年八月九日、私の住んでいたハルビンの馬家溝の市営住宅のすぐ前にハルビン飛行場（今はずっと郊外へ移転）があったが、そこへいきなり空襲があった。内地では、米軍による全国各地の空襲、さらに広島、長崎では原爆が投下されたとも聞いていたが、私にとつてまさに初体験であった。前庭の大規模な防空壕に駆け込もうとした時は、もう爆撃は終わっていた。当時、日本と中立条約下にあったソ連の空爆であった。

そうした情報はすでに得ていたので、大して驚かなかったが、驚いたのは、その翌日の大爆音だった。どこかなと思っていたら、あとで平房だと知った。私の家の南方数キロ先にあるハルビン郊外、平房には、かの悪名高い七三一部隊があった。その、世界で最大規模の細菌戦部隊は、日本全国の優秀な医師や科学者を集めて、三〇〇〇人以上のロシア人、中国人、モンゴル人捕虜をマルタ（丸太）と呼び、非人道的な生体実験を行い、実験材料として細菌兵器を開発していた。この部隊の指揮者・石井四郎軍医中将をはじめ、幹部連中が設備を爆破して脱出した時の、爆発音だった。

日本降伏は在留邦人の間ではすでに囁かれており、一日の玉音放送は何も聞こえないほど雑音がひどい代物であったが、想像はついた。父は「これでおまえも死なずにすんだな。身体を大切にしろ」と言ってくれたが、日本に帰り着くまで、何があるかわからないというのが正直な感懐であった。

父はさらに、私と妹、そして母に向かって、「こんな所に連れてきて、すまなかった」とも言った。じきにソ連兵が進駐してきた。すべての在留日本人が祖国を失い、敗戦国民、いわゆる難民の境涯になったわけである。

当時、母の姉が奉天（現・瀋陽）におり、その長女（私の従姉）が結婚して、ハルビンの中心地、南崗の市営住宅に住んでいた。従姉の夫は軍人であつたため、シベリアに連行され、幼い子を抱えた彼女は妊娠中で、母はその看護のため家族とともに南崗に行き、私は一人、馬家溝で留守番をした。

進駐してきたソ連兵はまことに乱暴な連中で、軍人であろうがなからうが若い男はシベリアに連行するといわれていた。中国人も積年の恨みを晴らすべく、各地で日本人の財産を略奪した。我が家も一七歳になったばかりの私一人では、どうしようもなく、それこそ身体を守るのが精一杯で、家財はすべて、略奪されるに任された。支配民族を気取つた当時の日本人は、外国語を学ぶ必要を認めず、日本語で用が足りたので、何語も喋れはしない。英語も中学二年くらいで、敵性語ということで学習は打ち切られていた。もちろん、戦勝国となつた中国人、ロシア人などが日本語を使ってくれるわけもなく、実に心細い想いをした。

ついに無一物となり、南崗の家族と合流したが、妹はソ連兵の強姦を恐れ、髪を切つて服装も少年のようにしていた。私と父は、ソ連兵が来ると床下へ隠れ、シベリア連行を免れた。中学の同級生には連行された者もあつたらしい。ソ連兵に続いて国民党軍が進駐し、父は警察へ連行されたが、幸い、一週間ぐらいで釈放された。歳をとつており、仕事も、都市計画という平和なものであつたから。

秋になると、北部の開拓団の人びとが、ソ連軍侵攻に伴う多数の難民となつてハルビン市へ流入してきた。一時、日本人の人口は激増し、数知れない状況であつた。日本人学校は、すべて難民収容所となり、環境は劣悪を極めた。おまけに七三一部隊の飼つていたネズミやノミ、シラミが、平房施設爆破に際して逃げ、冬の到来とともに、細菌兵器になる予定のペスト、発疹チフスなどの病原菌、リ

ケツチャやウイルスが活動を始めたらしい。宇宙服のような防疫服の人びとが、死体を始末するため、トラックに積んで運ぶ姿が見られるようになった。私の級友も多く命を失ったが、その一人を焼いた時の思い出は忘れられない。川岸に運び、薪の山の上に置き、灯油をかけて火をつけるが、なかなか燃えつかない、人体があんなに燃えにくいものとは、初めて知った。

その後、東北聯軍という共產党系のゲリラ部隊が進駐してきた。一般には、八路軍と呼ばれ、延安に本拠を置いた人民解放軍の前身である。三大紀律、八項注意という、実に厳正な軍隊で、礼儀正しく、敗戦国民に対しても、「悪いのはファシストであり、日本人民には何の罪もない」と告げた。父は、「都市計画には学ぶべき内容がある」と、大切にされるようになった。

一九四六年春になると、在留日本人を帰国させる事業が始まった。

途中の状況は、さっぱりわからず、相当困難なものらしいといわれたが、いよいよ帰国となったとき、父はハルビン市政府から、「都市計画を策定したそうだが、完成するまで残留してもらいたい」と頼まれた。父の同僚にも、水道やその他の技術者に同じような要請があり、祖国の後ろ盾がない市民としては、断るのも怖ろしい。私と妹だけ帰国することも考えたが、状況は、いっさい不明。内地で子どもだけが生活できるか、進学も可能だろうか。まして、前記の従姉が出産した赤ん坊は混乱を極めた環境では育たず、従姉も産褥熱により、あとを追うように亡くなり、残された五歳と二歳の男の子を預っていたので、その子たちをどうするかも大きな問題であった。

いろいろ悩んだ末、私たち家族は残り、幼子は帰国する近所の人に託すことになった。ハルビン駅まで帰国者を送りに行った時の、彼らの心細そうな顔は忘れられない。家族一同、幼い子どもたちが

無事帰国できたか、心配のしどろしどろであったが、風の便り（日本との連絡は全く途絶えていたが、なんとなく話は伝わるもので）に、父親の郷里に無事着いたらしいことがわかり、胸をなでおろした。残ったのはいいが、中学卒業だけでは中途半端である。取りあえず残留していたそれぞれの分野の学者を頼って、英語と数学くらいは補習してもらった。国語などは参考書で独習した。幸い父の給料は、強制的に残留させた手前、そう悪いはずはなく、一家四人食べるにこと欠くことはなかったが、それでもソ連兵にタバコを巻いて売ったり、辞書の紙が最も巻きやすいことも覚えた。ソ連兵の雑役をしたり（もちろんシベリア送りになる心配がなくなつてからであるが）、あらゆる小遣いかせぎをした。化学が好きであったから、麻黄という漢方薬を買つてきて、薬剤師と組んで、エフェドリン（咳止め）を抽出したり、いろいろなことをやった。あとでこの物質が、麻薬（覚醒剤）の原料となることを知り、氣味が悪かった。あらゆる経験をしながら、なんとか食べ、学習した。

しかし、学校へ行つて学問に触れたい欲求はやみがたく、一九四九年、新中国（中華人民共和国）成立の年、ソ連赤十字半月協会立の医専（ハルビン医専）へ中国人学生を入学させるという情報をキヤッチし、それに便乗させてもらった（この懐かしの母校は、松花江の岸边にあったが、先年ハルビンを訪ねた際には高層ビルに変わり、児童病院に使われていた）。

予科ということで、二年間、ロシア語と高校卒程度の理科と数学を、ロシア語で学習し、三年目から医学をロシア語で学習するのである。マルクスレーニン主義が正課というのも驚いたが、なかなか興味深かった。しかし、ソ連の正式名称を覚えるだけでも大変であった。小説などでおなじみの方もあろうが、ロシア人は、名前と父親の名前（父称）と姓を呼ぶのが正式であり、政治家や学者の名前を父

称とともに覚えるのは、大変な仕事であった。

予科のクラスの日本人は、私と妹を入れて五人。あとは中国人、朝鮮人、モンゴル人、ウイグル人、そして満州人……と、多民族であった。共通語は中国語であり、二年目には学生組織、学連の委員に選ばれ、学習部長をやることになった。学生大会で報告演説をさせられたが、度胸をつける上では役に立った。

試験はすべて口頭試問で、正字法（日本で言えば習字）以外、ペーパーテストは、いっさいない。化学の試験は黒板に構造式を書き、反応の際に出入りする熱量を計算させられる。政治の試験はスターリンの名前を正式に言わされる、「ヨシフ、ヴィサリオノヴィッチ、ジュガシビリ」、グルジア人だということも知った。スターリン（鋼鉄、スチールの意味）は、地下活動の際のペンネームだそうである。

三年目には本科進級。解剖学、生理学、細菌学、法医学、生化学、薬理学、寄生虫学、薬理学と、多方面にわたる基礎医学を終了したのが、四年目の春で、六月に期末試験があった。試験は当然口頭試問。たとえば解剖は教授が骨を手で「この穴はなんというかロシア語とラテン語で答えよ。そしてここを通る神経の名前と血管の名前は」といった具合である。

実はロシアの医学教育はフランス式で、ドイツ式の日本や英米の医学教育と、だいぶ違う。基礎医学を学ぶ段階で早くも病院に行き、臨床に携わるのである。私は鉄道病院（旧満鉄病院）で実習することにした。最初は臨床試験室で胃液や血液を採取し、分析する。化学好きの私には嬉しい学習であったが、半年もすると結核病棟へ行かされた。聴診器の使い方、肺の状況を知るには音を聞き分けなければならぬ。ストレプトマイシンという抗生物質はまだ珍しかったが、その後遺症で耳が遠くな

った患者の脊髄液を採取させられたときは怖かった。

一九五三年になって帰国の可能性が出てきた。中国との国交はまだなかったが、中国側からの呼びかけがあり、日中の民間団体が努力した結果、人道問題だからと、残留日本人の帰国を実現させることになったようだ。宋慶齡さんや参議院議員高良トミさんの名前が記憶に残っている。

ここでまた、帰国すべきか、中国に残るか、あるいはソ連へ留学するにしても日本人としてのアイデンティティをどう保つか、判断に迷った、七年前と同じ状況だったが、熟慮の末、帰国を選んだ。

後悔はしていないが、もし残っていたら、後の文化大革命の困難に耐えられたかどうかかわからない。また医専卒業後ソ連に留学したとしても、ソ連解体の今日、思いはさまざまである。

この年三月、スターリン死去の報道に接しながら帰国した。ソ連も中国も激変するだろうと予感した。帰国の途上、錦州市で一か月、天津市で二週間待たされ、天津から興安丸に乗船し、玄界灘の荒波にもまれながら乗船三日後に舞鶴に到着した。

ここで、阿部行蔵氏（都立大学教授・西洋史）にお世話になった。入国審査などで舞鶴に数日留め置かれたが、ある日、「帰国者が集会をする、内閣調査室の役人が混じって何か調べる」という騒ぎがあり、阿部先生がその役人のつるし上げを指導したとして、後日裁判にかけられるという事件があった。帰国早々とんだ洗礼をあげたものである。

裁判は長引き、先生が事件に無関係なことを証明する証人に立ったことも忘れたい。

（東京ロシア語学院理事長、日本ユーラシア協会副会長）

満州の収容所で死んでいった孤児たち 増田 昭一

私は、一九四五（昭和二〇）年の四月、大学受験のために、満州の野戦兵器廠の部隊長をしている父のいる満州に渡りましたが、途中、釜山への連絡船が、米軍の潜水艦の出没により、三、四日延着したため、私を含め十数人が受験に遅れました。しかし、八月中旬、大学が追加試験を行うという約束で、満州に滞在することになりました。

父の部隊は、国境に近い愛河という場所に駐屯していましたが、八月九日一二時、ソ連軍は、満州全領土に侵攻。父の命令で、部隊は、最後の地上戦、麻刀石の戦闘に参加。父は、奇跡的に助かりましたが、シベリアに三年間抑留され、帰国後四年めに亡くなりました。

母と私は牡丹省愛河で戦闘に巻き込まれましたが、命は助かり、九月中旬ごろ、満州新京敷島地区難民収容所（新京西広場小学校）に入りました。しかし十一月、発疹チフスにかかり、母は死亡。私は生死の境をさまよった末、なんとか回復し、一九四六年の二月から新京敷島地区伝染病院に雑役夫として働きましたが、中国内戦で失職。その年の一二月中旬、帰国しました。帰国の途中、結婚した姉二人は亡くなったことを知りました。

私は一九四七（昭和二二）年四月から、日本の小学校の教師になりましたが、収容所で生活を共にした、たくさんの孤児たちの、あまりにもみじめな最期が忘れられず、教え子たちに語り継いできました。

一九八五（昭和六〇）年、職場を退きましたが、生きて帰れなかった孤児たちの真実を、多くの人たちに知ってもらいたいと思って、絵本を描きつづけています。

戦火に追われ、肉親をソ連軍や中国の暴民に殺された孤児たちは、やつとの思いで、満州各地の難民収容所にたどりついたのに、大人たちは、孤児たちに冷たかった。なぜなら、生き残った家族を大切に生きなければならなかったからです。

孤児たちには、仲間だけが頼りでした。そして、多くの孤児たちは、仲間を裏切らず、助け合いながら、ぼろきれのように死んでいきました。

特にかわいそうだったのは、三、四歳の子どもたちでした。

「お父さん」「お母さん」という代わりに、親代わりになった、年上のお兄ちゃんお姉ちゃん孤児の名前を呼びながら、旅立ったのです。

親代わりになったお兄さんお姉さん孤児たちも、立派にお母さん、お父さんの役目を果たして、死を前にしても淡々として、誰もうらむことなく、友達に感謝しながら、春を待たずに死体置き場へ去っていきました。

その孤児たちの姿をえがいた童話を四つ、ご紹介します。どれも、すべてほんとうに起きた話です。お読みいただければ幸いです。

（なお、私は、絵本「ともちゃんのおへそ」、「来なかったサンタクロース」のほか、『満州の星くずと散った子どもたちの遺書』、『約束「満州の孤児たちの生命の輝き」を夢工房（TEL〇四六三―八二一七六五二）から、『金のひしゃく（北斗七星になった孤児たち）』をHARRIMAYA（TEL〇三―五九三五一六二九〇）から刊行しております。）

ともちゃんの話

戦争に巻き込まれ逃げる途中、「泣き声がうるさい。暴民に見つかるみんなが殺される。始末しろ」と言われて、母親は仕方なく自分の子どもを小川に連れていきました。

「お母ちゃん、小さいおさかながいっぱいいるよ、見て」

と言った途端に、母親は、子どもの頭を押さえて水に沈めました。

小さい幼児の口から、ポクン、ポクンと泡が流れていきました。

しばらく過ぎて、その泡が消え、髪の毛が、川草のように流れに揺られていました。

母親は川端で泣き崩れました。

「よくやった。それでいいのだ！」

「これでみんなが助かるかもしれない。どうせ死ぬのだからな」

母親の背に、二、三人の大人の声が響きました。

この話を私にくれたのは、十三歳の少年でした。

彼はうなだれて、「ともちゃんは、僕の弟の生まれ変わりです」と、ポツリと言いました。その、「ともちゃん」の話を聞いてください。

ともちゃんのおへそは お母さんの顔

三歳の男の子がいました。

お母さんが、担架で死体置き場に運ばれる
とき、

「おじさん待つて。担架を下ろしてちょう
だい」

ともちゃんはいきなり、おへそを出しました。
そして、ともちゃんのおへそと、やせ細っ
たお母さんの顔を、なんども見比べました。

「おかあちゃん！　ともちゃんわかった！」
大きな声を出しました。そして泣きだしま
した。

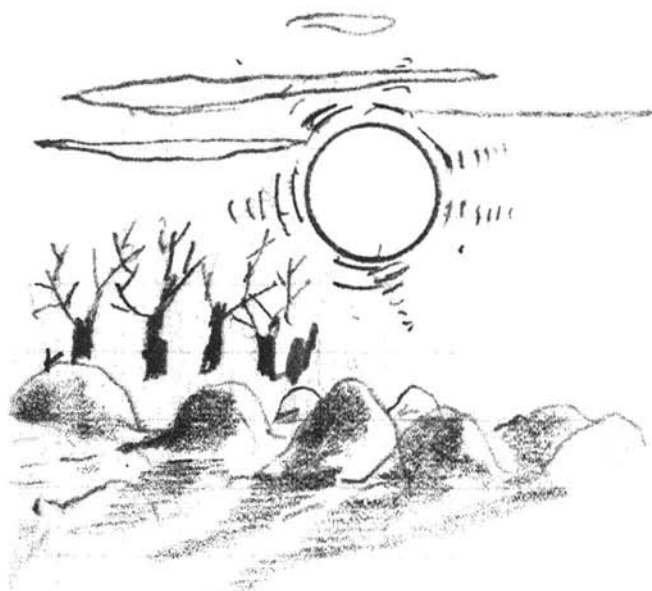
係のおじさんは、

「もうすぐ、坊やも、お母さんのいる天国
にいける。泣くな」

と言って、担架を持ち上げました。

それから、ともちゃんは、毎日のように、
教室の片隅で、おへそを見るようになりま
した。

それを不思議に思った、お兄さん孤児たちは、



「何をしているの、寒いのにズボンを下ろして上着をまくりあげて」
ともちゃんは大きな声で、お兄さんたちに言いました。

「ともちゃんのおへそは、お母さんの顔！」
まわりにいたお兄さん孤児たちは大笑いしました。



しかし、たどたどしい言葉で説明するともちゃんの話を聞いていたお兄さん孤児たちは、しゅんとしてしまいました。

そして、お兄さん孤児たちも、おへそをだして、

「お母さん、お母ちゃん、……」

と涙声で言いました。

新京の街にも本格的な冬がやって来ました。収容所の外も中もすっかり凍りつき、子どもたちは、この寒さを乗り越えることができませんでした。

孤児たちは、一人また一人と、黄色くなつた葉っぱが、木枯らしに舞うように、空へかえっていきましました。

ともちゃんも、まわりのお兄さん孤児たちも、息をひき取るとき、体をくの字に曲げ、おへそを通して母を思い、天国へ旅立ちました。

来なかつたサンタクロース

一九四五年一二月二五日の朝、難民収容所の運動場の片隅で、三歳の少女、のんちゃんが、降り積もる雪の中で、息絶えていました。

「お米や、お味噌をたくさんもらえるように、サンタさんをお願いをしてみるね。この靴下小さすぎるかな」

いつも心配そうにそう言っていたのんちゃん。

クリスチャンの家に育ったというのんちゃんは、心配そうにそう言いながら、赤い木綿の靴下を脱いで、孤児たちが眠る部屋の壁につるしました。

私が目を覚ますと、のんちゃんの姿は見えません。

私は動くことができる四人の孤児を集めて探しに行きました。

とても寒い朝でした。

氷点下二〇度以下はあったでしょう。

昨日降った雪で、運動場は銀世界でした。

収容所の門のそばにのんちゃんがありました。のんちゃんは、小さな赤い靴下を思いつきりひろげて握り締めたまま、冷めなくなっていました。

のんちゃんは、いつまで待っても来ないサンタさんを迎えに、門まで行つたに違いないとおもうと、深い悲しみがあふれました。

四人の孤児たちは、つめたくなつた体をかわるがわる抱きしめました。

のんちゃんが歌っていた「きよしこのよる……」の歌を、

私は一小節しか知らないで、同じ歌詞を何回も歌ってあげました。

クリスマスのことは、当時の子どもたちは、全然知りませんでした。

軍歌しか知らない孤児たちにとって、初めて歌った歌です。

ばらばらだった歌声が、そろそろようになりました。

「のんちゃんが生きていたとき、一緒に歌ってあげたかった」

佐助兄さんが、ポツンと言いました。

その言葉を聞いて、みんなは涙しました。

新聞紙がぼそぼそと燃えているストーブの傍に、のんちゃんは寝かされていました。

まだ、しっかりと、赤い靴下を持っていました。

「そうだ、サンタクロースに手紙を書いて、のんちゃんの靴下に入れてあげよう」

一郎兄さんが言うと、みんなは賛成しました。

それぞれ紙切れを見つけて書き始めました。

教室には粉雪が舞っていました。

サンタクロースのおじいさんへ　一郎より

「僕はクリスマスとかサンタクロースについて全然知りません。

のんちゃんが「サンタのおじいさん」と言ったのを聞いたので、きっと、よいおじいさんだとおもいます。

のんちゃんは今日、天国に行きました。

のんちゃんがここへ来た時には、三〇数人の仲間たちがいました。二か月過ぎて、のんちゃんも、いなくなつたから、今は十人ですが、のんちゃんは、おながが減つた僕たちのために、サンタさんを呼びに、はげしい雪のなかに出かけたのです。サンタクロースのおじいさん、お願いです。のんちゃんの大好きだった、鮭のお茶漬けをたくさん食べさせてあげてください。のんちゃんにあつたら言つてください。僕たちの仲間が天国に行ったら、そのときごちそうになります。サンタのおじいさんは来なかつたけれど、のんちゃんが代わりになつて、みんなにやさしい気持ちをくれました。サンタクロースのおじいさん、ありがとう！」

のんちゃんが亡くなつたあとを追うように、栄養失調やいろいろな病気のために、孤児たちは次つぎに死んでいきました。

みんなから愛されて先に死んだのんちゃんは、幸福だったかもしれませんが。

のんちゃんは、天国にきたお兄さん、お姉さん孤児のために、きっと、鮭のお茶づけを、ご馳走したでしょうね。

汚れた空き缶を磨いて死んだ高山君

みんなが、いつも調理に使つて、煤（すす）で真っ黒くやけこげた空き缶を、きれいに磨きあげて死んでいった孤児がいました。名前はたしか、高山君という、中学校二年生の少年でした。

収容所に来たときは、病身でしたが気が張っているらしく、返事や受け答えがハキハキしていまし

たが、とりガラみたいな体つきでした。

栄養失調が相当進み、そのうえほかに病氣を持っていたようです。

歩く時も、補助棒を持たなくては歩くことができない状態でした。

彼には仕事を課すことは出来ないかと判断した私は、高山君呼びました。

「体がつらいでしょうね、熱もあるのでしょうか」

「いや、そうでもないのです。この部屋の友達は、みんな同じ病氣を持っているようです。無理して自分の仕事をやっているのが、よくわかります。みんな病氣なのですから、僕も、杖につかまって歩ける間は、みんなのお役にたちたいのです」

「それは、ありがたいことですが、自分のからだと相談して下さい。もう少しからだが回復してから働いてもらいます。無理して、これ以上悪くなっても困りますから」

そう言う、意外に素直に、

「ありがとうございます。からだは、これ以上悪くならないように努力します」

と言って、ニコツと笑って杖を頼りに立ち上がりました。

私が高山君を見て仕事の分担をやめたのは、命のあかりが消えるのも間もないと判断したからです。栄養失調と消化器系の病氣は、あと、どれくらい生きられるか、ひと目でわかります。体つき、皮膚のたるみ、顔色、下痢、血便、発熱、食欲、体力。総合的に判断すると、プラスマイナス二、二日の誤差で当てることができるようになりました。

孤児たちは、医療を受けるお金はありません。

その病気から逃れるためには、本人の生命力に頼るしかありません。

私は高山君を見たときに、「あと一〇日以内」と見たわけです。ですから、その間、彼の自由にさせたかったのです。

ところが、高山君は、私の予想に反して、仕事を見つけたのです。いつも炊事に使っている缶を、きれいに磨き始めたのです。仲間の真っ黒に汚れた缶を磨き始めたのです。

高山君自身も自分の余命に気づいたのでしょうか？

室内が一〇度内外という厳しい気温の中でみがいたのです。

簡単な仕事に思えるかも知れませんが、寒いところでやる仕事です。手袋をしてない手でさわると、すぐに指が缶についてしまつて、取れなくなります。



高山君の手袋は、擦り減って使い物になりませんでした。

彼は麻袋（マアタイ）の切れ端を手で巻いて、黙って、丁寧に丁寧にみんなの缶を磨いていました。満州特有の細かい粒子の赤土を、雪のない、校舎の縁の下に潜って掘って来ました。

あかぎれで手を血で染めて、自分の死を計算したように、孤児たちの必需品、全員の空き缶を磨き上げて、あの世へ旅立ちました。

たいへん口数の少ない彼は、恥ずかしそうに、「磨き上がりました」と言いました。

「ありがとう本当にありがとう。手が痛かつたらうね」と、友達から言われると、うれしそうな顔をして、「うん……」と言ってニコッと笑みを浮かべます。

死ぬ二時間前、ムシロの上に座って、

「皆さんにお別れのあいさつをいたします。そのままで聞いて下さい。

この部屋に来たのは、一五日前のことです。たいへん短い期間ですが、病気の私と仲良くしてくれてありがとう。お世話になったお礼に、空き缶を心込めて磨いておきました。

時どき缶を見たら、高山のことを思い出して下さい。ありがとうございました」と言って、ていねいにお辞儀をして、倒れるように、ムシロにうつ伏せになりました。そして、息を整えて、違いずるようにして教室の出入り口の方へ行きました。

それを見た孤児たちは、高山君がどんな行動をとるか、高山君の日頃の言動からわかりました。

「無理せんでも良いのですよ……」

「それでは、自殺ではないの？」

「自殺は、ぼくたちの仲間では許されないので。行かないで、少しでも暖かい部屋で……」

「行かして下さい。これ以上、皆さんに迷惑をかけることはできません。死に場所まで行ける体力は残っていますから……」

頑として言うことを聞きませんでした。

彼は、ゆっくり、ゆっくり二、三メートル進むと、息を整え、亀のように這いずって、戸を五〇センチほど開け、閉めるとき、黙ってみんなにわかるように、ていねいにみんなの顔を一人一人見つめるように見回し、手を合わせて、ていねいにお辞儀をして、死体置き場の方へ這って行きました。

意志の強い高山君のこと。止めるのを無理だと考え、それ以上追いませんでした。

追って止めさせる体力は、私たち仲間にはありません。

「がさ……ざわ、ざわ、ざわざわ」

彼が動くたびに、新聞紙をたくさん巻き付けていたのでしょう、その音が聞こえて来ます。みんなは下を向いて、すすり泣く孤児もいます。

死に向かう時の意志の強さ、行動を止めさせることができないことを、だれもが知っていました。悲しい音を聞かざるを得ません。

その音は、なおも遠くの廊下から、風の音と共に聞こえて来ました。もう、どうすることもできない気持ち、なんとかしなければならぬという気持ち。いらだつ気持ち。みんなは、歯を食いしばって我慢をしています。

「みなさん、お世話になりました……もうすぐつきまーすー あり……がとうございます」

「みな……さんが、そろって……にーはーんへ……」

と風にあおられて、ときれときれに聞こえて来ました。

その声を、みんなは、むせび泣きながら、聞きました。みんなの心の中に強力な印象を最後に残して、高山君は去って行きました。

男の意地だったのでしょうか？ いいえ、それだけではなさそうです。みんなに迷惑をかけたくなという一心だったに違いありません。そして、みんなの心に残る行動にでたのです。

六〇年過ぎた今も、そのときの様子を、はつきりと思い出すことができます。あまりにも悲しい思い出です。

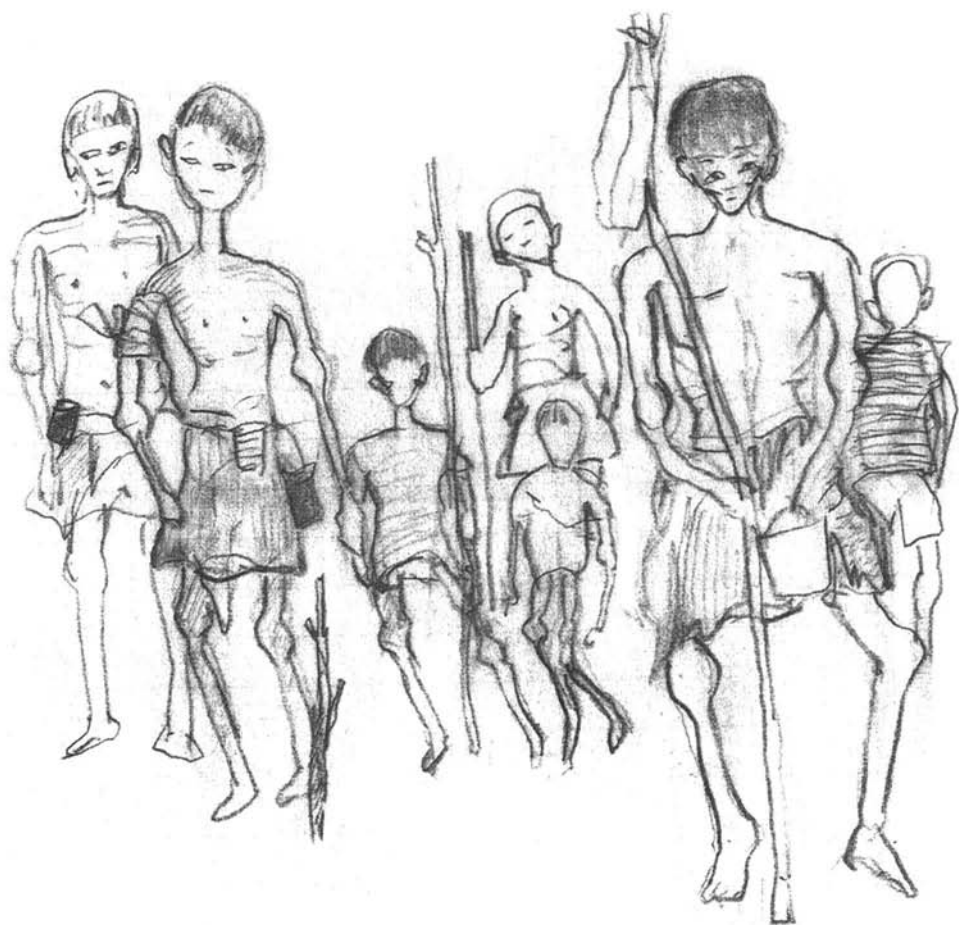
床を磨きあげて死んだ湯山君

湯山君は、収容所に来て、二週間ほどで栄養失調のため死にました。

吉林省扶余県の、ある開拓団にいました。

吉林省は満州のほぼ真中にあります。松花江流域の平野にあって、大豆、コウリヤンがよく取れたそうです。

ソ連軍の参戦は一日に知りましたが、暴民に襲われ、ソ連軍の戦車部隊に包囲され、全滅に近い状態になり、やっと開拓団の四分の一が生き残り、満州各地を着の身着のまま逃れて、ようやく新京についたのは一月の中旬でした。



その姿は骸骨のようにやせ細り、身につけていたのは、ほろほろの夏服に麻袋を巻き付けているだけの姿でした。彼は、最初に私のところに挨拶に来ました。

「こんな格好で失礼します。吉林省扶余県から来ました。湯山と言います。よろしくお願いします」
よろめきながらも、しっかりと口調で言いました。もう何か月も体を拭いたことがないので、垢にまみれて、すごい臭いでした。

ちょうど、遅い朝食でしたので、コウリヤンを炊いた残り火で、缶詰の缶一杯分の水（五合程度）を沸かしてあげて、お湯で体を拭くように言いました。

湯山君は、大喜びでしたが、すぐ、困った顔をしました。

早くしないとお湯が水になってしまいます。

「早くしなさい」と怒ったように言うのと、困り果てた顔をしました。

それで、私は気がつきました。体を拭く布がありません。すぐに、私が持っていた手ぬぐいを貸して上げました。石鹼代わりの灰を、私の小さな缶に入れて渡しました。

彼は教室の端で、体をていねいに拭いていました。

体は骸骨のようでしたが、見違えるように、きれいになりました。

二、三日は、割合に元気そうでしたが、それから後は寝込むようになりました。

しかし、這いずりながら、彼が必ず毎日やったことがありました。

麻袋の切れ端を雑巾のように使って、ストーブの回りを五〇センチくらい、きれいに丸くみがき上

げたのです。

面積は小さいけれど、だれの目にもぴかぴかに磨き上げられた床に見えました。

それが、私たちに見せたお礼と感謝の気持ちだったのでしょうか。

彼は死ぬ二時間くらい前に、正座して、大きな声でみんなに言いました。

「皆さん！ 短い時間でしたが、この場所で生きる楽しさを味わわせて戴きました。

皆さんにお世話になるばかりで、なにもお礼ができないで死んで行くのが残念です。

あの世で……あの世で……皆さんが元気で日本に帰ることができるようにお守り致します。

必ずです。必ずです。ほんとにありがとうございました」

それは涙声でしたが、今まで聞いたことのない、大きな声でした。すると、真向かいの貞子ちゃん
は言いました。

「みんなお互いさまよ、もう悲しいお礼の挨拶はたくさんよ！ でも、あなたが死んだら、あなたが一所懸命磨いたストロープの回りの床を見て……、私たちがみんな死ぬまで、きっと湯山さんのことを思い出しますよ」

彼はそれを聞いて、自分のした小さい仕事をみんなに、認められたのがどんなにうれしかったのでしょうか。

「みなさんありがとう」

と意識がなくなるまで言い続けて死んでいきました。

部屋のすきま風を防ぎ死んだ佐多君

佐多実君は、ある日、一所懸命、計算しているのです。

「数学の計算をしていますのかな。君は数学が好きだからなあ、将来、科学者かな」

「まあ、そんなところです。まじめな話ですが、増田君！僕は、いつ頃、死ぬことになりましたのかなあ。栄養失調で消化器官がやられて、下痢ばかりですよ。もうそろそろ計算しなければいけないと思つてね」
「まだ大丈夫ですよ。この程度じゃ。あと二か月頑張れば春だからな。三月ですよ。暖かくなると、元気になるですよ」

「俺の計算では、あと一か月あるかどうかです。へたに計算すると、俺、ハダカになつてしまうよ」
「なんだい、ハダカになるとは……。佐多君！とにかく生きることです。不吉な計算しないでくれよ。粉炭を作ったから飲んでくれますか。これは、案外効くようですよ」

「効くことは効く。確かに。しかし、あとで腹が張つて苦しくなるから……困ります。」

「気持ちがありますよ」

彼はさびしそうに笑いました。

彼の寿命は三週間と、自分で計算したらしいのです。

「計算がむずかしい」と言つた理由がわかりました。最初に始めた仕事は、自分の寢床の、むしろを切つて、窓板の透き間に入れたり、覆つたりしたのです。

佐多君が細く火箸のようにやせ細るとともに、教室内には寒い風や、粉雪が舞うのが少なくなりま

した。それとともに、佐多君の身の回りの品がなくなっていました。

最後に残ったのは大切な軍隊用の毛布。それにくるまって、あぐらをかいて、横にならずに毛布を頭からかけて寝ていました。

「俺と一緒に寝ましようよ。遠慮は要らないよ」と言うと、

「もう俺は、人間のおいをしていないよ。動物以下だからな。これで、風や粉雪は教室に少しは入り込まないでしょう」

見ると、誇りに満ちた顔でした。

「きつと佐多君のことは永久に僕たちの仲間に残るのでしょう。よい仕事をしましたね」と言うと、
「どうもありがとう。何時まで保つかわかりませんが、二、三週間は保つでしょう」

彼は照れくさそうに笑いました。

それから、二日目の朝早く、静かに息をひき取りました。

その日は寒い風の吹く日でした。でも、吹き込む風がほとんどなくなり、みんなの寝息だけが聞こえてきました。

佐田君はきつと、みんなの寝息を、誇らしげに聞いて死んでいったに違いありません。

死んだ彼の回りには、むしろも、麻袋も、リュックサックもありませんでした。

毛布は八歳の女の子にかけられていました。

彼は教室の板壁によりかかり、背中を丸くし、腕を組んで死んでいました。

(絵本作家)



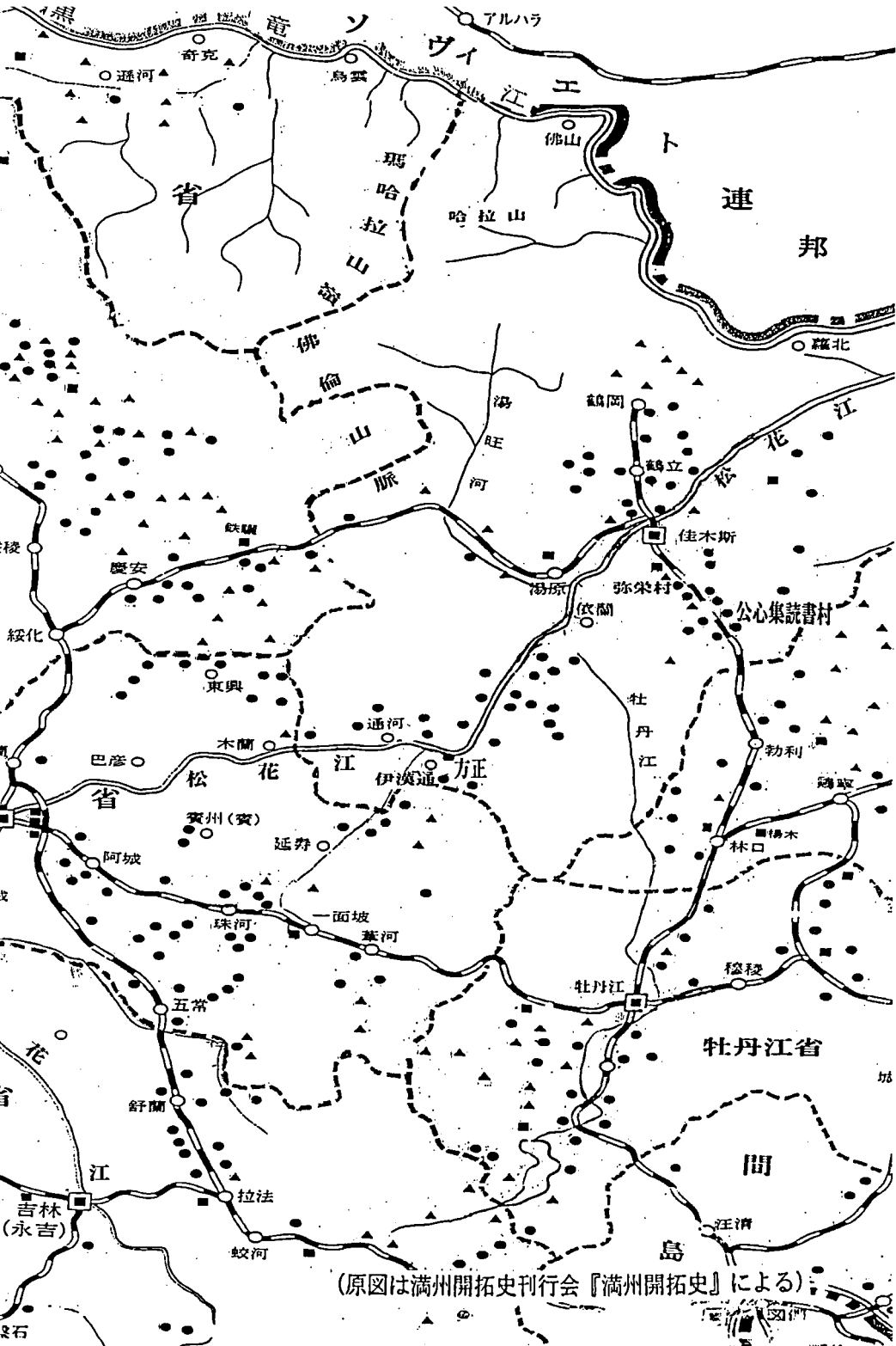
開拓団の役員たち。向かって左から農業指導員、家畜指導員、五人目が団長。
(日の丸の旗と満州五色旗を掲揚)



開拓団の朝礼。毎朝、「お国のため、関東軍のために増産に励もう」との団長訓示のあと、
日本の方角に「宮城遙拜」をした。右端から二人おいて鈴木則子さんの二人の姉と子ども
たち。写真提供は上下とも「中国帰国者の会」名誉会長、「中国残留邦人国家賠償請求
訴訟」控訴人代表鈴木則子さん

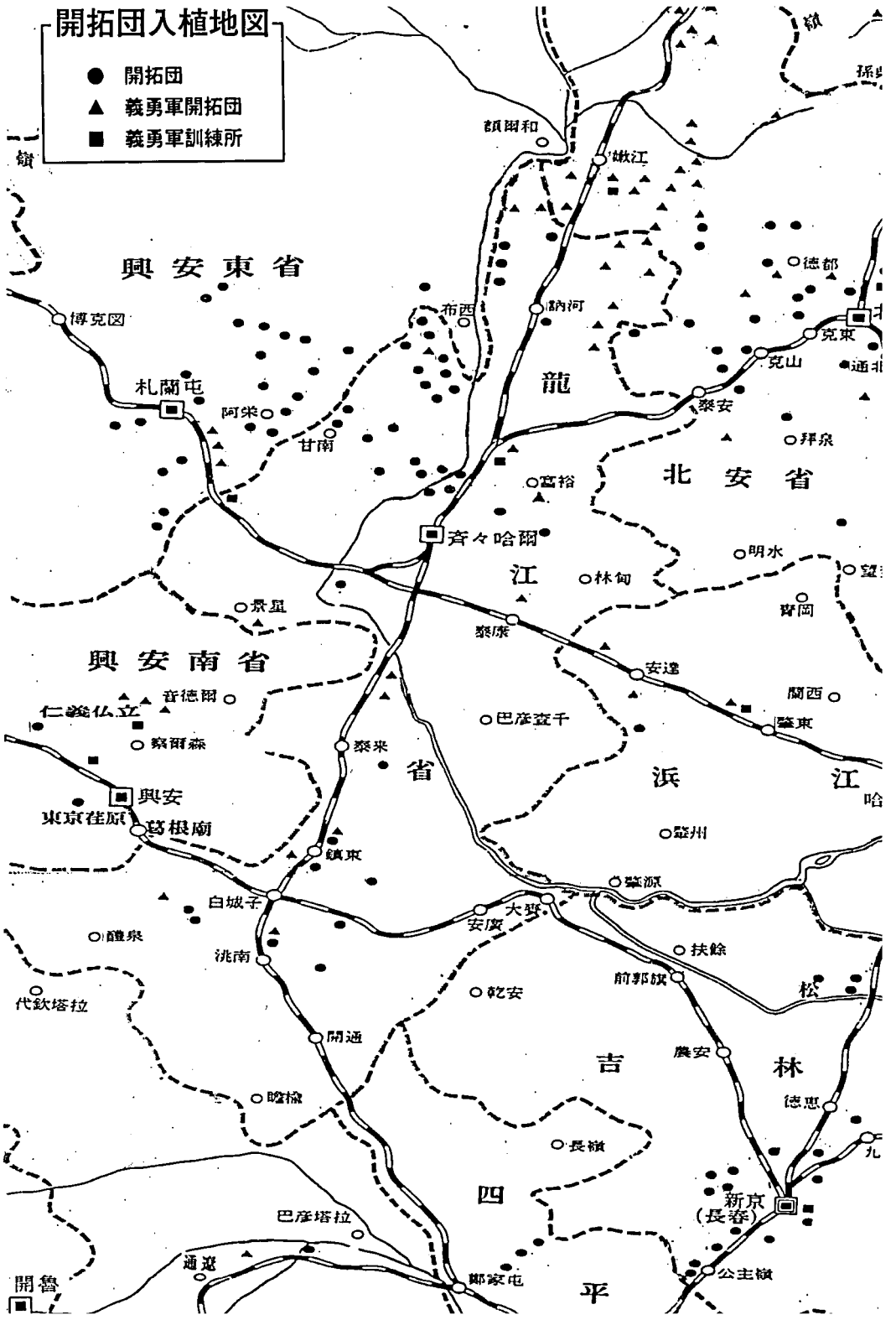
今も終わらぬ戦後 1

中国残留婦人と中国残留孤児



開拓団入植地図

- 開拓団
- ▲ 義勇軍開拓団
- 義勇軍訓練所



中国残留婦人・残留孤児はなぜ生まれたか

小川 津根子

いま、国家賠償を請求して、三つの中国残留婦人裁判と一五の中国残留孤児裁判が、全国各地で行われている。残留婦人と残留孤児は、かつて国策とされた大量移民政策のもとに、「満州」——現在の中国東北地方に送られたのち、一九四五年八月の日本敗戦時に、ソ連軍の侵攻と逃避行の混乱のなかで置き去りにされ、そのまま長い歳月を祖国の政府から放置されて、帰国がかなわなかった人たちだ。一九七二年の日中国交樹立当時、中国側の発表による残留日本人は六〇〇〇人、日本側は一〇〇〇〇人と推定しながら、いっこうに積極的な引揚げ策は講じられず、ようやく帰国したあとも国の援護が乏しいために、帰国者は苦勞の多い生活を余儀なくされている。

提訴の理由は、「国は、早期帰国の義務を怠り、帰国後は、人権侵害の回復と人間の尊厳の確保のための施策の義務を怠っている」というものだが、これら、いくつもの裁判を通して、戦後六〇年を越えたいまなお、戦争によって受けた傷がどれほど深く、痛ましいものか、あらためて明らかにされた。また、この人びとの存在を忘れ、または知ろうともせず、過ぎしてきた戦後日本の政治と社会の在り方を、婦人と孤児は身をもって告発した。

裁判のひとつ、二〇〇一年に、東京地裁に三人の残留婦人が提訴した「中国残留邦人国家賠償訴訟」は、一二月、棄却されたあと東京高裁の控訴審に移り、いまは判決を待っている。

法廷に立つ三人の残留婦人

三人の残留婦人が、戦争中、「お国のため」「天皇陛下のため」、満州の人のお手本になるのだと教えられて、誇らかな気持ちで送り出されていたとき、三人は一〇代の少女だった。それから半世紀近く、望郷の思いを訴えつづけながら祖国に戻れず、ようやく帰国できたときには、三人は、五〇歳を越えていた。「最後の力をふりしほって」提訴に踏み切ってから六年目、原告代表の「中国帰国者の会」名譽会長・鈴木則子さんの七八歳を最年長に、みな七〇歳をこえた。

逃避行のときの怪我がもとで杖にすがって歩きながら、毅然として顔を上げ、悲惨きわまる体験を淡々と語る鈴木さん。緊張のあまり、証言台で口が利けなくなる藤井武子さん。時々中国語をまじえ、ときに声をつまらせて、現地でのつらい記憶と帰国後の生活保護にたよる生活、日本社会にある根深い差別に傷つく日々の様子を陳述する西田瑠美子さん。

原告は三人だけだが、毎回の法廷には多くの残留婦人と二世が傍聴席を埋めて、同じ思いを三人に寄せている。だが婦人はみな高齢である。自分の健康状態や夫の看護のために、裁判に加われない人が多い。また役所の窓口の、戦争を知らない若い役人の邪険な対応から推して、「裁判になど加われれば生活保護の打ち切りほか、二世、三世にまで悪影響が及ぶ」とおそれる人もいる。戦前、戦中の徹底した学校教育と社会教育の結果、「お上」に楯突くことをおそれる人もいる。だが法廷のあとの報告集会では、これらの婦人たちの二世も共に補い合いながら通訳をする、頼もしくもほほえましい姿があった。

東京地裁の法廷では、女性裁判官とふたりの女性記録官が、悲惨きわまる逃避行の果てに中国人に売られたり助けられたりしながら結婚にいたる三人の陳述に、しばしば目を赤くした。また被告席や

国側の若い男性の役人のなかにも、うなずきながら聞き入る姿があつて、原告団はかすかな希望をもつた。実際、東京地裁の残留婦人判決は、ほぼ全面的に原告側の主張を認め、戦中・戦後の国の責任と怠慢をきびしく批判する内容だったが、やはり、はじめに結論ありきだったのか、法的に国を義務違反とするには「いま一步届かない」との曖昧な表現で、原告敗訴になった。

残留孤児の全面勝訴となった神戸地裁判決

一方、婦人の提訴より一年おくれで、全国から二二八人の中国残留孤児が、一五地方裁判所に国賠訴訟をおこした。帰国した孤児の約八割が参加する集団訴訟である。婦人同様、早期帰国と帰国後の支援を怠ったというもので、大阪地裁では原告敗訴となったが、残留婦人の地裁判決につづく昨年末の神戸地裁では、自国民を「著しく軽視する国の無慈悲な政策」を批判、原告の全面勝訴となった。この判決では、国は北朝鮮拉致被害者に対するのと同様に、残留孤児にも十分な日本語学習はじめ給付金の支給、就労支援などの生活支援をする義務がある、とした。弁護士はさっそく、国に控訴しないよう申し入れたが、国側は判決を不服として控訴し、関係者を嘆かせている。

さらに今年一月末、東京地裁は、原告の孤児四〇人の請求を却下した。戦争孤児が生まれたのは、やむを得ない「状況」の下であり、国には「法的義務はない」ばかりか、「母国語を失ったことが死にもまさる特別に重大な損害であるとも」認め難いなどと言い放った。歴史認識も人権意識もまったくない、啞然とするような内容で、新聞各紙も、「目を疑うような」「冷たい」判決と書いた。

ところで残留婦人と残留孤児をどこで分けるのかは、敗戦前後の混乱時に満一三歳以上であつたか、

それ以下か、という国がきめた線引きによる。一三歳ともなれば、周囲の状況が分かるはずだから、それでも残ったのは「自分の意思」によるものだとの強引な論法である。これによって残留婦人については、国は自分の責任を免れ、すべてを個人の自己責任にして、国の支援の対象から切り捨てた。

満一三歳未満のいわゆる孤児の場合も、身元が分かっているなら親族が世話をするばい、というのが国の一貫した姿勢である。いずれにしても国策として送り出しておきながら、戦後は放置し、帰国後も生活保護を支給するだけで、積極的な支援策はほとんど無い。その結果、社会の関心がうすく、言葉も不自由な人たちが偏見のなかできびしい生活を強いられている。そのことは、北朝鮮の拉致被害者問題が、次々にうちだされる政策を受けたマスコミの大量の報道によって、短期間に社会の関心と同情を集めた事実にくらべれば、よくわかる。

孤児といっても、最年長は七四歳、平均六五歳の高齢である。不安な老後が控えている点では残留婦人と変わらない。「最後の戦後補償問題」といわれて久しいのに、残留孤児・残留婦人のすすむ道は、今もけわしい。しかも、当人だけでなく、二世、三世にまで問題は引きつがれて、就職、教育、その他に、苦勞が絶えない。

敗戦時の「満州」のきびしい状況

残留婦人も残留孤児も、かつて日本が行った大陸侵攻政策と、それにつづく一四年間の戦争がなければ、存在するはずのない人たちである。

一九四五年、日本敗戦に先立つ八月九日、対日参戦の通告とほとんど同時に、ソ連軍の満州侵攻が

始まった。

関東軍の大半は、すでに決定していた「皇土朝鮮を守る」方針どおり先に南下してしまい、青壮年の男子は「根こそぎ」召集されていたために、ソ満国境近くに入植していた満州農業移民——満州開拓団（以下開拓団ともいう）の家族の逃避行は、悲惨をきわめた。

敗戦時に満州に住んでいた日本人は、約一五五万人。そのうち八割を、満鉄（南満州鉄道株式会社）や満拓（満州拓殖公社）、満州国政府の関係者、商工業従事者などの一般日本人が占め、二割に当たる約二七万人が、開拓団を中心に、満蒙開拓青少年義勇軍、満州建設勤労奉仕隊に参加した開拓団関係の人びとだった。

一方、ソ連軍侵攻と、日本敗戦の前後に満州各地でおきた中国農民の襲撃、または逃避行中の戦闘・自決・病死など、混乱の中で死亡した日本人は、全部で一七万六〇〇〇人だが、開拓団関係者は七万八五〇〇人。死者全体の四割以上、三人に一人が死んでいて、一般日本人にくらべて開拓団関係者がおかれた状況のきびしさを物語っている。

さらにその後、帰国した関係者が情報を持ち寄って集計したところ、死者のうち、戦死または自決によるもの一万一五二〇人、不明一万一〇〇〇人、うち死亡処理とみられるもの六五〇〇人、ほかに生存見込みが四五〇〇人いることがわかった。

その後も、帰国者から少しずつ情報がもたらされ、「不明」のなかには少なからぬ生存者がいて、中国各地に住んでいることがわかってきた（一九五六年末現在。満州開拓史刊行会『満州開拓史』）。予想されたことではあるが、そのほとんどが婦人と子どもだった。残留婦人と残留孤児は、このようにして生まれている。

「満州領有計画」と農村不況

日本人の満州進出は、日露戦争以後さかんになり、国策会社の満鉄社員、教員、商工業者などが移住していたが、本格的な大量移民がはじまるのは、一九三一年のいわゆる満州事変（九・一八事変）のあと、とくに翌三二年、日本のカイライ国家としてつくられた「満州国」の樹立宣言以後のことである。すでに日清戦争ごろから、仮想敵国・ロシアに対峙するために満州を支配下におくことを、時の支配層は考えていたが、武力と人口増の二本柱で満州領有をはかったのが、日本陸軍の最強部隊のひとつ、「泣く子も黙る」と国内の反対勢力を恐れさせた関東軍だった。

関東軍のなかでも、謀略によって「満州領有」の機会をつくろうと主張していたのは、関東軍作戦主任参謀大佐の石原莞爾で、計画通りに謀略で「満州事変」をおこし、満州支配と同時に一四年間つづく泥沼の戦争に向けて、大きな一歩を踏み出した。その後も関東軍は、謀略を重ねては「居留民保護」の名目で軍を出動させ、わずか一年たらずのあいだにカイライ国家「満州国」を成立させて、実質的な「領有」を実現する。

関東軍が計画した移民の中心は、移動の多い商工業者ではなく、土地に定着し、いざというときは、すぐに兵力として利用できる農民だった。

だが、当時の国内では、寒さがきびしく、国情も不安定な満州へ、日本の農民が移住することには、反対の意見が少なくなかったし、現地からは、反日感情を刺激することを心配する声が届いた。そのなかで、移民送出に向けて熱心に動いたのが、国家主義的な農民教育家で、のちに農業移民や青少年義勇軍が日本出発前に、必ず入所して訓練を受けた茨城県の内原訓練所長、加藤完治である。「皇道精神」

を鍛えるという独特の訓練は、極端な精神主義だとして、大政翼賛一色の帝国議会でも問題になった。ほのだが、政治家や、高級官僚、学者たちに働きかけて、移民事業の実現をはかった。

一方、現地では、関東軍司令部付大尉・満州国軍顧問の東宮鉄男が、早くから熱心に農業移民の入植計画をすすめていた。東宮は、石原莞爾や関東軍高級參謀大尉・河本大作の部下として張作霖爆殺にもかかわり、のちには満州国吉林軍の軍事顧問として、反満抗日軍の「討伐」を指揮していた。

移民送出をはかる勢力にとっては幸い、国民にとっては不幸なことに、そのころの農村は、世界恐慌につぐ豊作貧乏と、冷害による大凶作がつづき、米作農家も養蚕農家も深刻な打撃をうけていた。全国的に女性の身売りがあふえ、北海道や東北地方を中心に欠食児童が激増した。きょうの暮らしにも困る窮乏の中で、小作争議も激増していた。

この農村不況が利用され、農村の安定と立て直しをはかって、貧しさに苦しむ農民が満州移民計画に組み込まれていった。一方では、陸海軍の青年将校のテロが、未遂もふくめて頻々とおこされ、反対派の政府要人や、代議士、言論人がたおされる。

こうして、軍部独裁の地固めが急速にすすみ、満州国樹立からわずか半年後には、第一次武装移民五〇〇人を満州へ送り出す予算案が、議會を通った。

「武装移民」という呼び方は、現地に警戒心を持たせるというので、試験移民と名前を変えるが、事實は、小銃と機関銃、迫撃砲まで持った在郷軍人の集団で、「一朝、事あるときは関東軍司令官の指揮下」で軍事行動をすることに決められていた。そして、関東軍とともに、また、のちには関東軍に代わって、移民団だけで反満抗日軍を「討伐」しながら、現地の農民を追い出して、日本人移民のために土地と家を取り上げていった。

重要国策の「満州農業移民二〇か年百万戸計画」はじまる

移民団の入植地は、関東軍によって吉林省樺川県永豊鎮と決められていた。松花江の下流、ソ連との国境に近い佳木斯（ジャムス）付近である。一行は、入港したとたんに抗日軍の猛烈な攻撃を受けて船から出られず、船中で一晚過すことになる。その後も激しい攻撃の応戦に追われ、翌年四月になつてようやく入植地にはいるというありさまだった。

つづく第二次武装移民も、ときには一夜に三〇〇〇人規模という激しい攻撃にさらされ、犠牲者を出しながら、第一次移民団の近くに入植する。この地方の反満抗日軍「東北民衆自衛軍」は、その後、「東北抗日連軍第六軍」として、関東軍と日本人移民を悩ますことになる。

松花江下流の一帯は、古くから漢民族が移住し、元手をかけて耕してきた、「満州」でも指折りの肥沃な土地である。しかも日本側は、「未耕地のみ」という約束に違反して、多くの既耕地を取り上げたため、農民の憤りは強かった。

抗日軍の抵抗に懲りて、のちには土地は必ず買い上げることにしたが、時価に比べれば二束三文。中国東北地方には、当時の農民が窮状を訴える訴状や、各地の憲兵隊の記録が残されていて、それを見ると、当時の日本の強引なやり方がわかる。また、近年、中国の研究者がすすめている農民の聞き取り調査の録音テープには、関東軍の方針で家を焼かれたり、開拓団のために土地と家を取られ、家畜を奪われた様子などが、昨日のここのように、なまなましく語られていて、一時は武力でおさえられて沈黙はしたものの、内心に積もっていた憤りのほどが察せられる。日本敗戦時の開拓団の悲惨事の背後には、長年にわたる、これら日本の、また関東軍のやり方があった。

一九三六年、広田内閣は、満州移民送出を重要国策として、「満州農業移民二〇か年百万戸五百万人送出計画」を閣議決定する。「二〇年後には、満州の人口が五〇〇〇万人になる」として、その一割を「大和民族」で占め、「満州国」の中核にしようという狙いである。この「民族移動」の原案は関東軍がつくったもので、計画の柱とされたのが、農業移民だった。

国策の掛け声のもと、全国の道府県、市町村に人数を割り当て、毎年、大量の農民を送り出す、移民送出事業がはじまった。

こうして送り出された農業移民は、その半数が、対ソ防衛上、ソ満国境の最前線地帯に配備されて、国境防衛に当たるように決められていた。そこは「第一線皇軍に対する最短距離の兵站基地」であり、「有事の際」には、関東軍の補助・協力にあたることになっていた。一時は八〇万にも達した関東軍に食糧その他の物資を補給させ、いざというときには開拓団の中から兵力や軍馬を補充するという、まことに冷酷な計算である。

残りの四割は、反満抗日軍が活躍する地域に入植させて、軍の治安維持に協力させる狙いである。大量の開拓団を配備すれば、武力を使わなくても自然に抗日勢力をおさえることができ、また、関東軍との連絡も密接になって、鎮圧もしやすくなる。

あとの一割は、重工業地帯、満鉄沿線、重要河川の沿岸、とくにソ満国境に通じる軍用鉄道の沿線に配備して、抗日軍や「有事の際」の襲撃からまもる役目である。

また、「大和民族」を中心にして「五族協和」の実をあげることも、移民に要求された務めだった。とくに日中戦争から太平洋戦争へと戦争が拡大すると、食糧、軍需物資、人口問題など、日本にとつて満州の重要性は高まる一方だったから、反日の空気が出ないように、極力、「協和」をはかる必要

があった。

これらのことも、入植地や人数も、すべては関東軍が必要に応じて決めていたことで、当の移民たちは預かり知らぬことだった。だがこうしてみれば、農業移民が特別な軍事的・政治的な任務を背負わされていたことがよくわかる。しかし、当人たちに伝えられたのは、「王道楽土」「五族協和」などのスローガンと、貧しさからの脱出を呼びかける「あなたも十町歩、二十町歩の地主になれる」の誘い文句だけで、本当の狙いは、最後まで知らされることはなかった。

敗戦に先立つソ連軍の侵攻で、真つ先に犠牲になったのが開拓団の人びとであったのは、その入植地を考えれば当然のことだった。むしろ、ソ連との紛争または戦争状態を予想したからこそその移民であり、入植地であることは、関東軍が移民事業を始めるにあたつて、何よりも「対ソ作戦上」の目的を重視していることでも明らかだ。

それにもかかわらず、今回の残留婦人・残留孤児の裁判で、被告の国側は、残留婦人や孤児を生んだ責任は、ひとえに日ソ中立条約を一方的に破棄して参戦したソ連にあつて、日本の国にはない、と、くり返し強弁しているが、あまりに事実を無視した子どもじみた言い分で、あつけにとられるほどである。

「大陸の花嫁」選出も 大車輪で

女性の送出も、本格的になった。もともと移民事業が「大和民族」の人口増をはかるというのなら、女性なしでは成り立たない話だが、関東軍と国が「大陸の花嫁」送出に大車輪になったのは、移民を現地に定着させるという、せっぱつまつた必要のためだった。

じつは第一次試験移民の入植後、抗日軍の激しい攻撃や風土病、きびしい寒さのせいで、移民団にノイローゼになる者や脱退者が相次いだ。そこで考え出されたのが、「花嫁」を招いて家庭をつくらせることだった。つまり女性たちは移民の定着剤として利用されたのだが、これが効果があった。以後、移民の数にあわせて女子を送出することに、関東軍と、その意を受けた国は熱中する。

まず、若い女性たちに満州に親しみをもち、「すすんで配偶者たらんとする気運の喚起」をするために、当時の拓務省は、全国各地で「大陸の花嫁講習会」と称して、女子拓殖講習会を開く。とくに日中戦争を始めて、農村の移民人口が兵力に取られるようになると、兵役前の若者に「東洋平和のため」「北辺の守りのため」と呼びかけて、「満蒙開拓青少年義勇軍」の送出がはじまるが、ここでもまた、現地定着のためには「花嫁」の確保が必要になった。

文部、農林、拓務の三省が「花嫁百万人送出計画」を打ち出し、新聞・雑誌・ラジオが、いつせいに「花嫁」熱をおこした。作家や評論家、婦人団体の役員たちも動員されて、満州の宣伝に励んだ。ほどなく文部・農林・大東亜の三省が、青年男女に満州に親しみをもち、あわせて食糧増産に励ませるために「満州勤労奉仕隊運動」をはじめ、この場合も、女子を送り出す本当の狙いは、義勇軍のための花嫁志願者をふやすことだった。県の呼びかけに答え、県庁のなかに張り出された独身の開拓民、「拓士」たちの写真から選んで結婚し、半世紀あまり帰れなくなった人もいる。多くの半官半民の機関が結婚斡旋をして、花嫁を送った。「新天地での開放的な結婚生活」の夢もささやいての募集である。

出産率が内地より高いことも宣伝された。南方戦線の死傷者がふえるにつれて、兵力消耗を補うための「生めよ、殖やせよ」は、緊急の必要事になっていたのだ。そのほかにも女性が背負わされた役割は、食糧増産はじめ、開拓民と現地女性との「雑婚」を防いで大和民族の純血を保持すること、民

族協和を、「女性の柔らかさ」で達成するなど、たくさんある。

驚くことに、勤労奉仕隊の若者は、敗戦の年の六月になってもまだ送り続けられた。一九四二（昭和十七）年からはじまる移民送出「第二期五年計画」では、敗戦の年と翌年の二年間に、独身男性四万五〇〇〇人あまりを送る予定だったが、それはまた「花嫁送出」の予定数でもある。ここに生まれるはずだった子どもたちの姿を思い描くと、敗戦がわずか二年とはいえ早かったことに、せめてもの救いを感じる。計画が実現していれば、死者も残留婦人も残留孤児も、さらに増えていたはずである。

悲惨きわまる逃避行

敗戦の前年一九四四年から、南方戦線の敗色が濃くなるにつれて、関東軍は南方へ、また一部は本土決戦にそなえて日本へと移動し、ほぼ半分の兵力になった。その空洞を埋めるために開拓団に頻々と召集令状がくるようになり、敗戦の年の五月と七月には開拓団の一八歳から四五歳の男子全員に、いわゆる「根こそぎ召集」が来て、残されたのは女と子ども、高齢者ばかりになった。ソ連参戦の翌日、八月一〇日未明に召集された開拓民もいる。

しかも残っていた関東軍の大半は、「皇土朝鮮を保衛する」ために、「満州領域は放棄するも可」との大本営の命令にしたがって、南下してしまった。その際に開拓団をどうするかは、前年の秋にきめた「静謐確保」の方針——兵力の弱体化をソ連にさとられないためには、国境にいる大量の開拓団を避難させる動きは避けるべきとの方針通り、何の措置もとらずに放置した。そして開拓団にはソ連参戦を知らせることなく、関東軍はひそかに南下したのである。

そういう動きのなかで、ソ連参戦直前の八月二日という日に、関東軍の情報担当・長谷川大佐が、開拓団の人びとに呼びかけて、日本は、必ず勝つ、関東軍を信じて安心して農作業に励むようにと、放送しているのだ。先年、NHKが入手したという録音を聞いた時には耳を疑ったが、ソ連が参戦すれば国境地帯の開拓団がどうなるか、また、表面では鎮まっている抗日勢力がどう出るか、土地と家を取り上げられた人たちがどうするかは、誰の目にも明らかだったはずである。

そればかりではない。八月九日、大本営は、早ばやと、「戦後将来の帝国再建を考慮して、関東軍事総司令官は、なるべく多くの日本人を大陸の一角に残置することを図るべし」との命令を出している。「残置する軍・民日本人の国籍は、如何ようにも変更するも可」との方針で、十四日には、外務省が「居留民は、できる限り現地に定着せしむる方針」を、満州ほかアジア諸国の在外機関に通告した。

ついで二六日には、大本営参謀中佐・朝枝繁春が、「一般方針」として、内地の「食糧事情及思想経済事情」を考えて、「既定方針」とおり、「大陸の在留邦人及び武装解除後の軍人は、ソ連の庇護下に満鮮に土着せしめて生活を営む」ことを打ちだした。

この「現地定着」政策は、日本が占領下で外交機能を失ったために完全に実行されることはなかったが、現地ではこのために避難が遅れた開拓民があり、また一部では引揚げが遅れた。

開拓団は、このように、本来なら彼らを護るべき国にも軍にも、幾重にも利用され、切り捨てられたあげくに、侵攻したソ連軍と中国暴民の矢面に立つことになった。

八月は東北地方の雨季であるうえに、その年は大雨が降り続いて、逃避行の道はぬかるみ、河は水量を増した。これらのことが重なって、後出の残留婦人の記録に見るように、逃避行は地獄絵さながらになった。冬越えの收容所も、悲慘を極めた。

これらの例が特別なのではない。いくつもの県で刊行している開拓史のなかから、移民送出日本一の長野県を例にとれば、全三巻のうちの名簿編一巻は一〇七五ページが、送り出された三万三七四一人全員の氏名と記載事項で埋められており、その至るところにあるのが「死亡」と「未帰還」の文字である。

「死亡」の事由「欄」には、自決、殺害、衰弱、栄養失調、発疹チフス、大腸カタル、消化不良、急性肺炎、感冒などがびっしり並んでいて、逃避行と収容所の惨状を物語っている。

集団自決や母子心中があり、親捨て、子捨てがあつた。子売り、身売りもあつた。女性たちは、日中ともに女性差別のひどかつた社会にあつて、日本人仲間から売られたり、中国人に「配給」されたりする例も稀ではなかつた。ソ連軍の暴行も、すさまじかつた。この中から、中国人に助けられ、引き取られて養女・養子となる子どもや女性、また、中国人と結婚する女性が相次いだ。

引揚げに消極的な日本政府

戦後、GHQ（連合軍司令部）の管理下に外地の日本人引揚げがはじまり、中国東北地方からの集団引揚げは、一九四六年から、交流が停止する四九年までに、一二〇万人が帰国した。だが、国境地帯に取り残された人たちは情報のないまま、国共内戦のなかで帰国の機会を失っていた。

一九四九年一〇月、中華人民共和国の成立で中国国内は平和になったが、一方の日本は、冷戦構造の下で米国にしたがつて対中国敵視政策をとりつづけた。これが、残留した日本人の苦難を倍加した。引揚げが途絶えただけでなく、のちの文化大革命期には、加害国の日本人を「小日本鬼子」と称して、

その家族の中国人や子どもたちにも迫害がおよぶことになった。

やがて、国交のないなかで、中国側からの呼びかけがあり、日中の民間団体がねばり強く努力した結果、一九五三年に、集団引揚げが再開。五八年、岸内閣の対中国敵視発言をきっかけに、再び「全面的な交流停止」になるまで、三万五〇〇〇人が帰国した。その間には、釈放戦犯の帰国や、子どもが生まれて帰国できなかった婦人たちの一時帰国も実現した。

だが日本政府は、残留婦人・残留孤児の受け入れには、終始、消極的だった。まず孤児にたいしては、日本国籍の証明、原籍地や父母の名前など、肉親捜しの手掛かりを孤児本人に要求するだけで、中国側にも日本の親族にも働きかけることは、いっさいなし。この姿勢は、民間団体の熱心な運動の結果、孤児の訪日調査が始まる一九八一年まで一貫している。肉親探しの結果、ようやく身元がわかると、残留婦人と同様に、帰国の手続きも帰国後の身元引受けも、すべてを肉親に責任を負わせて、国は手を引いた。しかも、各地に生存者の情報があるにもかかわらず、五九年には未帰還者特別措置法によって、一万三千六百余人に戦時死亡宣告が出され、戸籍は抹消、未帰還者名簿からも除かれてしまったのである。

一方、残留婦人の場合、この時点では、ほとんど全員に中国人の夫との間に子どもが生まれていたが、国費帰国できるのは本人だけ。夫と子どもの同伴を認めなかったために、帰国するには夫と離婚し、子どもを置いてこなければならなかった。

このため、ほとんどの婦人は帰国を断念せざるをえなかったが、これに対して男性は、中国人の妻との帰国が認められていた。国の規定で残留孤児以外を「残留邦人」といいながら、実際には「残留

邦人」の中に男性が皆無に近いのは、そのせいである。

しかも、明治以来の父系主義的な国籍法のせいでは、子どもは、原則として、父親の国籍に入ることになっていたために、一九八四年にこの法律が改正される前と後とでは、同じ家族・兄弟なのに国籍がちがうという事態が生まれ、帰国時にも帰国後にも、さまざまな厄介事や不利益をこうむった。

帰国を切望する残留婦人のなかには、中国政府に教えられて日本国籍を持ち続けた人は少なくないが、日本側は同伴家族の帰国に際して、保証人を求めたり、国費帰国を制限したりして、事実上、婦人の帰国を困難にした。

戦後五〇年を経た一九九四年、民間ボランティアの長年にわたる働きかけの結果、議員立法で残留邦人等支援法^(注)ができたが、基本的な姿勢は従来と変わらないまま、今日に至っている。

戦後長い間放置されて、ようやく帰国した後も、日本語学習をはじめ、日本社会に適應するための生活支援があまりに貧弱なことは、北朝鮮の拉致被害者にくらべても、雲泥の差がある。残留婦人と残留孤児の大半は、生活保護に頼らざるを得ない状況で、経済的、精神的な不安と屈辱だけでなく、二世、三世にも及ぶ社会的な差別のもととなり、教育上もさまざまな問題を生む土壌になっている。しかも、婦人は中国の親戚や長年の中国生活のなかでの恩人に、孤児は義父母に会いたいと思っても、中国へ行けば、「暮らしに余裕がある」とみなされて、生活保護は打ち切られる。

戦後六〇年あまりというのに、まるで敗戦前後に決められた開拓民の切り捨て、「現地土着」の方針がそのまま続けられているようである。鳴り物入りで送り出し、あげくに放置し、その後、放置同然にしてきたことの責任を、当の国がとるのは、当然の信義というものであろう。

(注)「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」

(〇七年二月一〇日成稿)

「大陸の花嫁」と「勤労奉仕隊」の名のもとに

鈴木五三美さんの場合（一九二八年生まれ）

鈴木五三美さんの故郷は、「移民送出日本一」の長野県のなかでも、村ぐるみの分村のお手本として知られる長野県読書村である。

この村は、満蒙開拓青少年義勇軍と、未婚の女子をあつめた満州建設勤労奉仕隊の送出でも、際立っていた。その結果、多くの死者と残留婦人を出しているが、鈴木五三美さんもその一人である。

村役場の強いすすめで勤労奉仕隊に加わり、鈴木さんが送り出されたのは、なんと敗戦の年の四月末、一七歳のときである。そして一九八九年まで帰れなくなった。

実科女学校を卒業した一九四五年三月のある日、村役場の人がやって来て、「六か月だけで、勤労奉仕隊に行つてこんか」と言った。以前、姉も行つたし、知り合いが開拓団や義勇軍で行つてもいたから、満州には親しみがある。おまけに、帰りには大豆を麻袋一杯、お土産にくれるという。長兄が死んだあと、家業の採石の仕事がはかばかしくなかったから、心が動いた。

「大豆をうちへもつて来てやりたい、と思つたんですよ。それに、ちよつと外の土地へのあこがれもあったんですね」。母親は反対したが、父の「ちよつとの間だから行つて来い」という一言で、決まった。

満州建設勤労奉仕隊とは、青少年に満州に親しみを持たせ、同時に食糧増産に役立たせる目的で、はじめられたものだが、とくに女子を送り出す狙いは、移民の「花嫁」候補者を増やすことだった。

なかでも義勇軍を多く出している地域では、その数にあわせて女子を獲得することが国の方針だった。四月二十九日、「天長節」（天皇誕生日）に、総勢四三人（うち一〇代と二〇代の未婚の女子三三人）で組織された勤勞奉仕隊の一員として、村長や小学校の校長、大勢の村民の列の先頭に並んで氏神様に参拝し、「出征兵士」同様、駅頭で日の丸の旗と万歳に送られて出発した。そして四か月後、奉仕隊からは死者二十四人、うち女子は一七人、ほかに、鈴木さんはじめ女子七人の未帰還者を出した。

*

公心集読書村開拓団は、松花江下流に用意されていた土地に入植して、新生活をはじめた。だがそこは、第一次、第二次試験移民の入植地のすぐ近く、かつて関東軍と移民団が中国農民の土地を、武力で取りあげた地域である。その後、抗日の動きは鎮まっていたとはいえ、農民の反日感情が消えたはずはない。事実、日本敗戦時には、この地域の多くの開拓団が中国農民のはげしい襲撃を受けて、悲劇を生んだ。

読書村開拓団の団員は、そんなことを知る由もない。五月に入り、勤勞奉仕隊は、無事、現地の「報国農場」に到着した。鈴木さんの印象は、「広い広い平原が地の果てまでつづくだけの、何もなかったところ」だった。道路は雨が降るとぬかるんで、田んぼのようになった。働き盛りの男性は、ほとんど召集されていて、農場の男性も、奉仕隊の団長もふくめて、数人だけ。一〇代、二〇代の女性ばかりが、中国人の苦力（クーリー。小作のこと）の手を借りながら、朝から夕方まで、広い畠を耕した。

「八月に入ると毎日のように飛行機が二機、三機と飛んでくるようになったんですよ。関東軍の演習にしては数が少ないし、男の人はいなくなっているし、なんとなく不安でした。でもまさか、ソ連軍が攻めてくるなんて、考えたこともなかったですから……」。

しかし、実際それより前から読書村開拓団では、残っている男たちは「匪賊」の襲撃に備えて演習をしていたし、女たちは、牡丹江の司令部からくる関東軍の将校の号令のもと、「いまにソ連の落下傘部隊が降りてきたら、刺せ。日本は必ず勝つ」といわれて、竹槍の訓練をしていた。この日本人移民の様子を、まわりの中国人は、どう見ていたのだろうか。

八月一〇日、ソ連参戦の翌日、最後の召集がきて、読書村開拓団は全戸数一五四の中から一〇三人が召集され、団には女と子ども、高齢者ばかりが残った。

一日、県公署(県庁に当たる)から「ソ連参戦にともない治安が悪化している。ただちに牡丹江へ疎開せよ」との指令があり、翌日夜、読書村開拓団ほか四開拓団一五〇〇人は、一週間分の食糧を持って、二〇キロ先の鉄道の駅へ向かう。だが、駅にいた空の列車には、なぜか乗せてもらえず、翌日まで待ったが列車はこない。不安と流言がひろがる中で開拓団に戻ることになり、一日かけて引き返した。

帰れば、中国農民に渡してきた家も土地も、ふたたび取り上げることになる。といつても、団員は知らなかったとはいえ、もともと中国人の土地と家である。果して、全員が戻った翌々日の一五日後、読書村開拓団の二つの部落が襲撃された。勤労奉仕隊の仲間二人も、一人が即死、ひとりは重傷を負った。すでに関東軍将兵の姿は、どこにもなかった。

翌朝、近隣の開拓団と一緒の逃避行がじまった。子どもと年寄りを抱えた女たちの大集団である。大雨が降り続くなか、一行は、ぬかるみに靴を奪われてハダシで湿地帯をすすみ、松花江の支流を渡った。その間にもあちこちで襲撃がおきた。中国人からおにぎりを貰ったり、渡し舟で助けられた人たちもいたが、ほとんどは食糧もなく、ぬかるみに溜まった雨水をすくって飲んだ。

雨で水嵩の増した牡丹江でも悲劇は起きた。先に南下した関東軍が、ソ連の侵攻を食い止めるために、すべての橋を爆破していったのだ。足手まといになるからと、河堤に残って家族に別れを告げる老人、母親から手が離れて流れていく子ども。鈴木さんは、途中で合流した日本兵に助けられ、必死で手をつかんで急流を渡った。

ソ連軍や匪賊の襲撃を避けて、一行は暗くなつてから老嶺山脈の山中を歩くことになった。

まず子どもや老人がたおれた。自殺者も出た。「泣き声がすると敵に見つかる。子どもは殺せ」と同行の兵士に命令され、母子心中する者、手榴弾で集団自決をはかる母子の一団、死にきれずに残された母親、歩けなくなった子どもを置き去りにしてきて泣いている母親、手を合わせて、親を置きざりにする娘。地獄絵が、いたるところで展開した。

ようやく山麓に出たのは九月二日。ソ連軍将校に出会って、はじめて日本の敗戦を知ったとき、出発時に六八九人いた読書村開拓団は、五〇名になっていた。そのまま、方正県伊漢通の開拓団跡へ収容され、奉仕隊員は小学校に収容された。各地から避難してきた三三開拓団が収容されたため、中に入りきれずに穴を掘ってムシロをかけている者もいた。ここから、寒さと飢えとの闘いが始まった。配給のトウモロコシや大豆を煮炊きし、また暖をとるためには薪が必要だったが、外ではソ連兵の暴行がすさまじく、女子は外へ出ることができない。

収容所では、寒さと飢え、シラムのために猛威をふるった発疹チフス、その他の病気のために、毎日、人が死んだ。死体を外へ運んで戻ってくると隣の人死んでいる。その繰り返しだった。

一〇月になって雪が降ると、地面が凍り、死者を埋める穴も掘れなくなつて、置いてくるだけになった。翌朝行くと、狼か犬かに食べられていた。一二月、奉仕隊の親友が死んだ。鈴木さんよりひと

つ年下の一六歳で、やはり、「半年」といわれて、参加したのだった。

このころから、収容所の周りに、食糧や薪を持った中国人がやってくるようになった。自分の娘や嫁にならないか、というのである。「日本に帰りたい」一心で、みな断り続けたが、やがて奉仕隊の最年長の女性が、貰った米と薪を置いて、出て行く。親から離れてきた隊員が、姉のように慕っていた人だった。「このままでは、みんな死ぬだけだ。これで生きのびてほしい」という言葉に、「みんな、ありがたさと辛さに泣いた」という。

その米と薪もなくなり、五人が出て行った。広い小学校にあふれるほどだった避難民は、一〇人ほどになっていた。帰国の望みは、すでない。仲間と話し合い、どこで死んでも同じことだと決心する。鈴木さんはもらった一五〇円を収容所に残し、親切にしてくれていた中年の女性の養女になった。東北地方の中でも、方正県は、とりわけ多くの女性と子どもが残され、死者も多い。日本の記録では中国人との結婚二三〇〇人、残留一二〇人といい、中国側は一九四六年当時、約一万人の婦人と孤児がいたという。三〇〇〇人を下らない、という死者のために、戦後黒竜江省政府は供養塔を建て、県政府が管理しているが、いまでも日本人の参詣者が絶えない。

鈴木さんは、養父母が三人の実の子どもと分けへだてなく育ててくれたこと、また四年後の結婚にあたって相手からお金を取らず、「実直ないい人だから結婚しなさい」と、鈴木さんの気持ちを大切にしてくれたことに、いまでも深い感謝の気持ちを持っている。

しかし、五人の女兒を産み、農業をつづけるうちに病気になる、治療のために読書村の父母のもとに帰り、六か月の滞在期間を終えて戻ると、中国では文化大革命の嵐が吹き荒れていた。

「日本のスパイ」の嫌疑をかけられ、子どもたちは「小日本鬼子」——「チビの日本鬼」と、いじめ抜かれた。それは、日中国交が回復するまで続いた。

夫は、かつて関東軍から強制労働にかりだされた「劳工」である。そのとき受けた傷痕は、いまでも体に残っている。日本人がおこなった加害の様子を聞き、その報いを自分が受けているのだと思うと、たいていのことは我慢できたが、四か月半にわたって一室に監禁されたときは死を考えたという。

一九七七年、はじめて国費で一時帰国をしたとき、両親はすでになく、家を継いだ第一家の世話になった。永住帰国を願っても、弟夫婦に身元引き受けを頼むのは遠慮がある。だが、帰りたいの思いはつのるばかり。一九八九年、「中国帰国者の会」（名譽会長・鈴木則子さん）は「中国残留邦人」裁判の控訴人代表）に連絡。肉親の承諾から国への手続きいっさいを頼み、六二歳の夫と末娘の孫一人だけ連れて帰国し、その後、順番に自費で呼び寄せた。

四四年目の帰国である。いまは夫婦二人で、生活保護と年金とで月一三万円。家賃、光熱費などを引けば食べるだけで精いっぱい生活だ。

いま一番の願いは、「夫が歩けるうちに、中国の弟妹にあわせてやりたい。私も、恩のある養父母の墓参りと、死んだ仲間の慰霊をしたい」というのだが、中国へ行けば、その間の生活保護は打ち切られる。役所の窓口の若い職員は、「子どもと暮らさないよ」というが、そうすればやはり保護が打ち切られる。それだけではない。帰国者の家族は、二世、三世の暮らしも苦しいのだ。やはり国が責任をとってくれなければ、救われない。せめて病気がちの自分たち夫婦が、老後を安心して過ごせるよう、また、二世、三世が、職場でも学校でも差別されずに、自分の力を十分に出せるようにしてほしいと、鈴木さんは、心から願っている。

関東軍にも国にも見捨てられて

松田恵子さん（仮名）の場合（一九二九年生まれ）

一九四四年三月、松田さん一家は、東京の武蔵小山商店街を中心に結成された興安東京開拓団の一員として、日本を出発した。父親は植木屋だった。

一九四〇年ごろから生活物資の欠乏が目立ちはじめ、商売が成り立たなくなった中小企業の中には、転業を余儀なくされる人がふえてきた。日中戦争の長期化に加え、開戦前夜には米英蘭からの原料物資輸入が激減。食糧難と物資の欠乏は、年々、ひどくなった。植木職人の仕事もなくなっていた。

一九四一年には転業者が一五〇万人近くなるというので、中小商工業者対策がたてられたが、その転業先に満州開拓が組み込まれたのである。農村の困窮する農民を満州へ送り出したのと同じ方式の「棄民」である。その転業者を、とくに「高度国防国家建設のため」の「職業奉還者」と宣伝して、まず一〇万戸を「転業開拓団」として送り出すことにし、拓務、大蔵、商工の各省と、現地の開拓総局、満拓公社の決定のもとに、帰農指導をはじめた。

日中戦争の長期化につれて、農村の若者は兵力として必要になる一方、対ソ作戦のため、資源確保のために満州の重要性は増すばかりであったから、年配者とはいえ中小企業者の満州送出は、政府にとって一石二鳥の計画だった。最初ためらっていた人たちも、物資統制令、企業整備令と、たてつづけに出されるきびしい経済政策を前に、多くの中小商工業者とその家族が決断をせまられた。

開拓団に入る人は急増し、松田さん一家が出発する前年の一九四三年には、前々年の三倍を超える四〇〇〇戸が、送出されていった。

松田さんの父親は、開拓団に入ると間もなく、訓練所で三か月の農事訓練を受け、興安東京開拓団の先遣隊として出発する。松田さんは女学校を中退し、翌年春、家族を連れに戻った父親と一緒に、母親と二人の兄、弟二人、妹二人の家族全員で、日本をあとにした。

入植地は興安南省の王爺廟駅近く。一九三九年に日ソ両軍が国境をめぐる交戦し、日本軍が大敗したノモンハンに近い、ソ満国境地帯である。そこへ軍の代わりに転業開拓団が配置された。電気はなく、各家にランプがひとつずつの生活ながら、一六部落一一四三人の団員は、広大な畠を中国人の小作に任せて、乳牛、馬、綿羊などの畜産や、牛乳、酒、味噌の醸造など、一五四種に及ぶ業種を、順調に伸ばしていった。

当時の副団長、足立守三氏の手記によれば、毎週、関東軍の特務機関の将校が来て、「一本の野菜でも多く作って軍に供給せよ」、「信じて戦え」と、講演していったという（満州開拓史刊行会『満州開拓史』）。とりわけ野菜や食肉などは、軍に供出するための増産に追われていた。

だが、ここでも一九四四年末以後、とくに、敗戦の年の三月ごろから働きざかりの青壮年の召集がつづいたため、増産には苦勞した。ソ連参戦の一九四五年八月九日には、在団者九六四人中、残った男子は七〇余人だけ、大部分が女子と子ども、年寄りだった。

治安に問題ない、といわれながら、団の本部には武器があり、松田さんの二人の兄も銃を支給されて、訓練を受けていた。団の農地は東西三キロ、南北八キロ。地平線までつづく広大だったが、もとは

といえは中国農民の土地を二東三文で取り上げたものだ。前山の足立守三氏によれば、この農民は、開拓のために移住してきた漢民族が主力であり、山麓の林を切り開いて開墾した農地だという。土地を奪われた農民は、さらに奥地に行つて開墾するか、日本人移民の苦力になるか、ほかに道はない。

開拓民と中国人苦力は東西にわかれて住んでいた。その中国の家の、入り口には、「五族協和、安居樂業」と書いた赤い紙が張つてあつた。足立氏は、「のちに団を襲撃したのが、今まで親切に手伝つてくれると思つていた中国農民だと知つて、驚いた反面、無理のないこと」と書いている。そして、「愚かにも民族的な優越感をもつて、主従の関係を強制していたこと」を、反省もしている（同上）。

一年あまり経つて、松田一家が入植地に慣れたころ、敗戦の年の八月九日、「ソ連軍が攻めてくる」との噂が流れた。しかし関東軍への信頼は、絶大だった。危なくなれば軍が駐屯している白城子まで逃げれば守つてくれると、みな安心していた。しかし実際には、一〇日になつても、関東軍からも日本の県庁にあたる興安省公署からも、何の連絡もない。実はその間、近くに入植していた、同じ東京からの転業開拓団・仁義仏立講開拓団とともに放置され、孤立していたのである。

ふたたび足立副団長の手記をかりれば、一日、待ちきれずに足立氏が馬を駆つて省公署へ行くと、すでに無人であつた。愕然として特務機関、憲兵隊へ駆けつけると、ここも、もぬけの殻。その夜、興安街を爆撃するソ連機が見えたとある。

一日には、団の周りで農民蜂起の気配。一日、二部落が包囲されたのを、一晚かかつて救出。団員に胃酸カリとモルヒネが配られる。避難のために全員集結した部落が襲撃され、夜、団長が服毒自殺をはかる。一六日になつて、ようやく、一〇〇キロ先の白城子に向けて、七〇〇人が出発。松田

さんも家族と離れないよう、必死で歩いた。

昼間は襲撃されるおそれがあったが、年寄り子ども、子連れの女ばかりだから、夜道も危なくて歩けない。しかも、広い国道にはソ連戦車が見える。炎天下の道なき道を進み、夕刻、小川で水を飲んでほっとしていると、団員と中国人の撃ち合いはじまった。このとき、父親は首と腕に弾をうけた。一命はとりとめたが、その後、「弾が背中を動き回っている」と言いつづけた。

一七日、双廟子という村に着いた。ご飯を炊いて食事をし、おにぎりをつくり、出発準備に取り掛かったとき、気がつくと暴民に囲まれていた。そこは、四方を山に囲まれた盆地の底だった。囲みの輪がだんだんと狭められてきて、中は絶体絶命の混乱状態におちいった。「乱撃乱闘」のなかで地獄絵が出現した。撃たれた子どもの遺体を囲んで一家数人が服毒した。死にきれずに苦しむ者、家族で殺し合う者、わが子の首を絞める者。松田さんの家族九人にも悲劇がおきた。

途中まで一緒だった兄二人は、いつの間にか行方が分からなくなっていたが、第二人がここで撃たれて死亡。父親が、突然、持っていた銃を乱射し、それが妹二人に当たった。

さいわい弾が切れたために松田さんは助かったが、「あと一発あれば、私にも当たっていたねえ」と、その時の様子を思い返している。あとでわかったことだが、たおれた妹のひとり、中国人の手厚い看護を受けて一命をとりとめ、養女として育てられていた。弾に当たって片目が飛び出していたのも、手当のお陰できれいに治ったと、松田さんは妹から聞いている。

死者、約三〇〇名は、地元の住民が穴を掘って埋めたが、のちに洪水で流されたという。無事生き延びて脱出した四〇〇人も、翌一八日と一九日の二日にわたる中国人の襲撃で、ほとんど全滅した。足立氏は「開拓民が受けたこの状況を、故国に知らせなければ」と、必死で脱出した数少ない生還者である。

生き残った松田さんと父母は、元の部落に戻り、一〇日ほどは親切的な中国人に助けられて暮らした。だが、日本人を匿っていることがわかると危ない、と言われて、その中国人にも見放され、まもなく両親は知らない男に連れ去られて、消息不明になった。松田さん自身も連れ出されて、その中の一人と暮らすことになった。日中は暗くなるまで畑で働き、夜はそこに泊めてもらう生活だったが、本人は盗賊か匪賊らしく、いつも家を空けていた。まもなく他人の家を襲って殺され、翌年、松田さんは、現在の夫と結婚する。開拓団あとの部落に暮らし、一男二女が生まれた。

しかし、安定した生活は、まだだった。日本敗戦後、中国では国民党軍と共産軍の内戦がつづき、村には兵士や匪賊のような男たちが出入りしていて、銃を向けられることもあった。ようやく平和がきたのは、一九四九年、新中国の誕生によってだった。

しかし、一九六六年にはじまる文化大革命の嵐は、中国に取り残された日本人婦人と孤児を、またも翻弄する。松田さんと子どもたちは、「小日本鬼子」といわれる程度だったが、夫は「日本人の妻をもっている」と、病気になるほどの攻撃を受けた。加害国の人間との結婚は裏切り行為だった。

日本に帰りたいと思わない日はなかった。だが、周りに日本人がいるとの噂もなく、日本人と会う機会など全くない生活では、何の手掛かりもない。一九五三年、興安市政府から連絡があり、「あなたは日本人だから、帰りたいければ帰ってもいい」と言われて、飛び立つ思いだったが、それきり連絡が途絶えてしまった。公安局の助言で、いつでも帰国できるようにと、毎年、外国人証明書の書き換えをして、日本人の証明をもっていた。だが、日本政府の方針で、帰れるのは日本人だけで、中国人の夫と子どもは駄目だとか、その後も身元引き受け人が必要だとか、国費の同伴家族は制限するとか、ともかく残留婦人に対してはさまざまな帰国制限が設けられていたために、帰りたくても帰れなかった。

一九七七年、松田さんは、三三年ぶりに、日本の土を踏んだ。永住帰国は無理でも、一時帰国ならできると聞いて、矢も楯もたまらず、富山に住む従兄弟の家に身を寄せた。日本は、昔とは、まるで変わっていた。戦争に負けた国とはとうてい思えない豊かさだった。一時帰国したあとは、前にもまして永住帰国への思いがつのった。

六年後、夫が亡くなり、思い残すことなく帰国できることになったが、婦人の帰国には「親族の同意」と「身元引き受け人」が必要とされた。だがたった一人の肉親の従兄弟からは、「いまは子どもの代、自分には何もできない」と、断られた。結局、先に帰国した残留婦人の仲間に引き受け人になつてもらい、息子ひとり連れて、ようやく永住帰国することができた。それは、なんと一九九〇年のこと。一家の日本出発からすでに四六年が経っていた。

五年後に娘二人とその家族を呼び寄せ、松田さんは、ようやく家族揃って暮らせる日が来た。だが、いまも、あの逃避行のことは忘れることができない。何事にも心から笑い、喜ぶことができなくなった、人生の終わりになったいま、振り返ってみて、自分の一生は、いったい何だったのだろうか、考えてしまう。帰国を阻んだ祖国は、くやしく、恨めしい。その一方では、中国の生活の方が長いか、中国もとても懐かしい。自分はいったい、何者なのだろうと思ってしまう。

日本がさんざん被害を与えた異国で、またその結果、自分もひどい目にあった国で、心の休まるどころがなかった歳月を、松田さんは、人生の終わりに あらためて思い返している。「娘二人も、四〇歳を越えた。まだ話していい戦争の体験を、少しずつ話していいこうと思っている」と、松田さんは語った。

(おがわ つねこ・ジャーナリスト)

私が出会った中国残留婦人

班 忠義

「中国残留日本人婦人」「中国残留日本人孤児」というのは、日本においては、戦後、中国に残された日本人婦人、または孤児のことを言うが、中国では「日本遺孤」と言い、この「日本遺孤」というのは中国に残された日本人孤児のことで、「中国残留日本人婦人」という呼称も存在も私は知らなかった。なぜ中国において彼らへの関心が薄いかと言えば、「日本遺孤」の歴史的な背景と戦後政治の両方の要因が考えられる。歴史的な要因は、残留日本人孤児や婦人らは日中戦争の侵略側の後裔に当たり、被害側の中国人にとっては憎しみこそ直接彼らに向けなくても、理解と同情を引き起こすのは難しい。また共産党政権になった中国では、その成立時から厳しい言論統制が敷かれ、報道は党の方針に沿って行われた。残留日本人問題は中国側からみれば外国人の事情であり、中国政府が国内に向けて大々的にとりあげる必要はなかったのである。

日中の国交が正常化した一九七二年以降に、残留孤児、残留婦人など中国残留日本人の存在が水面に浮かび、一九八〇年代に、毎年多くの残留孤児が肉親探しのため一時帰国し、日本人でありながら日本語を失い、ほとんどが日に焼けた農民の姿が、メディアを通して、多くの日本人の目に映った。しかし当時は残留孤児だけが取り上げられ、残留婦人についての情報は、あまり取り上げなかった。

一九九二年、旧日本軍人を中心となって設立したボランティア団体「春陽会」の支援で、一二人の残留婦人たちが中国から日本へ里帰りした。一〇日ほど日本に滞在した後、彼女たちは、また生まれ

故郷を離れ、中国へ戻らなければならなかった。

その婦人たちの中に吉田さんという残留婦人がいた。日本を離れる朝、吉田さんは春陽会がつくった一時支援施設「故郷の家」のトイレで首吊り自殺した。彼女の中国の家は奉天（現・瀋陽）にあった。しかし、夫に死なれて子どもがなく、誰も身よりがない異国の地に戻らなければならぬ朝、彼女は死をもって日本に残ることにしたのだ。吉田さんの事情と心情は、多くの残留婦人たちに共通している。

私の恩師の曾おばさんは、残留婦人の一人で、私は彼女の人生を多くの日本人に知ってもらうため、『曾おばさんの海』^(註)（九二年朝日新聞社刊）を書いた。曾おばさんはじめ、多くの残留日本婦人の前に広がった海は、超え難い心の海。心の隔たり。——多くの残留婦人の深い悩みと苦しみは、生涯続いた。

曾おばさんというひと

私は中学二年生のときに曾おばさんに出会った。プロ文化大革命の最中で、私の姉は撫順中学校を卒業したあと、すぐに家から数十キロ離れた連島湾村という農村に下放された。当時中学を卒業した一五、六歳の若者は、「下放」の名のもとに、全員、農村に送られた。農民として再教育を受けるという美辞麗句だが、農民になりきって農村で結婚することがすすめられた。

私の姉は農村に送られた三年目に農民と結婚し、農家を借りて結婚生活に入った。姉の田舎からの土産話は、「隣家の奥さんが日本人だ」という話だった。言葉がほとんど通じないので、交流は少ないが、時どきその家からすごい泣き声が聞こえてくる。日本人の奥さんは泣きながら何かを訴えてい

るが、その言葉がわかる人がいない。そして泣いているのか歌っているかもわからず、いつも、騒ぎのあと、夫が外へ出かけ、彼女だけが泣き続ける。姉はため息をつき、隣人の事情に同情しながらも、おもしろ半分には長ながとしゃべる。今から考えると、深刻な家庭内暴力であつたろうが、当時の中国農村ではそういう認識がなく、中国の伝統でいう「犬に娶られれば犬に従い、鶏に娶られれば鶏に従え」、いわゆる男尊女卑の封建思想が残っていた。「夫婦喧嘩」は他人が関わるべきではないという掟があるので、この日本人婦人の異状な日常に、あまり気を留める人はいなかった。

私の生まれ故郷は戦争の傷跡の深い撫順市である。小学生のころから何度も、平頂山村という、日本軍による村民の大虐殺現場で同胞の犠牲者の遺骨を眺めさせられながら、生存者の証言を聞き、自国の歴史を学んできた。「日本人は残酷だ」という印象を、小さいときから持っていた。

そういう先入観があつたせいも、姉が話したこの日本人女性のことを、かわいそうと思ひながらも、「日本人には同情すべきではない」と、自分に言い聞かせていた。

その時、私はまったく別の意味の下心ともいうべきある企てをたてた。それは、この日本人に日本語を教えてもらおうということだった。当時、社会の混乱の中で、学校ではほとんど授業ができない。いづれ農村で土地を耕すことになるから、知識は全く無用のものだと思われ、学ぶ意欲がわかず、未来に絶望していた。私は、誰も学ぶことのない敵国の言葉を身につけていれば、いざというときに役立つかもしれない、という思いで日本語を学ぼうと決心した。

はじめて姉の家で会った噂の日本人は、色白で小柄、ろれつが回らないような変な中国語を話す、五〇前後の婦人だった。中国人の夫の姓が曾というので「曾おばさん」と呼ぶように、姉に言われた。

曾おばさんは親切な人だった。姉が私の願望を伝えると、「いいですよ」と、すぐに承諾してくれた。その時から毎週、週末になると曾おばさんの家に通い、日本語を学んだ。曾おばさんは言葉を教えるだけでなく、昼になると、いつもご馳走をしてくれた。そして休憩のときには、いつもきまって昔話をしてくれた。戦争時代の話が多かった。でもいくら頭をなでられ親切にしてもらっても、「日本人は残酷だ」という心理が働いて警戒心のようなものがあり、私は固かった。

曾おばさんも戦争被害者なのだ

曾おばさんの出身は長野県の宮田という村だった。曾おばさんは、村の村長やお父さんのすすめで面識のない男性の嫁、いわゆる「大陸の花嫁」となって、中国とロシアの国境付近の開拓村に送られ、定住した。

二人目の子どもが生まれて間もなく、敗戦を迎えた。ソ連軍がやってくる前に、開拓団の農民たちは集団で、中国内陸部の、港のある町へ、逃避行を余儀なくされた。日本人の男性はほとんど召集され、夫も召集されていたので、子ども二人を連れて避難した。その道のりは一〇〇〇キロをこえる大移動であった。

八月の炎天下、中国人の報復を恐れて馬車も利用できず、平らな道も歩けず、畑の中や人のいないところをひたすら歩いた。子どもと最小限の日用品を背負い、歩き続ける苦労は言葉に尽くせない。曾おばさんが幾たびも話してくれたのは、子どもと別れる前の、数かずの修羅場のことである。

「太陽が真上から照りつけ、ひたすら果てしない異国の大地を子どもを背負って歩く。飲み水もな

く食べるものもない。時どきとうもろこし畑に走りこみ、まだ熟していないとうもろこしをかじって、餓えをしのご。ただ望むのは雨だ。雨になれば雲が影となり、雨のたまり水を飲めるから」。

十日間も逃避行を続け、曾おばさんの生まれたばかりの次男は、まもなく死んだ。長男は背中にぐったり頭をつけて声が出ない。この時には、もう誰も子どもを連れて日本にたどり着けるとは思わなかった。

親子連れの避難民の一行は、疲れ切ってなかなか進まない。途中、リーダー役の男性が、子どもを連れている親を集めて相談した。「このままでは、とても生きて日本に戻れません。母子とも中国で死ぬより、一人が……」と言葉を吞んだ

ある人は子どもを中国人に譲り、ある人は弱り切った子どもを木の下に置き、ある人は河に捨てたり、首をしめたりしてやむなく別れた。生き残った子どもは、残留孤児になった。

最後まで子どもを守ろうとした曾おばさんの「悲運」

こうした逃避行が一月ぐらい続いたあとで、とうとうソ連兵に拿捕され、その後、難民収容所から難民収容所へと、転々とする。一九四五年の真冬にたどり着いたのは、撫順の難民収容所だった。

木造の小学校の教室に、枯れ草を敷いた中に、二、三〇人の日本人が寝泊りしていたが、驚いたことに、そこには一人も子どもがいなかった。子どもを連れていたのは、遠いソ連の国境からたどり着いた、曾おばさんだけだった。皆、飢えと寒さで夜も眠れず、二歳になったばかりの長男が泣くと、まわりから「中国人にあげろ、迷惑だ」と怒鳴られた。

逃げ出すときに、「生きるなら子どもと一緒に」と、心に決めた曾おばさんは、子どもを中国人に預けて、自分一人で日本へ帰ることができなかった。彼女は悩んだ末、一時、中国人の嫁になり、帰国できるようになったとき、子どもと一緒に日本に帰ろうと考えた。日本語のできる中国人から、中国人男性を紹介してもらうが、その男性は、撫順市内からさらに馬車に乗る、遠い田舎に住んでいた。

その中国人男性は優しくかったので、しばらく落ち着いた生活が続いた。ところが長男が突然血を吐いて死んでしまった。

曾おばさんは狂ってしまった。今まですべて、この子と一緒に生きていくために、あらゆる苦難を乗り越えてきた。今となって自分ひとりが中国の田舎に残され、どう生きられるのか？

悲しみと絶望で、曾おばさんは毒を飲んで自殺しようとしたが、夫が気付き、死ねなかった。

死ぬことができれば逃げよう。日本に帰ろう。——ある日、曾おばさんは、夫の畑仕事の隙を見て家を飛び出した。撫順の中心地は南の方角にあると覚えていたので、ひたすら南に走った。

しかしその時中国ではすでに内戦がはじまり、市内は政府軍の国民党軍が駐留し、周りには共産軍ゲリラが出没していた。市内に逃げた曾おばさんは、なぜ農村から逃げてきたのか当局の審問に説明できず、スパイと言われて、また村に送り返された。

彼女は自殺にも逃亡にも失敗して、故郷に帰れず、苦しんでいたとき、新しい命の芽生えに気が付いた。中国人の子どもが生まれたら、どうして日本に連れて帰れるだろうか。

彼女は子をおろすために、おなかを叩いたり、高い垣根によじのぼっては飛び降りたりした。しかし結局おろすことができず、女の子が誕生した。

彼女は、母として生きていこうと、はじめて中国の田舎で暮らすことを受け入れた。やっと中国で

の落ち着いた生活が始まったその矢先、夫が過労で倒れ、亡くなった。

曾おばさんは、再び赤ん坊と二人きりになった。「やはり日本へ帰ろう、絶対中国人と結婚せずに、日本に帰れるようになったら一人娘を連れて帰国する」と決意し、村人からの見合いを全部断わった。「中国人とは絶対会わない。日本人ならいい。将来、一緒に日本に戻るのだ」——そういう彼女の心情を知る村人が、市内に日本人の独身男性を見つけた。曾おばさんは会いに行くことに決めた。

時に一九四八年となり、中国東北部の曾おばさんの住む村は、共産党政権に変わった。非常事態で厳しい移動統制がしかれた。村から出るためには、新しい村長のところへ申請しなければならぬ。村長に、「村には多くの独身男性がいるのに、なぜ市内まで行き日本人と会わなければならないのか」と詰問され、断わられた。

中国の田舎では、厳しい農作業など様々な事情で、母・子だけでは生きていけない。

身近に圧力をかけてきたのは、亡夫の姉だ。亡夫の弟との結婚を強要し、同意しないと、「子どもを連れて今すぐ、この家を出なさい」と責めたてた。

相談する相手もない曾おばさんは、当時、村にできたばかりの共産党政権の組織、「婦女連合会」に相談した。婦女連合会の人たちは「われわれは新しい政府を代表して婦人の権利を守る。お姉さんの脅しを恐れなくていい、私たちにまかせてください。」と力強く言ったので、曾おばさんは、この婦女連の役人を信用した。

そして「素晴らしい除隊軍人」として紹介されたのが、「曾おじさん」だった。曾おじさんは、村一番の貧民で、終戦後、中国で内戦が勃発して共産党軍に入隊した。共産党政権成立後、村に戻った

彼を除隊軍人として共産党政府が面倒をみたので、その結婚相手を曾おばさんに決めたのだ。

身をもって子どもを守る

曾おじさんとの間にも女の子が生まれた。しかし、夫は、無知で無教養の気の短い男で、夫婦喧嘩の多くは子どものことだった。

中国の農村では、昔から女性の教育には力を入れない伝統があった。曾家は、貧しくて、娘二人を学校に行かせる状況ではなかったが、曾おばさんは無理をして学校へ通わせた。しかし真冬になるとマイナス二〇度の寒さの中で、娘たちに綿入れの靴を買えず、通学のため足が凍傷になった。

山間地だったので、夏になると茸をとって現金に換えられる。しかし、人民公社の集団体制は、それを許さなかった。曾おばさんは子どもの足と勉強を守るために茸をとって売ったのだが、それだけで村の指導者に批判され、面子を失った夫は、家に戻って曾おばさんを殴りつけた。

曾おばさんが受けた家庭内暴力の多くは、子どものためだった。そして曾おばさんが日本に帰れなかった原因は、日本政府の政策にもよるが、母親として、すべてを子どもに捧げたせいでもあった。

一九五三年に、日本人の引揚げが再開した。曾おばさんは、その知らせを受けて、娘二人を連れて帰国手続きに行ったが、窓口の公安局から、「日本人は帰国できるが、中国人との間に生まれた子どもは連れて行くことができない」と言われ、あきらめた。子どもの養育を、粗暴な中国人の夫に任せられなかったからだ。その時からほぼ二〇年、日本と音信不通になった。

一九七二年、日中国交が正常化して、はじめて日本の肉親と文通ができた。一九七五年、一時帰国

が実現したとき、娘二人も成人していて、日本での永住帰国の夢が果たせる可能性があったが、日本政府は、その永住の受け入れ責任を親族に転化したので、条件が整わず、彼女はまた中国に戻った。それからまた二〇年が過ぎた。

一九九四年、日本の議員立法で、「中国残留日本人の帰国促進と自立支援に関する法律」が出来た。曾おばさんは、九五年に、八〇歳の高齢で、娘家族を連れ、ようやく日本に永住帰国できた。故郷の長野ではなく、大阪尼崎市の、ある養鶏会社の社長が、身元引き受け人になってくれた。

永住帰国して三年後、私は曾おばさんと久しぶりに会った。住んでいたのは、養鶏会社の社員寮だった。せまい木造のアパートだったが、曾おばさんの表情は明るく、やや太った姿だった。半世紀も願い続けた帰国が実現できた安心感が伝わってきた。生活の苦しさはいくらでも耐えられる、という曾おばさんだったが、長女夫婦が身体が弱くて、日本に来てでも働けないことを心配し、悩んでいた。そして徐々に認知症になってゆく夫の曾さんの面倒を見る日常は、苦しそうだった。

私は曾おばさんを東京へ一度迎えたいと思っていた。しかし、二〇〇〇年の一月、中国海南島へ、「元慰安婦」支援に出かけていた私のところに、「曾おばさんが脳卒中で倒れた」という知らせがあり、帰らぬ人となった。

今、このような残留日本人婦人たちは、すべて高齢となった。国策によって翻弄された過酷な人生を埋もれさせてはならない。曾おばさんの日常をつぶさに見てきた中国人として、彼女の辿った歴史を、日本人に伝え、共に考えていきたいと思う。

(中国人・ジャーナリスト)

「烏雲」の森

——日中の架け橋になった中国残留孤児

小俣 光子

立花珠美さんは、一九四〇年一〇月、二歳で、両親、姉、弟と「満州」——現在の中国東北部に渡った。小学六年生の兄は、中学進学の関係で祖母に預けられ内地に残った。

父・立花正市さんは、徳島県北井上村役場で兵事係として勤務していたが、「満州」に行けば内地の五倍の給料を貰える」という誘い文句に心動かし、「満州」で「一旗挙げよう」と、「満州国」政府官吏の採用試験を受けて合格。「満州国」興安南省王爺廟（現・中国内モンゴル自治区興安盟烏蘭浩特市）にあった西科前旗公署に行政官吏として配属された。「満州国」では、当時行政全般は日本人が支配していた。

「満州」北西部

「満州国」政府は内モンゴル東部地域に、興安東、西、南、北の四省を設置して、この地域のモンゴル人を統治した。四省あわせた面積は、ほぼ日本全土に匹敵した。興安北・東・南三省の中央を南北に縦走している大興安嶺の西北部は、あのノモンハン事件で有名なノモンハンの草原が、ハルハ河に接し、外モンゴルの大草原に連なっている。同事件以来、ソ満国境の緊張が続いていた。立花さんは赴任してから三年後の四三年、興安四省が統一され、興安総省が設置された。その省都が興安南省王爺廟に置かれ、王爺廟は興安街と改名された。立花さんは興安総省公署民生庁動員科に異動した。

立花一家は興安街の官舎に住んだ。正市さんは興安医科大学の設立などに奔走して休日を返上することが多かったが、北井上の役場の給料（四五円）の五倍以上の二五〇円の高給をとり、母シズ子さんは、「自分の時間が持てるしあわせ」を知った。「満州」で、弟と妹が生まれた。

ソ連軍侵攻

四五年四月、珠美さんは「満州国」興安総省興安在満国民学校に入学した。

八月九日の朝、突然、国民学校児童全員が非常招集され、珠美さんは五年生の姉、淳子さんに手を引かれ、学校へ走った。周囲はあわただしい雰囲気包まれていた。

「みなさん残念です。ソ連が約束をやぶり、攻めてきました。興安街が、戦場になるかもしれません。大急ぎでお家に帰って、避難の準備をしてください」

校長先生の声が震えていた。

資料や関係者の証言によると、興安総省が日・ソ開戦を予想した戦時特例として極秘に作成していた「興安街在留邦人の疎開対策」いわゆる「興蒙対策」は、モンゴル人との友誼を頼りとし、全邦人を省内の北方純蒙地帯の札賚特旗公署にひとまず避難集結させることを目的としていた。そして疎開団を居留地域別に三班に分けていた。第一班は興安街西半部、総省・公署関係者の居住区、約一二〇〇人。第二班は興安街東半部、合作社関係者・電信電話局職員の居住区、約一三〇〇人。第三班は東京往原開拓団、仁義仏立開拓団、約一六〇〇人、の三班だ。

ソ連参戦の報に、八月九日早朝から夜を徹して行われた総省の幹部会議で、「興蒙対策」要綱に基づき、

在留邦人の避難行動がきまったのは、一〇日早朝だった。一班を協和会（満州国民への宣撫教化を担った官製組織）の高網信次郎副会長に、二班を西科前旗公署の浅野良三参事官に、その指揮を命令。開拓団は、それぞれの団長に一任した。

もちろん、この「興蒙対策」は、関東軍や、満州国陸軍興安軍官学校（モンゴル人の陸軍幹部候補生養成）学生隊による護衛を前提条件としていた。しかし関東軍第四十四軍三個師団は、新京（現・長春）司令部の命令により、八月一日、いちはやく、しかも秘密裡に、新京、奉天（現・瀋陽）方面に撤退した。一方軍官学校では、ソ連侵攻とともにモンゴル系兵士が反乱を起こし、逃亡した。興蒙対策は、その根幹が崩れたのだ。

殺戮の草原

父親が通遼に出張中だった立花一家は、八月一日、大混乱の中、母親は、珠美さんら五人の子どもを連れて、高網隊の集合場所にかけつけた。高網隊の先発隊四〇〇人は車によるピストン輸送で避難先へ向かったが、情勢の急変で後続隊の輸送は中止された。残された立花一家を含むおよそ八〇〇人は、余越貞・教務官の指揮のもと、翌一日、興安駅から南下するため、汽車に乗り込んだ。しかし、母親は出張中の父親と行き違ったら一生会えなくなってしまうと思い、発車寸前に下車した。

翌二日、立花一家は浅野隊に便乗して、徒歩で烏蘭哈達まで避難したが、進路変更によって、一日、再び徒歩で葛根廟をめざした。

葛根廟はモンゴル民族が崇敬する、チベット仏教の靈廟。興安街から東方約三〇キロの草原の丘陵

地に広大な敷地を有し、周囲を城壁のように囲んだ中に寺院群が並び建っていた。

妹を背負い、弟の手を引いた母親は、しだいに速度が落ちて最後列近くになりながら、やっと葛根廟が見える所まで来た。このとき午前十一時頃。いきなり、後方から侵攻したソ連軍戦車隊の猛攻を受け、浅野隊一三〇〇人は、ほぼ全滅した（後の調査で百人余の生存者が確認された）。

この惨劇を遠くから目撃していた陸軍斥候隊員の根本俊男さんによれば、「二四台のソ連戦車軍団は、山道を一列縦隊で進軍し、丘の頂上でいっせいに横列になって、トボトボと歩く避難民の最後列に全速力で襲いかかったのです」。また、別の場所にいた伝令兵、菅忠行さんは、「約一時間、反復攻撃を加え、さらに戦車から降り、逃げる無抵抗な避難民を追いかけて斬りつけ、倒れた者を刺殺するなど、徹底した殺戮であった」と証言している。

家族の中でただ一人生き残った少女

九死に一生を得た、当時七歳であった珠美さんの証言によると、「姉は、壕のような窪地の中で人びとの下敷きになって、死んでいました。六歳の弟は、行方がわからなくなりました。おそらく死んでしまったと思います。四歳の弟は、銃撃を受けて、馬上で死んでいました。母は背負っていた、まだ一歳にもなっていないかった妹を、いきなりナイフで刺し殺しました。私は驚いて逃げました。母は追いかけてきませんでした。振り向くと母も、自らナイフで自分を刺しました。私は力を振りしぼって母の許へ走り寄りました。母は妹を抱いたまま横たわっていました。私は「お母さん、お母さん」と大声で呼びかけて泣き叫びました」

「母は虫の息で、私に小さい袋を渡してくれました。そして「この中にお金と家族の写真があるから、これを持ってお父さんを探しなさい」と言い終わると、息をひきとりました。逃げ場もなく、生きるあてもなく追い詰められて、可愛いわが子を自分の手で殺さなければならなかった母の心情を思うと、私は胸が張り裂けるような悲しみでいっぱいです」

一瞬にして五人の肉親を失った珠美さんは、両親と姉と自分の名前を一所懸命に心の中で繰り返し記憶した。「父の名はタチバナサイチ、母はタチバナシズコ、姉はタチバナジュンコ、私はタチバナタマミ」父親と日本ににいるという兄を探すには、名前を覚えておくしかない、強く思った。

どこもかしこも死体の山、燃えるような炎天下で、空腹と渇きのため死んだ人の持ち物の中から食べ物を探して食べ、窪地に溜まった血の混ざった泥水を、手ですくって飲んだ。夜になるとバケツをひっくり返したような大雨が降り、ずぶ濡れになったが、母や姉弟たちの死体のそばで、三、四日、なすすべもなく呆然としていた。この時の飢えと恐怖と苦しみは、今も決して忘れることはないという。

広い草原の真っ只中で、ただ一人残された珠美さんは、恐怖で震えながらも、幾度となく近くの橋の上にあがって人を探した。やがて二人のおじさんが近づいて来た。この二人の中国人に連れられて張さんの家に行き、そこで育てられた。張さんには子どもが四人いて、貧しい農家だったが、夫婦はとても優しい人で、珠美さんを実の子のように慈しんでくれた。

四十六年五月、第二の養父母の家に行くことになった。養父はモンゴル族の阿拉坦^{アラタン}弥^ミさん。養母は漢族の王秀廷さん。子どもに恵まれない夫婦であった。養父は軍人（内モンゴル騎兵師団）で知識人、珠美さんの教育に熱心で、「知恵」「聡明」を意味するモンゴル語の「ウユン」と命名してくれた。中国名の「烏雲」は発音に漢字をあてはめたものだ。

モンゴル人として生きる

この時から、日本人の立花珠美さんは、中国人烏雲さんとして、生きてゆくことになった。養父は、烏雲さんを立派なモンゴル人に育てるため、乗馬の手ほどきをし、モンゴル語、中国語を教えた。

四八年の冬、養父は軍人を退役して、故郷（現・通遼市胡碩村）に帰り、農業に従事した。

村に、ようやく学校ができて、烏雲さんは一一歳で小学校二年に入学した。当時の農家は貧しく、農家の子どもは、いかに賢くても、学校に行く子はいなかったが、養父母は懸命に働き、自分たちの生活をきりつめて、烏雲さんを学校に通わせた。烏雲さんもまた、「一所懸命勉強して、優秀な成績をとり、両親と中国に恩返しをしよう。将来教師になって、中国の教育に捧げよう」と、学業に励んだ。初級中学は烏雲さんが六年間住んでいた興安街（現・烏蘭浩特）にあり、寄宿舎に入らなければならなかったが、優等生として国家奨学金で入学し、高級中学に進み、さらに呼和浩特に新設された内モンゴル師範大学に進学した。

師範大学卒業後、内モンゴル自治区庫倫旗にある庫倫旗第一中学の教師となり、中国の子どもたちの教育に献身した。五七年、同僚の教師、馬振源さんと結婚。翌年に娘が生まれ、烏仁其木格と、モンゴル名をつけた。翌々年に生まれた息子には、馬美春と中国名をつけた。

烏雲さんは、少数民族、内モンゴルの教育の発展に尽くし、六〇年には初級中学班主任になった。多くの生徒を自宅に招いて面倒をみ、経済的に恵まれない生徒には学資を援助するなど、生徒から「エージ・バクジ」（お母さん先生）と慕われた。

文化大革命の嵐の中で

六六年に始まった文化大革命では、大勢の知識人が糾弾され、日本人も同じ運命に遭った。烏雲さんに危機が迫っていると感じた養父母は、彼女を二〇〇キロも離れた所にかくまい、居所を隠し通した。

また、彼女が日本人であることを知っている同僚や教え子たちも、皆でかばい、守ってくれた。

「養父母の思い出は尽きませんが、特に文化大革命の時のことは忘れることができません。その頃は社会全体が文革で混乱し、子が親を、弟が兄を、革命側に密告することが、平気で行われていました。養父母は『私は日本のスパイでした』という看板を首にかけられ、町中を何度も引き回されました。しかし、養父母は必死に耐え、命がけで私を守ってくれました。私は、もう、どうなってもよい、名乗りでようと、何度とも思いました。でも、養父母は、家に帰ることも、手紙を書くことも、決して許しませんでした。私は養父母に、どんな言葉で感謝したらよいか、言葉で表現することなどできません」と、当時のことを語った。

七一年、夫・馬振源さんが肝硬変で亡くなった。生きる希望を失いかけた烏雲さんを慰め励ましたのは、同僚や生徒たちの支援だった。息子が病気になったときも、また烏雲さんが肺結核を患ったときも、同じように手厚い看護の手をさしのべてくれた。

文革の終息を見届けるように、父・アラ担敷弥さんが亡くなり、それを機に、母・秀廷さんと同居する。

四〇年ぶりの帰国

七二年、日中の国交が正常化。中国残留日本人の一時帰国、永住帰国が始まった。

八〇年四月、烏雲さんは、日本の早稲田大学に留学後、四〇年ぶりに故郷の内蒙古庫倫旗へ里帰りした群馬県高崎市在住のモンゴル族の散巴拉さんに会い、日本の肉親捜しを依頼した。

あの葛根廟事件以来、肉親を捜し当てることを夢みて、呪文のようにつぶやいていた「タチバナマサイチ……」、まさにこの家族の名前が、日本の肉親捜しの手がかりになったのだ。

散巴拉さんが彼女の情報を日本に持ち帰り、中国残留日本人を支援している人びとの連携により、同年五月、故郷は徳島県であり、兄・立花甫さん（労働基準局職員）が健在であることが判明した。甫さんは死亡除籍となっていた珠美さんの復籍をはかり、帰国手続きをとった。

八一年八月、珠美さんは、娘・烏仁其木格さんと一緒に、四〇年ぶりに祖国の土を踏み、徳島に帰郷した。父・正市さんは、すでに亡くなっていた。

初めて知った父の戦後

立花正市さんは、四五年八月一日、出張先の通遼で、ソ連軍侵攻を知り、急ぎよ、汽車で興安街に引き返した。途中乗り換えの白城子駅で興安駅から避難してきた汽車に遭遇した。

その汽車には正市さんの役所の同僚や友人、近隣の顔なじみの人たちも乗っており、彼らから、「奥さんも子どもと一緒に駅に來たので、どれかの車両に乗っている」と聞いた。そして、女・子ども主

体のこの大勢の避難集団（余越隊）を指揮する男性が不足しているので、その指揮を頼まれ、ついに避難列車に同乗した。指揮に加わりながら列車の中を探したが、家族は見当たらない。そのうち、自分の家族が「汽車で避難した後に、お父さんが帰って来たら二度と会えなくなる心配があるので、あとに残る」と言って、発車直前に下車したことを知った。

その時すでに、避難列車はあてもなく南へ南へと走っており、ソ連軍の急侵攻によって興安街へ引き返す汽車はない。さらに指揮をひきうけた責任もあり、まさに断腸の思いで、四平街、奉天（現・瀋陽）と、敵の攻撃を避けながら南下した。

八月十五日、安東駅に到着、そこで終戦を知らされた。安東駅から第一陣の引揚者として、疲労と栄養失調に倒れていく同胞を見捨てながら、朝鮮半島を縦断して、二〇日釜山に着いた。貨物船（榮江丸）、漁船などをチャーターして山口県小串港に向かった。

しかし正市さんの乗った船は、小串港で機雷に触れて爆沈。八〇余名の犠牲者を出した。

正市さんは甲板上から船底まで吹っ飛ばされて、胸椎骨折の重傷を負ったが、港付近の人たちに救助され、同船の人びとと一緒に近くの小串小学校に収容された。

九月一〇日、小串の人が手づくりしてくれた松葉杖にすがりながら、生家に辿り着いた。

自宅療養の後、再び地元の役場に勤務、助役などの要職について、七二年病没した。

『満州』にいかなければこんなことにならなかった」と、自らを責め続けたという父の胸中を思い、烏雲さんは慟哭した。

大草原に還る

兄夫婦は、烏雲さん一家の受け入れをすっかり整え、日本への永住を強く勧めた。

しかし、烏雲さんは、育ての親の恩愛やモンゴル族への同志愛を忘れたことがなかった。結局、モンゴル人教育に専心し、モンゴル人のしあわせのために働くことが、自分のしあわせであることを悟り、日本での永住は断念、中国の草原に還ることを決意する。

九〇年には、中華全国婦女連合会が中国の近代化に功績のあった女性に贈る「全国三八紅旗」に選ばれ、翌年には、「全国教育模範賞」を受賞し、さらに、彼女の半生を取材した記事「彼女の中国の心」が『人民日報』に掲載され、烏雲さんは、はからずも〈時の人〉となった。

九二年、中国の電台とNHKが共同で、日中国交正常化二〇周年記念番組として彼女をモデルにしたテレビドラマ「大草原に還る日」を制作。日・中両国で放映された。

九三年には、中国人民政治協商会議全国委員（日本の参議院議員にあたる）に選ばれ、活動の場は、さらに大きく広がった。烏雲さんは、自分に何ができるか、何をしなければならないかを考えた。

中国は改革開放以来、経済は急速に発展し、人びとの生活は向上した。しかし、日本の二五倍も広い中国の半分以上が、沙漠あるいは、沙漠化しており、それらの地域は、とり残されている。

ことに彼女が三二年間勤めた、内モンゴル自治区の東部、庫倫旗第一中学の周辺に広がる面積五〇〇万ヘクタール（九州の一・二倍）のホルチン沙漠は、過剰な開墾と伐採により急激に沙漠化し、多くの人びとが貧困や離村に追い込まれている。「モンゴルと養父母への恩に報いるため、沙漠植林に命をかけよう」と、烏雲さんは決心し、市と協力して、住民参加の植林活動を始めた。

「烏雲」の森

九四年、日本砂漠植林ボランティア協会が、「ホルチン沙漠が沙漠化した原因の一つは、満蒙開拓団に土地を奪われ、追い出された中国の農民が、農耕に適さない土地に入植したことにある」と分析し、その罪滅ぼしのため、そして烏雲さんの中国への報恩の志を支援するために、「三〇〇〇ヘクタールの土地に五〇〇〇万本の木を、二五年間で植える」という計画を立て、そのうち三六〇ヘクタールを「烏雲の森」と名づけた。

九五年、徳島県中国交流協会が烏雲さんを招いて講演会を開き、彼女の話に感動した地元の人たちの呼びかけで、「烏雲の森・徳島沙漠植林ボランティア協会」が設立された。こうして「烏雲の森沙漠植林」支援団体が日本各地に誕生。中国の人たちと交流を深めながら活動している。

彼女は今年六八歳。通遼市にある退職幹部用官舎に、養母・息子夫婦・孫と住んでいる。

「植林事業は、中国残留孤児の私を育ててくれた養父母や、草原の仲間たちへのご恩返しです。この事業が、日本との技術協力で推進できることにより、日本と中国の架け橋になれてうれしい」と語った。烏雲さんが、ひとつ残念に思っていることがある。それは、中国共産党の党員になれなかったこと。養父が「満州国」に関わりがあったというのが理由らしい。「党員にはなれませんでした、私は普通の党員以上に共産党の理想を実行してきたと自負しています」と、語った。

「私が死んだら、遺骨は日本海に散骨してほしい。潮流によつては、日本に流れつくこともあるから」これが、烏雲さんの遺言であると、兄、甫さんから聞いた。

(中国史研究者)



降伏した将兵はソ連兵の監視のもと、各終結地に移動させられた。

今も終わらぬ戦後 2

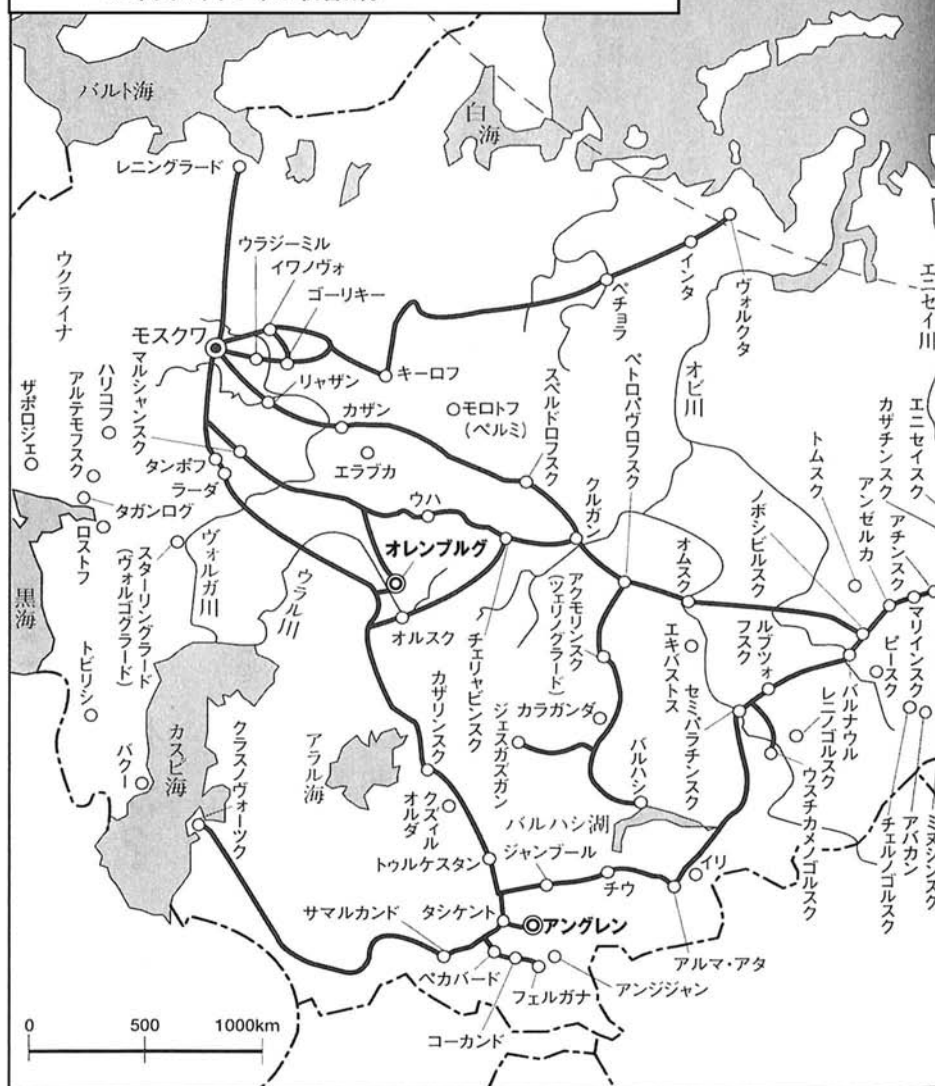
シベリア抑留と強制労働補償

ソ連抑留関係略図

収容所の所在地とその周辺を主に作成した。

鉄道路線は幹線のみ記した。

◎本文に出てくる収容所。



明治以降の大陸侵略がもたらした災厄

日本人捕虜のシベリア抑留とは何か？ 白井久也

戦後、大きな政治・社会問題になった「シベリア抑留」問題は、六〇年以上たった今日も未解決のまま放置され、一般国民も関心がなく、忘れ去られようとしている。

二一世紀の現在は、総人口一億二七八二万人（二〇〇六年一月一日現在）の日本人の約四分の三が、戦争を実際に体験したことのない世代によつて構成されている。中学校や高校の歴史教科書で、日本人捕虜のシベリア抑留問題が、大きく取り上げられることもない。日本国民の大多数、とりわけ若い人たちにとっては、日本人捕虜とかシベリア抑留という言葉は、まったくなじみのないもので、それらが何を意味するか、理解に苦しむのは、当然のことなのかもしれない。

敗戦直後の国民的課題、シベリア抑留

だが、敗戦直後に何一〇万という留守家族が、自分たちの身内であるシベリア抑留者の早期帰還を求めて走り回り、それが国民的な大きな課題となった歴史的事実があったことを、日本国民ならば決して忘れてはなるまい。シベリア抑留問題は、実は抑留者本人とその留守家族を含めると、当時の日本人一〇〇人に一人が関わった全国民的な重大事件であったのだ。戦後間もなく大ヒットした流行歌、「異

国の丘」や「岸壁の母」は、シベリアに抑留された日本人捕虜の一日も早い祖国帰還を願う悲痛な叫び声であった。あれから早くも半世紀以上たった今日……。年老いた元抑留者の胸中には、未だに報われないシベリア強制労働補償の古傷が疼いている事実、目をつぶってはならない。元シベリア抑留者にとって、まさに戦争は遠くなったが、彼らの戦後は今もまだ終わっていないのである。

事の起りは、太平洋戦争の最終末期に、ソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄して、突如、対日参戦したことによる。一九四五年八月九日、約一五八万のソ連の大軍が、ソ満国境を越えて、満州（現在の中国東北地方）などに侵攻。たった一週間の戦闘で関東軍を降伏させ、六四万人の日本軍将兵を捕虜に取り、シベリアなどソ連各地へ拉致・連行して収容所におち込み、強制労働を課したのだ。厳寒、飢餓、重労働の「シベリア三重苦」に喘ぐ過酷な抑留生活は、短い者で二―四年、長い者は一〇余年に及び、彼の地で六万二〇〇〇人が死亡、四万五〇〇〇人が負傷。不具廢疾者も多数出た。

一般的にシベリア抑留と言うと、「ソ連は実にけしからん国だ」と、日本ではいつもソ連が悪者になっている。無理もない。ソ連は一九四五年四月五日、突然、日本に対して日ソ中立条約（一九四一年四月―三日締結）の不延長を通告してきた。しかし、この条約が実際に失効するのは一九四六年四月二五日なので、ソ連が満州へ侵攻したとき、同条約は「引続き有効」であった。ソ連の満州侵攻は、国際法上、「ソ連による日ソ中立条約の一方的な破棄」と見なされ、日本側が到底、容認できるものではないことは言うまでもない。

しかもソ連は、満州で投降し武装解除された関東軍将兵六四万人を「トウキョウ・タモイ（東京帰還）」とだまして、シベリアなどに拉致・連行後、長期抑留生活を強いて過酷な強制労働に使役したのだ。

だが、日本が無条件降伏に当たって受諾した「ポツダム宣言」は、第九項で、「日本軍の武装解除後、

連合軍の捕虜になった日本兵は、本国へ早期帰還させる」ことをうたっている。したがって、元関東軍将兵の長期シベリア抑留は、国際法でもあるボツダム宣言の明らかな違反と言えよう。強制労働の補償は、だれが見ても、もっともな主張で、日本人であるならば、当然、同意せざるを得まい。

大陸侵略と満州国支配の関東軍

だが、この議論はその前に、なぜ大規模な日本の軍隊、つまり精強をもって鳴った関東軍が、日本の領土でもない満州という異国に駐留していたのかという重要な視点が欠落している。

関東軍というのは、中国東北地方の関東州及び満州に駐留した日本陸軍諸部隊の総称。日清・日露戦争に勝った日本が、一九一九年（大正八）年、それまで置かれていた守備隊を独立した部隊に改編・増強したものだ。

この関東軍の役割は、大陸侵略の「外征軍」であると同時に、満州国支配の「植民地軍」という二つの顔を持っていて、日本の軍隊の中では「最も侵略的な性格を持った軍隊」であった。

関東軍が、元来、守備する責任と権限を持っていたのは、関東州と満鉄付属地だけであって、それ以外に軍隊を出動させれば国外に出兵することと同じ。奉勅命令なしに勝手に軍事行動を起こしてはならなかった。だが、実際には陸軍中央の統制に背いて、関東軍は、しばしば軍事的に独走した。

その最たるものは、「満州事変」（一九三一年九月一八日）という軍事謀略によって、日本の傀儡国家「満州国」を建国したことであった。満州国が建国されると、「王道楽土」「民族協和」のスローガンのもとに、日本から大量の開拓移民が満州に送り込まれた。先住の中国農民を追い出して没収した

耕地に、続々と入植したのだ。満州各地では、当然のことながら抗日義勇軍が組織され、日本に対する抵抗運動が激化した。その抵抗を警察力で取り締まれないときは、関東軍が治安出動して鎮圧した。一九三七年七月七日、今度は北京郊外で盧溝橋事件が突発。日中全面戦争（支那事変）が始まった。日本政府は「不拡大方針」を打ち出したが、中国大陸にいた支那派遣軍を支援するため、関東軍は独断で、在満部隊の一部を華北に派遣した。一方、満州国の建国に伴って、新たな国境紛争の火種もできた。満州国は、東、北、西の三つの防衛正面で日本の潜在敵国・ソ連と総延長約四〇〇〇キロにわたって国境を接し、日ソが事実上、軍事的に対峙することになったのだった。

その結果、張鼓峰事件（一九三八年七月）、ノモンハン事件（一九三九年五月～九月）と、国境紛争事件が相次ぎ、極東ソ連軍の戦力を見くびった関東軍は、ノモンハン事件で惨敗を喫した。そして最後に迎えた一九四五年八月の日ソ戦争でも、怒濤のごとく侵攻してくるソ連の大軍に徹底抗戦することなく、関東軍は敗北に追い込まれてしまふのであった。

太平洋戦争末期のソ連の対日参戦は、一九四五年二月のヤルタ会談でスターリン・ソ連首相とルーズベルト米国大統領が談合して取り決めた「密約」を実行に移したものだ。それにしても、かつて無敵を誇った関東軍としては、誠に哀れな末路であった。明治以降大正を経て昭和に至る日本の大陸侵略政策は、敗戦によって完全に破綻して、その結果が関東軍将兵の大規模なシベリア抑留へつながって行つたのである。このような歴史的な視点を捨象してソ連の非道ぶりのみ非難し、日本が被害者づらをするのは公平を欠くことになる。この点、日本人はもっと謙虚になって自国の近現代史の見直しをする必要がある。

二〇世紀前半に日本が推進した二つの侵略戦争、すなわち日中戦争と太平洋戦争は、約二三〇万人

の日本国民と約二〇〇万人のアジアの人びとの尊い命を奪った。日本人捕虜のシベリア抑留は、日本が関わったこの二つの侵略戦争と決して無縁な歴史現象ではなくて、必然的に起こるべくして起こった日本国民にとつての大変な厄災であった。死亡者や負傷者を含めた元抑留者やその遺家族にとつては、極めて酷な言い方かもしれないが、シベリア抑留問題のすべての責任を「スターリン体制のソ連」のせいにして、ソ連を呪い罵倒するだけでは、本当の意味でシベリア抑留問題から「歴史の教訓」を引き出すことはできない。

抑留体験を歴史体験にまで昇華して、後世に末長く伝えて行くためには、「シベリア抑留問題を、日本の近現代史や明治以降の口口・日ソ関係史の中でどう把えるか」という視点が必要である。とりわけ事実 に即した能動的な歴史認識が不可欠である。

換言すれば、日本人捕虜に計り知れない苦痛と犠牲を強いたシベリア抑留は、単なる一個人の体験の問題に押し止めて、結果的に矮小化わいしょうかするのではなくて、戦争の悲惨さや平和の尊さを教える「歴史の教訓」の問題として新たに把え直して、後世に長く語り伝えて行かねばならないのである。

天皇制存続を画策する日本の支配層

スターリン体制下のソ連が、六四万人もの関東軍将兵を捕虜に取って、シベリアなどへ拉致・連行して強制労働を科した理由については、諸説がある。「ナチス・ドイツの侵攻によって破壊・荒廃した国土や経済の立て直しに必要な労働力が大量に不足したため、捕虜労働によってその穴埋めを図った」などは、そのよい例であろう。第二次大戦でソ連がこうむった損害は莫大なもので、人的犠牲者

だけでも二〇〇万人以上にのぼるため、確かにこの説は否定できない。

だが、理由は決してこれだけに留まらない。太平洋戦争の敗色が濃厚になった一九四五年初めごろ、わが国の支配層は、「国体護持（天皇制の存続）」のため、当時、日本とは中立関係にあったソ連を説得して、交戦中の米英との和平の仲介をやらせて、太平洋戦争を終結するための画策に乗り出した。日本政府のこうした意向をソ連に受け入れさせる目的で、元首相近衛文麿を天皇特使としてモスクワに派遣し、スターリンと会談を行う密命が発せられ、外交ルートを通じて対ソ根回し工作が始まった。このとき、近衛・スターリン会談でスターリンの賛同を取りつけるための見返りとして、近衛は宮中で天皇と会い、自らがまとめた「和平交渉の要綱」について、天皇の同意を取りつけた。

「国体護持」と引き換えの「兵力賠償」

それによると、「国体の護持は絶対にして一步も譲らざること」を条件にして、ソ連が米英との和平交渉の仲介をやってくれるならば、日本は「そのための賠償として、一部の労力を提供することには同意する」として、「国体護持」と引き換えに「兵力賠償」の対ソ提供を、臆面もなく申し入れる内容になっていた。それは敗北に先駆けて、将が敵軍に兵や民を売る「棄兵棄民」政策の最たるものであった。

しかし、外交ルートを通じた必死の対ソ折衝にもかかわらず、「近衛訪ソ」は不発に終わってしまった。日本側が近衛の派遣を希望した七月一日から、米英ソ中四カ国首脳が、ドイツのポツダムで対日戦後処理問題などについて会談を開くため、ソ連も含めた関係国は、その準備に忙殺されていた。

モロトフ・ソ連外相は日本側からの申し入れに関して、近衛訪ソの意図について十分な情報を取っ

たのち、「今はその時機ではない」と受け入れを拒否する「ニエット（否）」の返答をするようロゾフスキー外務次官に指示して、スターリンとともにポツダム会談に臨んでしまった。こうして、近衛・スターリン会談は、遂に実現することなく、八月九日の日ソ開戦に至ったのであった。

関東軍・大本営参謀も「兵力賠償」を約束

米国による広島、長崎の原爆投下に続く予期せぬソ連の対日参戦で、あつけなく敗戦に追い込まれた日本の支配層は、その後も連合国から国体護持の確約を取り付けるため、必死になった。

天皇制反対のソ連から、「対日宥和政策」を引き出す狙いで日ソ間で蒸し返されたのが、ほかならぬ「兵力賠償」の対ソ提供であった。極東ソ連軍に降伏した関東軍司令部と大本営参謀が、ともに大本営陸軍部の意向を汲んで行なった具体的な対ソ折衝の歴史的な証拠として、関東軍司令部の「ワシレフスキー元帥ニ対スル報告」ならびに、朝枝繁春大本営参謀の「関東軍方面停戦状況ニ関スル実視報告」が、今も残されている。

これら一連の文書には、「国体護持」そのものについては何の言及もないが、「兵力賠償」の対ソ提供に関する考え方は、近衛訪ソのために準備された「和平交渉の要綱」の考え方をそっくりそのまま踏襲していて、関東軍文書を貫く論理は、ほかならぬ「国体護持」を前提のうえに組み立てられた棄兵・棄民であることは、だれが見ても否定できない事実である。

以下は、関東軍司令部がまとめた「ワシレフスキー元帥ニ対スル報告」の「兵力賠償」に該当する

箇所の全文である。この報告文書の欄外には、「八月二六日に受領」とロシア語の書き込みがあり、ワシレフスキー元帥に回覧されたことがうかがえる。

一、次は軍人の処置であります。満州に生業を有し家庭を有するもの並びに希望者は、満州に止まって貴軍の経営に協力せしめ、その他は逐次内地に帰還せしめられ度いと存じます。右帰還の間に於きましては極力貴軍の経営に協力する如く御使い願ひ度いと思います。

一、其の他たとえば撫順などの炭鉱に於いて石炭採掘に当たり、若しくは満鉄、製鉄会社などに働かせて戴き、貴軍隊を始め満州全般の爲本冬季の最大の難関である石炭の取得その他に当たりたいと思います。

一方、朝枝文書も、同じ八月二六日に、ソ連側に提出されていて、「全般的に同意ナリ」とする、秦彦三郎関東軍参謀長の「大本営参謀の報告ニ冠スル所見」が添付されていた。以下は兵力賠償に関する該箇所の必要事項の抜粋である。

一、一般方針

内地ニ於ケル食糧事情及経営事情ヨリ考フルニ既定方針通大陸方面ニ於テハ在留邦人及武装解除後ノ軍人ハ「ソ」聯庇護下ニ満鮮ニ土着セシメテ生活ヲ営ム「ソ」聯側ニ依頼スルヲ可トス

二、方法

1 患者及内地帰還希望者ヲ除ク外ハ速カニ「ソ」聯ノ指令ニヨリ、各々各自技能ニ応スル定職ニ就カシム

2 満鮮ニ土着スル者ハ日本国籍ヲ離ルルモ支障ナキモノトス

もちろん敗軍の将が降伏に際して、その兵を売った例が過去に皆無であつたわけではない。だが、

そうした暴挙は、もちろん人道や正義の見地から断じて許されてはならない。「一將功成り万骨枯る」例が二〇世紀の近代軍隊にあって良かるうはずがない。だが……。関東軍文書や朝枝文書が存在を、マスコミ報道によって、初めて知らされた元シベリア抑留者たちの気持ちは、複雑かつ悲痛であった。「やっぱり俺たちは国の棄兵棄民政策の犠牲者だったのだ」。そうしたやり場のない思いに駆られた元抑留者たちは、心の安定と平静を取り戻すのに、何日もかかったのであった。

皇軍兵士だった朝鮮人捕虜の運命

ところで、日本人捕虜のシベリア抑留問題を考えるとき、絶対に忘れてはならないのは、約二万人の朝鮮人が日本人捕虜としてシベリア送りとなつて、強制労働を科せられた歴史的事実である。

なぜ、そんなことが起こつたのか？ まず最初に、彼らは実は、一九一〇年の「日韓併合」によつて、日本が朝鮮半島を植民地支配した結果の犠牲者であつたことを、理解する必要がある。

日露戦争に勝つた日本は、三次にわたる不平等条約、「日韓協約」を朝鮮に押しつけ、統監府を設けて内政・外交を完全に牛耳り、一九一〇年八月の「日韓併合に関する条約」の調印で、朝鮮は名実ともに日本の植民地となつた。それから日本の敗戦に至るまでの三五年間、朝鮮の植民地支配の中枢機構となつた朝鮮総督府の下で、「内鮮一体」の同化政策が強引に進められ、民衆による反対運動や蜂起は、憲兵と警察の弾圧と軍隊の出動によつて鎮圧された。

三十七年七月に日中戦争が勃発すると、朝鮮では全面的な戦争動員体制が確立。戦争遂行の「皇民化」の一環として、朝鮮人に日本人の名前を名乗らせる「創氏改名」の法律が三十九年十一月に公布され、

翌四〇年二月から施行された。さらに、太平洋戦争開戦一年後の四二年五月には、朝鮮人に対する徴兵制が閣議決定され、翌四三年八月から施行された。こうして朝鮮人も、日本人と同じ「皇軍兵士」として、戦争に駆り出されることになったのであった。

日本の敗戦を前に、強制的に徴兵されて関東軍に配属された朝鮮人たち約一万人が、ソ連の対日参戦によつて侵攻してきたソ連軍の捕虜となった。彼らの当時の国籍は日本で、創氏改名によつて日本人の名前をつけられていたため、元来、朝鮮人でありながら、日本人捕虜とされてしまったわけだ。そんな事情を知らないソ連收容所当局は、最初、日本人と一緒に朝鮮人も強制労働に駆り立てた。しかし、一年ぐらいうると、日本人捕虜の中に朝鮮人が混じっていることが判明。朝鮮人側の要望もあつて、收容所内に朝鮮人だけの独立作業隊が作られて、日本人捕虜とは別の作業を割り当てられるようになった。もちろん名前も朝鮮人固有の名前を名乗るようになって、人権を回復した。しかし、強制労働の厳しさと貧しい食事は、日本人捕虜と何ら変わることがなく、朝鮮人捕虜も否応無くシベリアなどで生き地獄を体験させられた。

彼らの苦難と悲劇は、自由の身となった帰国後も続いた。戦後の朝鮮半島は南北に分断されたばかりか、冷戦のあおりで南北朝鮮は政治的に厳しい対立状態にあつた。韓国人の元シベリア抑留者たちは、保安機関に出頭を求められ、共產主義者または特別な指令を受けた工作員ではないか、と徹底的な取り調べを受けた。履歴書に本当のことを書くと、どこも雇ってくれなかった。こうして、就職では著しい不利益をこうむった。このため朝鮮人の元シベリア抑留者たちは、冷戦期間中、家族以外に抑留体験を語ることがなかった。沈黙を破ることができるようになったのは、ソ連と韓国の国交が樹立された一九九〇年以降のことであつた。

捕虜の人的処遇定めたジュネーブ条約

捕虜の人的な取り扱いを定めた一九二九年ならびに四九年のジュネーブ条約によると、捕虜労働には、その対価として、労働賃金の支払いが義務づけられている。にもかかわらず、シベリア抑留の元捕虜の抑留国（ソ連）も、所属国（日本）のどちらも、彼らの捕虜労働に対して、これまで、一円の労働賃金も支払うことはなかった。しかも、五六年の日ソ共同宣言で、日ソ両国は相手国に対する請求権を相互に放棄したため、国際法上、元抑留者はソ連ならびにその後継国家のロシアに、抑留補償の請求ができなくなってしまった。

ところが、南方地域で米軍や英軍の捕虜になった元日本兵は、日本への帰国時に未払い労働賃金を支給されたのだ。元シベリア抑留者とは、大違いである。同じ赤紙一枚で戦争に駆り出されたのに、なぜこんなひどい差別待遇が罷り通るのか？ 政府のこの理不尽極まりない仕打ちに怒った斎藤六郎元全国抑留者補償協議会会長（故人）など、元シベリア抑留者たちは、一九八一年四月から八五年一〇月にかけて、四回に分けて、国を相手取って、未払い労働賃金の支給を求める民事訴訟を起こした。

元抑留者の国家補償請求を棄却した判決

しかし、政府に気兼ねしたのか、司法の壁は予想以上に厚かった。一九八九年四月一八日に、東京地裁が下した判決は、「原告の大半は四九年のジュネーブ捕虜条約が日ソ間で発効する以前に帰国しており、この条約の適用は受けない」というつれないもので、元シベリア抑留者たちの国家補償請求

を棄却。さらに、「原告らの損害は、国民が等しく負担するべき戦争被害であり、これに対する国家補償は憲法の予想しないところである」と止めを刺し、有無を言わせなかった。その後行われた控訴審、上告審も、一審判決を全面的に支持したため、一六年間にわたった法廷闘争は、元シベリア抑留者たちの完敗に終わってしまった。日本人とともに、戦後、シベリアに抑留された元朝鮮人兵士が日本政府を提訴した抑留補償裁判も、原告側の敗訴が確定した。

政府・与党が行なった戦後対ソ政策

では、政府・与党は、この間に何をしてきたのか？ 戦後の政府の対ソ政策は、北方領土の返還が主たるものであった。シベリア抑留や捕虜問題を積極的に取り上げることにはなかったのだ。

しかし、全抑協の強い働きかけで、元抑留者の死亡者名簿の一部がソ連側によって発掘され、全抑協に引き渡されると、外務省は「本来、国に渡されるべきものだ」と、途中から横槍を入れた。全抑協の求めに応じて、未発掘名簿の整理を行ったソ連政府ならびにロシア政府は、日本政府の剣幕に恐れをなして、以後、新しい元捕虜名簿は日本政府代表の首相に渡すようになった。もっとも、戦犯として無実の罪を着せられ、長期にわたる獄中生活に苦しんだ元抑留者の名誉回復などは、もともと民間まかせで、いっさい関わり合いを持とうとはしなかった。

一方、自民党の中でシベリア抑留補償問題に強い関心を寄せたのは、大蔵官僚出身の元経済企画庁長官で、自らもシベリア抑留体験のある相沢英之前衆院議員であった。斎藤六郎元会長が牛耳る全抑協路線に飽き足らない上田敬夫元全抑協副会長は、自民党と組んで抑留補償の予算獲得のため、八〇

年一月に全国戦後強制抑留補償要求推進協議会を旗上げして、その中央連合会会長に相沢氏を担いだ。相沢氏は自民党執行部と組んで、「戦後強制抑留者の処遇改善に関する自民党議員連盟」を結成、斎藤邦吉元幹事長を議連会長に選任した。その後、この自民党議連が中心になって政府に働きかけ、八年七月一日に政府の全額出費で平和祈念事業特別基金が設立された。こうして同年度から、基金を通じて恩給などを受給していないシベリアなどからの帰還者一名につき、二年分割で慰労金一〇万円（国債）のほか、銀杯と総理大臣書状の交付が始まったのであった。

これらは、斎藤全抑協、相沢全抑協のいずれの組織に所属しようとも、適格条件さえ満たせば交付された。最大の問題は、八九年度に限って、相沢派の全抑協の寄付で設立された、言わば一心同体の財団法人全国強制抑留者協会（相沢英之会長）に、元抑留者に対する慰籍事業費として、政府から五億円の補助金が交付されたことだ。相沢氏の政治力によるものだが、補助金をもらえなかった斎藤全抑協と相沢全抑協の対立は、これによってますます抜き差しならないものとなってしまった。このため、本来統一行動をとるべきシベリア抑留補償運動は、分裂の度合いを一段と強めて、もはや修復不能な事態を迎えるに至ったのであった。

国会で否決されてしまったシベリア抑留補償

それから一〇数年の歳月が流れて、シベリア抑留補償問題は最大の山場を迎えた。終盤を迎えた二〇〇六年二月の臨時国会で、シベリア抑留補償を巡る与野党案が激突したのだ。

民主、共産、社民の野党三党が提出した法案は、抑留年限を五段階に分けて、一人当たり三〇万円

（二〇〇万円の特別給付金を抑留補償として支給するもので、平和祈念事業特別基金を解散、その資本金四〇〇億円のうち三九〇億円をそのための財源に充当し、残額は国庫に返納することにした。

一方、自民・公明の与党案は、野党案同様、基金を解散するが、抑留補償は行うことなく、資本金四〇〇億円のうち二〇〇億円を原資として、元抑留者に慰労品（一〇万円の旅行券）を贈り、残額は、すべて国庫に返納することになっている。

二月七日の衆院総務委員会で、与野党案の審議が行われ、複数の参考人から意見を聴取したのち採決に移り、与党案が可決され、野党案は、あつけなく葬り去られてしまった。翌八日の本会議でも可決されて参議院に送られた。参議院でも総務委員会に参考人を招いて審議ののちに採決。一日目の参議院本会議で与党案が圧倒的多数の賛成で可決・成立した。国会で物を言うのは、何よりも非情な「数の論理」。政府・与党は、これをもって、シベリア抑留問題の最終的な幕引きを図ることになった。

奴隷労働の汚名のまま死ねない元抑留者

だが、収まらないのは抑留補償をあくまでも求める元抑留者たちだ。全抑協の寺内良雄会長（八二歳）は、無念やるかたない表情で語る。

「われわれは、ただ金が欲しいのではない。労働賃金が未払いのままでは、奴隷も同然だ。奴隷労働の汚名を着せられたまま、あの世に旅立つわけにはいかない」

元シベリア抑留者たちは、二〇〇三年五月にシベリア立法推進会議（代表 寺内良雄全抑協会長）を設立して、シベリア強制労働に対する国家補償を求める本格的な立法運動に取り組んできた。だが、

臨時国会終盤の二月一四日の時点で、与党案が参議院本会議で可決・成立することが必至と見て、同日、次の声明を発表。二〇〇七年に特別給付金法案をさらに改良・強化して、「シベリア抑留問題解決促進基本法案」（仮称）を作成。超党派の議員立法の形で、再度、通常国会提出を目指すことになった。

シベリア立法推進会議が『声明』を発表

〔声明〕

シベリア・モンゴル抑留の募引きを許さず、私たちは闘い続けます。

——シベリア抑留者が求めるのは旅行券や記念品ではない！ 戦後半世紀、私たちが求めてきたのは、不当な抑留・奴隷労働への補償です——

本日十二月十四日、参議院総務委員会において、「戦後強制抑留者特別給付金支給法案」が否決されました。先週七日には衆議院総務委員会でも与党側によって否決されました。日ソ共同宣言五〇年、強制抑留終了五〇年の節目の年に、国として最低限の誠意を見せて欲しいと願ってきた私たちにとっては、極めて残念な結果です。

しかしながら、十八年ぶりに国会で正面からシベリア・モンゴル抑留問題の議論ができたこと、かねてより私たちが解散を求めてきた「平和祈念事業特別基金」の廃止が決定したことは、大きな成果です。今後は、政府の隠れ蓑かぶさのような存在だった基金がなくなり、再び政府が直轄でこの問題に対処せざるをえなくなるわけで、体制を一新し、官邸に「シベリア抑留問題対策室」を設けて、一元的に問題に対処し、資金のばらまきをやめて、問題解決に向けた有効な措置を取るよう、改め

て求めるものです。

過去四半世紀、私たちが求め続けてきたのは、ポツダム宣言やジュネーブ条約に違反して旧ソ連・モンゴルに不当に抑留され、奴隷労働を強いられてきたことへの、兵士・軍属の派遣国日本による国家補償です。一九九三年、ロシアの初代大統領として来日したエリツィン大統領は、この問題についての深甚なる謝罪を表明しています。謝罪にともなう補償が、あつてしかるべきでしたが、日本政府は、一九五一年日ソ共同宣言によつて請求権を相互放棄してしまつています。したがつて被害補償の責務は当然日本政府にあります。南方で英米豪蘭などに抑留された捕虜には、抑留中の労働に対する賃金が大蔵省から支払われています。ソ連・モンゴル抑留者だけが差別され続けなければならぬ理由は何なのか？ 政府・与党に対して、改めて疑問を深くしました。

私たちが求めているのは、「十萬円の旅行券」や記念品ではありません。廃止を前に、平和祈念事業特別基金が今後行うとする事業の内容は、私たちが求めていた中身とまったくかけ離れています。私たちも支払い続けてきた血税は、一円も無駄にされてはなりません。抑留被害当事者と納税者をないがしろにする政府・与党の不見識に抗議します。

目的が達成されていないのですから、ここで運動をやめるわけにはいきません。

シベリア・モンゴル抑留問題の幕引きには断固反対します。立法運動は継続します。このような抑留被害者を愚弄した案ではなく、当事者が納得できる解決策を次期通常国会に提出していただけるよう、さらに各政党に働きかけます。 私たちは闘い続けます。各位の一層のご協力を訴えます。

二〇〇六年十二月十四日

シベリア立法推進会議代表 寺内良雄（全国抑留者補償協議会会長）

与党は、元シベリア抑留者たちに一〇万円の旅行券を支給する法案の成立をもって、シベリア抑留問題は解決をみた、との姿勢をとっている。

シベリア立法推進会議に結集する元シベリア抑留者たちは、これにあくまでも反対。今後も引き続き野党三党と提携を強化して、体制を一新し、抑留補償に相当する特別給付金支給法案の実現を目指して立法運動を続けることになった。だが、国会の議席を与党が圧倒的多数を占める情勢が今後も続く限り、その壁は厚く、元シベリア抑留者たちの願望や要求が実現をみる可能性は極めて低い。誠に気の毒と言わざるを得ない。

国家の義務を放棄する日本政府

第二次大戦の戦勝国である米国、英国、豪州、オランダなどは言うまでもなく、敗戦国ドイツさえも、自国の元捕虜たちに、手厚い抑留補償を行なった。なぜ日本一か国だけが、抑留補償ができないのか？ 補償金の原資がないというのなら、話は別である。だが、解散を控えた平和祈念事業特別基金には四百億円の資金が手つかずのまま眠っている。抑留補償の原資としては、これだけで十分である。

日本国家が遂行した侵略戦争に駆り出され、しかも、心ならずもシベリアに抑留され、塗炭の苦しみを経験した元兵士たち。彼らに抑留補償を行うのは、欧米の例を引くまでもなく、国家の義務である。それができないというのなら、「日本は近代国家の風上にも置けない何という情けない国か」と、慨嘆に堪えない。政府・与党の猛省を促したい。

（日露歴史研究センター代表）

日本人捕虜のシベリア抑留とは何か？

シベリア抑留者総数と死亡者の明細

		1	2	3	4	5	6	7	
民 族		日 本 人	中 国 人	朝 鮮 人	モン ゴル 人	満 州 人	ロ シ ア 人	マ レ ー 人	合 計
内 訳	将 官	163	24	1	3	-	-	-	191
	上級、下級 将 校	26,573	8	1	1	-	-	-	26,583
	下 士 官、 兵 卒	582,712	15,902	10,204	3,629	486	58	11	613,002
軍 事 捕 虜 総 数		609,448	15,934	10,206	3,633	486	58	11	639,776
死 亡 者 内 訳	将 官	31	-	-	1	-	-	-	32
	上級、下級 将 校	607	5	-	-	-	-	-	612
	下 士 官、 兵 卒	61,217	133	71	3	-	-	-	61,424
死 亡 者 総 数		61,855	138	71	4	-	-	-	62,068

1915年にソ連軍が捕獲した旧日本軍捕虜のうち、旧ソ連邦内務省捕虜・抑留者問題総局（GUPVI）が把握していた人数

全国抑留者補償協会提供

シベリア抑留捕虜に対する不当な差別待遇

——次代の人びとにこれだけは伝えたい 池田 幸一

私は一九二一年に舞鶴市に生まれ、一四歳で大阪市の紙製品問屋に入社。一九四二年、奉天（現・瀋陽）支店に転勤。四五年に現地で応召、陸軍二等兵として服務中、対日参戦したソ連軍の捕虜となり、シベリア経由で、ウズベク共和国アングレンの収容所に抑留された。同地で三年間、強制労働に従事。四八年に帰国。帰国後、大阪市で商業を営み、(株)池田商代表取締役を務め、九四年に引退した。国際法では、捕虜労働に対してその対価である労働賃金の支給が義務づけられているが、ソ連はもちろん、日本からも労働賃金はまったくもらわなかった。一九五六年の「日ソ共同宣言」によって、ソ連に労働賃金の請求ができないため、九九年に元シベリア抑留者による「カマキリ訴訟団」を組織してその事務局長となり、国を相手取って大阪地裁に「シベリア抑留補償」を求める民事訴訟を起こした。地裁の判決は原告側の請求を棄却する不当なものだったが、控訴審、上告審も一審判決を支持して、全面敗訴のやむなきに至った。

裁判所の判決は、どうしても納得がいかない。そこで、昔の抑留仲間と一緒にあって、シベリア抑留立法推進会議を立ち上げ、その世話人になり、抑留補償の実現のため頑張っている。

わが民族が蒙った最大の屈辱「シベリア抑留」が、どうして起こり、それはどのようなものであり、どういう結末をつけられたかについて、一言述べておきたい。

一「シベリア抑留」の発端

「シベリア抑留」は、天皇の命令で武器を捨て、無条件降伏を余儀なくされた六〇万の関東軍将兵を、不法にもスターリンがソ連領に強制連行したことによって発生した。またその裏には、「ソ連への役務賠償もやむなし」を覚悟した、わが国中枢の拱手傍観がある。

「シベリア抑留」は、シベリア出兵の損害を含むソ連側請求書、総額八二四億ルーブル（約七兆円）の取り立てのための役務賠償にはかならず、またその半面、天皇を戦犯にさせないための生け贄でもあった。役務賠償と国体護持。この二つの思惑による強制労働は、六万人とも九万人とも言われる犠牲者を生み、未だ生死の実数さえ定かでない惨事を招くことになったのである。

二「シベリア抑留」の実態はどのようなであったか。

極寒の中での強制労働と飢餓の惨状は、数多く世に出された手記や体験談を読みたい。

シベリアエレジーの「辛かった、ひもじかった」にも増して、私は心に苦い自虐を数多く持っているのだ。一片の黒パンを得るために盗みを働き、他人より早く帰還したいために偽り、友を裏切ったことの数かず……。私たちは、やられた者同士の間で、人間不信や背徳の罪を重ねるといふ地獄の底を見てしまっている。

三「シベリア抑留」を国はどのように扱ったか

国の償い果たたさんものと／日ごと掘り出す黒ダイヤ／君の御為同胞の為／務め果たたさん男意気

これは、炭塵にまみれ酷使に耐えて、黙々と石炭を掘る兵士が抑留当時に歌ったものである。

われわれは、どんな逆境にあつても、この思いを片時も忘れてはいなかった。その兵士らが九死に一生を得て辛うじて祖国に帰ったのだが、夢にまで見た祖国は、どのように迎え、処遇してくれたであろうか？ 彼らは何ひとつ酬いられることがなかった。（唯ひとつ例外は、一九八七年に実施をみた、恩給欠格者のみに支給された一〇万円の慰労金と銀杯がある）

四 顕彰や補償を怠るわが祖国・日本

史上に類を見ない受難である「シベリア抑留」に対して、祖国は、顕彰や補償はおろか、抑留中の賃金や食料扶持すら払おうとはしないのである。勝った国負けた国を問わず、世界の各国は、自国の捕虜に対して抑留中の労苦をねぎらい、手厚く補償している。にもかかわらず、独り我が国のみは、それも「シベリア抑留」に限り、放置するという、実に不可解な非人道的な冷遇で酬いたのである。

私はこの不条理に焦点を当て、真相を明らかにして次代に伝えたいのだ。無条件降伏の兵士は国際法では捕虜という身分になり、その義務と権利は同法の定めに従うことになる。すなわち抑留中は労働を拒否できないものの、その対価として、賃金その他は、同法が保証している。労働による賃金は究極的には、それぞれが所属する国、すなわち日本政府が負担することになっている。

さらに、一九五六年に締結された「日ソ共同宣言」によって、相手側に対する双方の請求権を相互に放棄した以上、ソ連は一切の債務を免れ、捕虜の有する未払い労働賃金の支払い義務は、日本に移ったことは明らかである。であるのに、言を左右にして取り合わない日本の行政、立法府に絶望したわれわれは、この不条理を正すため、裁判所の門を叩いたのであった。

五 元シベリア抑留者の提訴を破棄した最高裁

南方や中国から帰還した捕虜には支払い、シベリア抑留組に限って支払わない祖国が、正しいのか。正しくないのか。この簡単な訴えを最高裁は棄却した。われわれは誤解していたのである。司法とは正邪を正す場ではなく、法律があるかないかを言い渡すだけの場でしかなかったのである。

「それでは、その法律を作ろうではないか」と、立法府に訴えた。幸い野党の助力によって、「特別給付金」という名の、未払い労働賃金支給法案を上程するに至ったのである。金銭的には、国の勝手元不如意を考慮した、ごく象徴的な法案（支払い総額三九〇億円規模）だが、内容は労苦に酬いる補償の意味を秘めたものであり、それなりに筋が通っている。しかし、与党は、それすら認めようとせず、旅行券（一〇万円）支給でお茶を濁す法案を可決・成立させ、一切の幕を引こうとしている。

六 平均年齢八五歳の老兵は弾劾する

戦後六一年を経た今日、われわれはなぜかくも非情な仕打ちを受けなければならないのか。平均年齢八五歳の老兵たちは、その原因を糾^{ただ}し、世に問う必要をひしひしと感じている。

① 第一は、政府・自民党の「アカ嫌い」である。「スターリンに洗脳された連中にビタ一文渡してなるものか」の度し難い偏見が底流にある。「ダモイ（帰還）のためには心ならずも赤旗を振らざるを得なかった」捕虜の心情をも慮^{おもは}ることのない、残酷な見解である。

② 部下の嘆きと訴えを見捨てた上官たちの無関心も、その大きな要因の一つである。他国の多くは、将官が先頭に立って捕虜の処遇改善を要求しているのに反して、関東軍の高級職業軍人は

多額の軍人恩給をぬくぬくと食って、見向きもしない。一億円を超す受給者も珍しくないこの軍人恩給制度は、戦後の支給総額がすでに累計五〇兆円を超えたはずだ。上に厚く下はゼロと、受給額の多さが戦争責任の重さに正比例するのが、この国の戦後処理政策の実態である。

- ③ 抑留者同士の相克と分裂も問題である。肝心な時期に分裂し、自民党一辺倒の一派は、政府の御用組織に成り下がり、老獪な政府に牛耳られて、燃えさかる補償要求の「火消し隊」として精勤した。わが民族の悲しい資質であるのか？ 小異を争って大同を見失う悪癖は、シベリアにおける同士討ちをまざまざと彷彿させる、醜悪な相克の再現であった。

- ④ これらよりも大きな原因は、サンフランシスコ平和条約二六条の最惠条項を恐れる、一貫した政府の政策である。「何れかの一国に賠償が偏った場合は、それと同じような賠償を他の戦勝国にも保証する義務を日本国は負っている」。わが国がわれわれ元抑留者に未払い労働賃金を払えば、ソ連の役務賠償となり、その労働量が莫大となれば他国は黙ってはいない。これを政府は恐れしたのである。老兵たちの願いと怒りを辛抱強いなし続け、あらゆる策を講じて、いまや祖国は目的を達成したに等しい。なぜならば、老兵が死に絶えるのは、時間の問題であるからだ。
- ⑤ 愛国心を声高に叫ぶ祖国の、これがあの過酷な「シベリア抑留」への報酬である。「国を愛せよ」とは、先ず「愛するに足る国であること」が前提であることは、今さら言うまでもなからう。次代を担う人びとに訴えたい。以上述べたこの国の正体を、君たちは、どのように考えるのか？ 残り少ないシベリア老兵の、これが次代への遺言である。

詳しくはホームページの「老いたる蟬の言ひ分」[kamakirikeda@yahoo.co.jp]を検索願います。

(シベリア立法推進連絡会議世話人 大阪府 八五歳)

シベリア抑留、そして北朝鮮へ移送

飢えと寒さの中で呻吟する

野口 富久三

軍国青年の入隊

父は、東京の板橋区大山の養育院（現在の東京都老人医療センター）で働いていた。私は、一九二四（大正一三）年、五人兄弟の三番目の子として生まれた。

一九四四年（昭和一九）一月、二〇歳の時に入隊。軍国主義の時代、親も観念して「戦争に行くな」とは、口が裂けても言えなかった。大山駅で国防婦人会（註）のご婦人たちの見送りを受けながら、「死んで帰ってきます」と出征した。生きて帰ってこられるなど、微塵（ひこ）も考えられなかった。

一週間の仮入隊後、中国の東北部で通信兵として配属。通信は有線と無線があり、難しい暗号と技術の習得が必要で、半年ほど高度な訓練があった。日中は厳しい軍事訓練、夜は通信兵としての特訓。昼の訓練で疲れ、夜になると居眠りすることもしばしばで、教官に頬を殴られ、角棒でたたかれることなど、日常茶飯事だった。その頃には、戦局も敗色が濃くなり、自爆する訓練をさせられた。訓練は野球のベースのかたちをした布製の模擬爆弾を背負い、敵の戦車に飛び込む馬鹿げたものだった。

（注）日中戦争中に、軍の主導で、「愛国婦人会」に対抗する、「より愛国的な婦人会」として誕生。愛国婦人会と競合して、軍に協力した。

終戦、そして捕虜に……

一九四五（昭和二〇）年六月、内地（日本本土）帰還の命令が出て、満州（現 中国東北部）の桃南まで貨車に乗せられた。八月九日、突如、ソ連が侵攻したので、南へ歩き続けた。満蒙開拓団の女性や子どもが、着のみのままに逃げ迷う姿を、多数、見かけた。でも自分のことで精一杯。どうすることもできなかった。多くの人が亡くなったと思う。今でも残留孤児の話聞くたびに胸が痛む。

大日本帝国は、一九三二（昭和六）年、傀儡国家「満州国」をつくり、「王道楽土」と称して、男性には、「満蒙開拓青少年義勇軍隊」に入れば、「地主になれる」と甘言を弄し、女性には、「大陸の花嫁」と賛美して移民させながら、日ソ開戦と同時に、国民を現地に捨てたのだ。

一〇日間ほど歩き、私たちの部隊もバラバラになったが、公主嶺で、本隊とようやく合流した。八月一九日、武装解除になり、そこでようやく終戦を知らされたのだった。

十一月二三日頃、黒河から氷結した川幅三〇〇メートルのアムール川（黒竜江）の上を、不安と焦燥が入り混じった感情に突き動かされながら、貨車の車輪をはずした馬運車（馬ぞり代用のそり）に食糧を山積みにして、満州領からソ連領へ何度も運んだ。南満州方面が貨車で一杯だった。

「東京ダモイ（帰還）だ」とソ連兵に言われ、貨車に乗り込んだ。不安はあったが、ソ連領に入ってウラジオストクへ向かっているものだから思っていた。一週間くらいして水面が見え、「海だー」と歓声が一斉に上がった。しかし、日本海だったら左手に見えるはずの海が右側に広がっていた。

「おかしいぞ」

われわれが海だと思ったのは、実はバイカル湖だった。貨車は、その岸辺を、一日中、西へ向かって走り続けた。

だまされたと気づき、戦友たちの顔色が一瞬変わったが、時すでに遅しだった。貨車はバイカル湖西北に向かい、われわれはチェレンホーボ収容所に入れられた。

それでも私は、捕虜になったとは思えなかった。私は、初年兵一期の検査で、三発、銃の引き金をひいただけだった。まして、ソ連軍とは一度も戦ったこともなかった。にもかかわらず、「捕虜」とはどういうことか？ 納得がいかなかった。チェレンホーボは酷寒の地で、冬は、零下三〇度になることもあった。主食は黒パンに少々の副食。スープには具が少ししか入っていない。われわれは、いつもひもじい思いをしていた。日本人捕虜に科せられたのは、石炭採掘の重労働。仲間がたくさん死んでいった。しかし、私は腕を買われて理髪師をやらされたので、何とか生き延びることができたのだった。

病弱と判断され北朝鮮へ移送

一九四六（昭和二一）年七月二五日、祖国へのダモイ（帰還）が始まった。日本海に臨む沿海地方のポシエツト港から船に乗せられ、これでようやく日本に帰れると喜んだ。何日間か船に揺られたが、どうも様子が違う。日本の緑の山々が見えるはずなのに「禿げた土の山」しか見えなかった。

到着したのは現北朝鮮の清津（ちやうしん）であった。食べ物も満足に与えられず、私も他の戦友たちと同じように、骨と皮の状態であった。船に乗る前に身体検査があり、ソ連の復興に役立たないと診断された病人や

病弱と診断された人たちは、全員、当時、ソ連軍が占領していた北朝鮮に送られてしまったのだった。「ああ、俺は二度、ぼろくずのごとく捨てられた」と思った。「一回目は日本軍、二回目はソ連に……」当時、北朝鮮への移送者は二万七〇〇〇人といわれていた。古茂山こもやまに移され、その防空壕で、雑穀や草を食べながら飢えを凌いだ。下痢の人は、薬として、炭をつぶした粉を飲まされた。極限の状況の中で、毎日たくさんの人が死に、収容所は、まるで地獄のような状態だった。一二月に、ようやく引き揚げ船で、着のみのまま帰国。帰国後も「シベリア抑留者」ということで、多くの人が、いられない差別を受けた。

日本政府は責任をとって補償を

厚生労働省は、二〇〇六年六月、「北朝鮮への移送者は日本側の資料と照合し、絞り込んではいるが、確定に手間どっている。確認されたのは一七名(野口を含む)で、そのうち死亡者は七名」と発表した。戦後、六一年の発表だった。この発表をするのには、あまりにも時間がかかりすぎた。本当にやる気があるのかと、元北朝鮮抑留者は疑いたくなる。

私が北朝鮮から帰還時に乗ったのは、豊榮丸、そして辰日丸。それぞれに二〇〇〇名、合計四〇〇〇名が、長崎県佐世保港に上陸した。北朝鮮での未払い労働賃金は、一円も支給されなかった。

日本政府は戦争責任を曖昧あいまいにしながら、「シベリア抑留補償問題」を全く解決していない。

一九九三年に、ロシアからエリツィン大統領が来日した際、スターリン時代の「捕虜の扱い」を謝罪し、ロシア政府は「労働証明書」を発行した。しかし、日本政府は、ソ連ならびにその後継国家ロシアへ

の補償請求権を、「日ソ共同宣言」によって放棄した。天皇の命令で徴兵され、抑留された人たちに、政府は責任をとって補償すべきだ。抑留された人たちは高齢で、亡くなった人も多く、私の支部でも、四月に一名、あの世へ旅立った。もはや一刻の猶予も許されない。

歴史の真実を若い世代に

八二年の人生を振り返り、戦争を体験した世代として、歴史の事実を風化させないように、若い世代にしっかりと伝えておきたいと痛切に思う。

戦争を美化し、近隣諸国の独立国、朝鮮半島を植民地にして、満州（中国東北部）に傀儡国家を作り上げた一五年戦争の発端は、一九三一年九月の柳条湖事変であった。鉄路の爆破を指揮した、中村震太郎大尉を軍神として祀った神社が、桃南にもあった。

その後の盧溝橋事変（一九三七年）など、日本は大東亜共栄圏を創るといいながら、狂気の道を突き進んだのだ。戦陣訓は「生きて虜囚の辱めを受けず」「身は鴻毛よりも軽し」「上官の命令は、朕の命令」など、一人ひとりの兵に叩き込んで、戦場に送り込み、私の従兄弟も義理の兄も級友も戦死した。小泉純一郎首相が九月の退任に先立って訪米。ブッシュ大統領とはしゃぐ姿に、憤りを感じた。これでは今ではるか大陸の凍土に眠る戦友たちは永遠に浮かばれない。

改憲が声高に叫ばれているが、日本国憲法第九条は、国境を越えて平和を希求する人類共通の願いを体现したものであり、二度と戦争を起こさないためにも、絶対には守らねばならないと思う。

（全国抑留者補償協議会東京都連合会練馬支部支部長 東京都 八二歳）

痛ましいシベリア抑留の思い出

全身大火傷の戦友は いずこに—— 岸本 美雄

北極星は舟の進路を予告していた

終戦から四か月余りたったその年の一二月下旬。ソ連軍に降伏し捕らわれの身となったわれわれは、北朝鮮の興南港（北緯四〇度あたり）の岸壁で、乗船を待っていた。

目前に五万六〇〇〇トン級かと思われる貨物船が横付けされていた。怪訝けげんに思ったのは、船名が黒く塗りつぶされ、形も海賊船のような感じがしたことだ。

乗船前、五〇〇人に編成された一個大隊が全員乗船したのは夕暮れ近くだった。出港した船は、遅い船足ながら、日本海を指して真南に向かつて進み、朝鮮半島の陸地は、日没とともに視界から消えた。

一九四五年一二月二四日であった。嚴冬のこと、洋上の風は頬を刺すほど冷たかった。だが、前日支給された防寒服一式に身を包んでいたため、寒さを感じなかった。終戦後にソ連は「戦利品」と称して日本軍から奪った財物を敗戦国の兵に「支給」したのであって、ありがたい好意とは思わなかった。船中は下層の広い船倉が指定されていたが、高い天井には暗いランプが二つ三つあるだけで、少し離れた人の顔はわからなかった。しかし、五〇〇人の大方は、正月は郷里で迎える夢に酔い痴れて、興奮の坩堝くわぼと化し、暗さも寒さも空腹も忘れて、本土到着の日時と上陸港の幻想を語る声が高揚し、深夜に至っても、まるでお祭り騒ぎのような狂宴が続いた。

応召入隊の日から部隊の再編成のときにも離れることはなく、いつも身近にいた、兄貴のような友を誘って、たびたび甲板に上がった。日が落ちて四海は墨を塗ったような闇だったが、澄んだ夜空の星は、何かを語りかけるかのように美しく輝いて見えた。

ふと身震いを感じ、慄然とした思いにかられ、甲板に足が釘付けにされた。それは北極星をしつかりと見た瞬間だった。船は、いつの間にか進路を北に変えていたのである。地図を頭に描いて繰り返し考えたが、北朝鮮から日本のどこかに向かっているのなら、北極星は左舷の上に見えるはずである。だが、船は間違いなく北極星を目指して進んでいた。

船内のお祭り騒ぎは二昼夜続いたが、三日目となるや、次第に静かになった。

「目的地は北海道かもしれない」という楽観説も出て、それに期待をかけたひと時もあった。

だが、その翌日、一二月二七日夕刻到着したのは、ソ連領ナホトカ（後日知った）であった。

それは艱難辛苦に満ちたシベリア抑留四年の始まりであった。

甲板で北極星を確認し、船の行方は日本ではないことを共感した友は、熊本県八代市に、現在、八六歳で健在の、鍋田京一氏である。交信するたびに、この回想を語らずに終わることはない。

製材工場で二年間の強制労働

戦後、私が抑留されたシベリア捕虜収容所の中で、一番長く住んだのは、沿海地方・ウオロシークフ（現・ウスリースク）市の町はずれにあった第八収容所であった。町の西南の方向に見える山は、誰が名づけたのか「満州の丘」と言い、その山の向こう側は満州、と思ひ込んでいた。

山の彼方に夕陽が沈む風景は郷愁を誘ったが、その手前に「満ソの厳しい国境線がある」という話であった。

われわれを収容する収容所の建物は、以前はソ連軍の厩^{うまや}であつたと聞いた。中央に、入口があり、左右に各五〇〇人（二個大隊）の日本人捕虜が居住した。概観は赤レンガ建てで、ちよつと瀟洒^{しょうしや}に見えるが、中は薄暗く、三段ベッドが連なる、まさに牢獄そのものであつた。

周囲は二重の鉄条網が張りめぐられ、正面入口にソ連軍の警備室があり、常時、数人の警備兵が詰めていた。収容所の端^は、四か所に監視塔があり、捕虜の逃亡を防ぐため警備兵が監視の目を光らせていた。冬期は屋内の気温が零度以下に下がり、当初は電灯もなかった。一九四七年になって、やっと電灯がつき、翌四八年には食堂も捕虜の手によつて建てられた。

第八収容所に抑留された私は、一九四六（昭和二一）年五月ごろから、収容所の近くにある製材工場（ロシア語でレースザボと呼ばれた）で、約二年間、強制労働に従事した。

同工場は第八収容所より約一〇キロメートルくらいの地点にあり、周囲は広漠たる草原であつた。通勤はトラックであつたが、冬の寒い季節は、作業を終えてから迎えのトラックを待つことがしばしばあつて、冬期は、重労働に匹敵するほど辛い思いをした。

私が所属した第一九小隊に課せられた主たる仕事は、貨車に山積みになっていた製材用の丸太の荷降ろし作業であつた。製材工場には専用の鉄道引き込み線があつて、一週間に一回くらいの割合で、丸太を満載した貨車が到着した。製材工場をフル稼働させるため、丸太を積んだ貨車が来ると、工場側の強い要請もあつて荷下ろし作業を急いで行わなければならなかつた。

一命を取り止めた丸太荷降ろし作業

一九四七(昭和二三)年冬か一九四八(同二三)年春だった、と記憶する。当時、第一九小隊小隊長であった私は、貨車が到着すると、貨車にうず高く積まれた丸太のてっぺんに素早く登って、荷降ろし作業の指揮をとった。私のほかに

もう一人、別の捕虜が丸太の上に乗っかって、お互いに合図をしながら、丸太を一本ずつ地上に落とした。丸太の荷下ろしは、非常な危険を伴う作業で、熟練者といえども、事故を防ぐために、細心の注意を必要とした。

丸太を貨車から二、三本降ろしたときだった。足元の丸太がぐらぐらと動いて、私の体は三メートルくらい下の傾斜地に投げ出されてしまった。幸いに怪我はなかった。頭上から木材ががらがら落ちてくる危険を直感した。咄^{とっさ}嗟^さに、

シベリアに抑留されて間もない頃の姿
1947(昭和21)年早春

自画像

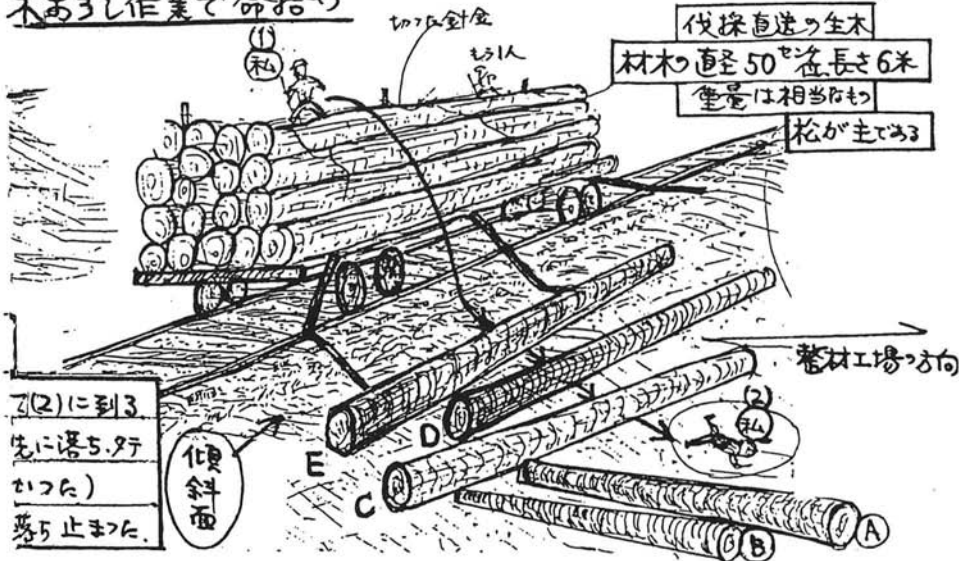


貨車から離れる以外に助かる方途はない、と思
った。下方に向かって死に物狂いで走った。
息を整えながら振り返ると、背後でドドドと
木材が落下したことを知った。

逃げる途中で足をとられて転倒してしまった。
荷降りし作業をやっていた小隊員、四〇名の
全員が、「岸本小隊長はやられたぞ」と、てっ
きり私が丸太の下敷きになって死んだもの、と
思った。私自身も、一時は、「もう駄目だ」と
観念した。だが、私より先に転がり落ちた丸太が、
傾斜地の下の方で、縦になってとまったので、
それが突っ支い棒^かになって、後積み^の丸太の、
雪崩（なだれ）状の落下を、防いでくれた。こ
うして、私は、「九死に一生」を得たのであった。
正に「天佑神助」と、命拾いしたことを神に感
謝した。

一九四八（昭和二三）年十一月。私は、ウオ
ロシーロフ第七収容所から、近くのアルホルメ

木おろし作業で命拾い

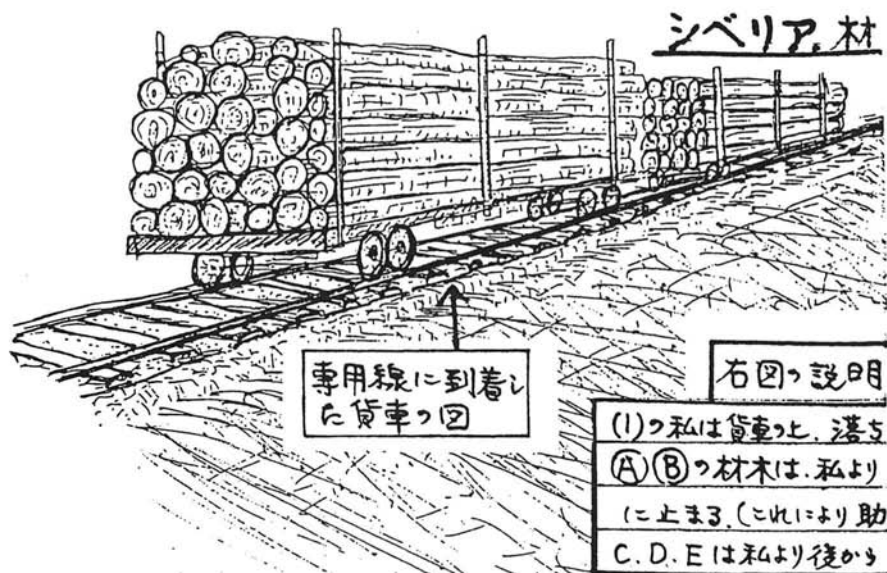


フカの、第五収容所に転じた。木材伐採専門の収容所だ。アルホルメフカ駅より約一〇数キロ。徒歩三時間くらいだった。

山の見える方向へ行けば、果てしない森林地帯へとさしかかり、やがて鬱蒼たる大木の生い茂る山中に入る。

防火線兼用の幅三〇メートルくらいの道路(材木搬出のトラックが通る)を奥地へと進めば、間もなくして忽然と伐採専用^{こつせん}に造られた収容所があった。それが第五収容所であった。

日本人捕虜は、当初四五〇名で、後日、マンゾフカより一五〇名入所し、六〇〇名となった。アルホルメフカ駅近くに、この収容所の分所があり、約一五〇名(一個中隊)は、そこに分散して入所した。私は分所の中隊長として、ここでごすうち、収容所委員会の指令により、一九四八(昭和二三)年一二月から年二月まで三か月間、ウラジオストクの政治学校に派遣され、徹底したソ連社会主義の洗脳教育を施された。



森林伐採労働で死傷事故が多発

大隊長は山崎七郎から征矢四郎に交替したが、私は強制労働隊の小隊長として、一九四八(昭和二三)年一月から翌年一〇月の帰国まで、その下で悪戦苦闘した。

日本人捕虜に科せられた森林伐採作業は、冬季間が最適であったため、その過酷な労働は筆舌に尽くし難く、シベリアにおける重労働の典型であった。伐採の最中に、倒れてくる巨木の下敷きになって、何名もの戦友が死んだり、大怪我を負ったりした。

抑留されて満四年が経っていた。ラーゲル(捕虜収容所)の位置は、昔も今も地図に載っていない、シベリア鉄道の支線の終点になっていたアルホルメフカと聞かされた、貨物駅の近くだった。待望の祖国へのタモイ(帰還)の通知が届いたのは、一九四九(昭和二四)年の秋も半ばを過ぎたころであった。

戦友が熱湯浴びて顔面に大火傷

出発までの日数は二日間だった。「飛ぶ鳥跡を濁さず」。誰いうとなく心の中で準備が進み、一日目は所内の整頓・清掃を完了し、残された一日は、入浴でシベリアの垢あかを落とし、せめて身綺麗な体でタモイを果たそうとした矢先であった。突然、魔の手にかかったような不幸な悲劇が起きた。

入浴とは名ばかり。六・六平方メートル(二坪)程度の掘っ建て小屋に備えられた五右衛門風呂で煮えたぎる湯を沸かし、小さい木桶に、たった一杯だけ配湯を受け、水で薄めて全身を洗う原始的な入浴だった。一つ手順を間違えば、熱湯を浴びて全身大火傷するため、危険極まりなかった。

私のそばにいたB君が熱湯を木桶に受け取って数歩歩んだとき、足もとを狂わせて転倒し、間近に居たW君が頭上から熱湯を浴びてしまった。「きゃー」という悲鳴をあげて、W君がうずくまった。顔面が瞬時に焼けただれて、正に凄絶としかいえないような惨状を呈した。

往時を偲^{しの}ばせるシベリア抑留展で

日ソ両側の軍医により、応急処置が施されたが、十分な治療ができず、薬にも事欠き、W君は、瀕死の重傷を負ってしまった。小隊長として、私は責任を痛感し、何度か医務室の病床を見舞ったが、両眼の間一センチほど開けたまま残しただけで、全身包帯に包まれた彼とは、対話することもできなかった。だが、僅かに黒眼が動く反応に、一抹の安堵を得て別れた。もちろん、W君は、われわれと一緒にダモイはできなかった。その後、彼はどうなったのか、杳^{やう}として行方が分からないまま、今日に至った。

入隊前のW君は、画家を目指して絵を描いていた青年だったと聞いた。収容所内で発行していた壁新聞に、見事な絵を描き絶賛を博したものだ。

一九八二（昭和五七）年、東京・新宿でシベリア抑留展が開かれたとき、われわれがいた収容所のアルバムを発見した。そのページを繰っていて、私は思わず「あつ」と大声をあげた。往時、W君が腕を奮って描いたシベリアの風景や収容所のたたずまい、数人の似顔絵などがあって、三〇数年前の記憶を瞬時に蘇えらせてくれた。しかし関係者の誰に尋ねても、W君の消息は、ついにわからなかった。

（鳥取県 八四歳）

ロシアオレンブルグ市で眠る 父を訪ねて 高井 光子

二〇〇六（平成一八）年五月、父の眠るロシアの南ウラル地方・オレンブルグ市内にある「日本人捕虜埋葬地」を一人で訪ねてきました。たぶん日本人として初めてではないでしょうか。

父は一九四三（昭和一八）年一〇月、三三歳で召集を受け、故郷の和歌山市から旧満州（現・中国東北地方）へ出征しました。母二八歳、姉六歳、私三歳、弟一歳でした。父が和歌山を出発する朝、兵隊さんで満員の列車に乗った父を見送ったのを、おぼろげに覚えています。父が書き残した「戦死の報あらば開封されたし」という遺書を読むと、今でも胸が詰まります。

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の敗戦で、「これでお父さんが帰ってくる」と、皆で今か今かと帰りを待っていました。しかし、敗戦直後、満州などから日本人六〇万人がシベリアへ強制抑留されたとのことで、なかなか帰ってきません。それでも徐々にシベリア抑留者の帰還が始まり、母は、帰還された方がいると聞くと、消息を問い合わせたり、援護局へ、たびたび足を運んでいました。

一九四九（昭和二四）年二月になって、父の最期を見届けて下さった戦友が帰国され、「父は極寒のシベリアで冬を過ごした後、貨車で何千キロも移動して、オレンブルグ市に着き、一九四六（昭和二一）年一一月に病没した」ことを手紙で伝えて下さいました。

葬式を済ますと、母は自立を目指して和歌山から大阪まで洋裁を習いに通い、数年後に和歌山市に設立されたカトリック系の短期大学で専任講師として教え始め、長年勤めました。

自由にロシア旅行ができるようになった現在、父の没後六〇年を機に、亡母の念願だった父の墓参

を何とか実現したいと思い、厚生労働省などへ問い合わせました。しかし、現地は遠方であるため墓参団は成立しないし、墓地も定かでないとのこと。結局個人旅行として訪れるしか方法がないことがわかり、思い切って一人で出かけました。モスクワで通訳と合流し、飛行二時間でカザフスタンとの国境に近い人口五六万人のオレンブルグ市に到着。迎えの旅行社の方と、厚生労働省から頂いた古い地図をもとに、市役所や、以前調査に関わられたという元市長などに問い合わせた結果、やっと「日本人埋葬地」の場所が確定できました。そこは、市の中心を貫く戦勝記念大通りと総合病院の間にあり、整地された緑地で、鉄柵で囲まれていました。お墓もなく、碑もなく、人知れずひっそりと、ただ静かに眠っておられます。心ならずも遠い異国で、過酷な労働と餓えと寒さのために、無念のうちに命を落とされた方がたなのに、日本から見捨てられたままです。柵の隙間から潜り込み、端から端へ歩きながら、お線香を燦らし、日本酒を撒いて、父を含む九四名の方がたの冥福をお祈りし、やっと少し心が休まってきたように感じました。記念にライラックの花を手折り、押花にいたしました。

日本人収容所の跡地は公園になり、真新しいコンサートホールが建っています。日本人捕虜が建て、今も現役として使われている建物も見えてきました。同時期に日本人の三倍のドイツ人捕虜がいたとき、戦勝記念公園内墓地に立つロシア人戦死者の夥しい数の十字架を前にして、息を吞みました。

敵味方を問わず、戦争という狂気に巻き込まれた人びと、家族の悲しさ、むなしさ、やり切れなさに言葉ありませんでした。

五月のオレンブルグ市は明るく美しく、お会いした方がたは、皆さん優しくあたたかでした。今の日本の平和は、国内外の数え切れない犠牲者の上に築かれていることを忘れることなく、今後、決して戦争をしないように、各人が努めることが、何よりも大切だと、あらためて感じております。(東京都)



撫順戦犯管理所。写真提供・中帰連平和記念館



太原戦犯管理所の中庭に座る戦犯たち

「戦争」に学ぶ

「撫順戦犯管理所」の六年

絵鳩

毅

私は先の日中戦争に参加し、戦犯の汚名を着る九三歳です。私は、大学を出て長野県で中等学校の教師をしていた一九四一（昭和一六）年七月、二八歳で臨時召集を受けて、中国への侵略戦争に従事しましたが、その間大隊長の命令に従い、教育中の初年兵三〇名に中国人捕虜四名を交互に刺突させるという戦争犯罪を犯してしまいました。

一九四五（昭和二〇）年の終戦時には、わが部隊は北朝鮮に移動しておりましたので、ソ連軍の武装解除を受けてシベリアに連行されて、五年間の抑留生活を送りました。そこでの生活は、私にとり、強制労働、極寒、慢性飢餓、人間不信の四重苦の世界でありました。

撫順戦犯管理所の待遇——反省の糸口

一九五〇（昭和二五）年七月、スターリンと毛沢東の間で交わされた取り決めによって、私は中国に対する戦犯容疑者として、九六九名の仲間と共にソ連から中華人民共和国へ身柄を移され、撫順戦犯管理所で六年間の拘禁生活を送りました。

撫順戦犯管理所は、昔、日本が「反満・抗日分子」をぶち込み、日夜残酷な拷問や虐殺をほしきままにした監獄であったと聞きましたが、中国政府により大改修が施されたのでありましょう。清潔で、明るく

スチームなどを備えた、近代的な管理所でありました。ここで私たち日本戦犯は、想像を絶する優遇を受けました。周恩来総理は、「戦犯とても人間である。人間である以上、その人格を尊重せよ」と指示されたという。この指示を管理所の全工作員は完全に守り抜き、私たち戦犯に強い感動を与えました。

ここには、「強制労働」はありませんでした。自暴自棄になって大声で喚く戦犯に対しても、工作員のそれをたしなめる罵声も殴打の音も聞かれませんでした。中国の工作員たちは日に二度の高粱飯を食べながら、敵である日本戦犯には三度三度米の飯を与えたばかりか、お正月や記念日にはお雑煮やお寿司やおはぎなどの特別食まで振舞ってくれました。日々の運動時間の確保はもちろんのこと、週に一回の入浴、月に一度の理髪・体育日・月例身体検査、春秋年二回の体育祭と文化祭の開催、数え切れないほどの映画鑑賞会、患者への貴重薬の投与、患者の市内病院への入院、更には有り余る学習時間の確保等々、全く至れり尽くせりの待遇でした。

伝え聞くとくところでは、管理所の工作員のほとんどの者が、日本軍によって肉親を奪われたり、家を焼かれたりした被害者だということです。孫所長は叔父を、呉指導員は父を、また看守の一人は自分以外の全家族を、日本軍によって殺害されたと聞きました。このような人びとにとって、我われ戦犯は、当然「憎むべき敵」であるはずで、それにもかかわらず、彼らは私たち戦犯に、前述のように献身的な奉仕をしているではありませんか。私は、過去日本軍が捕虜など人間と思わず、ろくに食べ物も与えず、やたらに拷問したり、平気で虐殺したりした仕打ちを思い浮かべて、わが大和民族と自己とを深く恥じ、彼らの偉大さに心から敬服しました。これが私の過去を反省する糸口となりました。

学習——被害者の立場に立つ

そこで私は、「このような偉大な人間を育てあげた中国共産党とは、一体どのような党なのであるのか？」と、真剣に考えずにはいられませんでした。

まず毛沢東の論文「実践論」と「矛盾論」を共同学習して、大きな衝撃を受けました。この平明な哲学論文は、私たちが学んできた観念哲学が、実践から遠く遊離した「観念の遊戯」に過ぎなかったことを強く反省させられました。私は初めて知りました。哲学の使命とは、まさしく、「世界と人間を改造するための実践を指導する力となることである」と。またこうも言えるかも知れません。「哲学とは、現代の全人類が直面している共通の課題を自己の良心とするための学問でなければならない」と。

また、毛沢東の論文「階級を論ず」では、日中戦争勃発当初に書かれたものながら、すでにこの戦争の推移が科学的に的確に捉えられ、全くそのとおりの展開と結末を見たことに感嘆するとともに、このような偉大な指導者をもった八路軍をたいへん羨ましく思いました。また、彼らの軍隊が、民主に貫かれた立派な軍隊であることも知りました。「農民の物は針一本すら盗らない」という、高いモラルに貫かれた共産党軍の偉大さをも垣間見ることができました。これこそが、かの中国革命を勝利に導いた原動力であったのでありましょう。

また、この論文には、八路軍が勝利を獲得するための「三つの民主」について書かれていますが、それは、まず「上級と兵士との民主」次に「軍と民衆との民主」そして第三に「捕虜との民主」という驚くべき表現が示されています。我われが管理所で常日頃受けているこの人道的な待遇は、実はここに深い根拠を持っていたのだと知って、私は感動が止まりませんでした。

こうして私たちは、徐々に、中国共産党の「世界と人間を改造する」という遠大な理想と「恒久平和」への願いを理解することができました。そして彼らの立場にわが身をおいて、日本軍隊と自己の

過去を振り返るようになっていきました。「世界に冠たる皇軍」とか「大和民族」とかいう空虚な優越感から覚め、被害者の立場に立つて、日中戦争の罪悪性を批判できるようになりました。

「認罪運動」（坦白運動）の展開

中国に拘留されてから五年目を迎えた一九五四年の春、管理所には「認罪運動（坦白運動）」が巻き起こりました。戦犯全員が侵略戦争中に犯した自己の一切の犯行を暴露し、中国人民の前に深く謝罪する運動でした。「天皇の軍隊」の一員として犯した罪は、それぞれに死に価するものと考え、死を覚悟しての暴露であり、心からの謝罪でした。このことを、心ない日本の反動分子らは、愚かにも「中共による洗脳」と揶揄しております。

私は大学教育を受けたことで、自らを「進歩的」だとうぬぼれていました。当時の日本軍隊の戦争政策には批判的だったし、日本軍隊の野獣性には怒りさえ覚えていたとうぬぼれて、自分を全く戦争の埒外に置いていたのです。「戦争と戦争犯罪の責任は、すべて天皇と天皇につながる上級の命令者にある」と安易に片付けていました。

だが身を以ってファシズムに抵抗しなかった私は、現に銃をかざして他国に侵入し、「殺人集団」の中に、現実として身を置いていたではないか。この場合、思想意識の相違などは、被害者の立場に立てば、取るに足らない矛盾でしかありません。その上、私は、天皇を補佐する大隊長の命令に屈服して、初年兵に捕虜を突き殺させてしまいました。私をこの罪に陥れた大隊長の責任は決定的に重い。そして、この大隊長の責任も、「上官の命令は朕の命令と心得よ」と宣言してはばからなかった日本軍隊の総帥、

天皇にまで及ぶことも、また当然でありましょう。

しかし、その残酷な命令を実行したのは、正にこの私であり、当然私の責任でもあります。「日本の軍隊機構の中ではやむを得なかった」という弁解も、被害者の立場に立てば、許しがたいことでありました。私はこう悟ることができ、私が日中戦争中に犯した犯罪のすべてを告白し、中国人民の前に深く謝罪いたしました。

中華人民共和国の日本人戦犯に対する軍事裁判は実に寛大でした。一〇六二名の戦犯中、軍事裁判にかけられたのは、わずか四五名だけでした。そこには死刑も終身刑もなく、最高刑が二〇年の禁固刑でありましたが、この刑期の中には、戦後すでに経過した一年が加算されておりました。

その他の戦犯全員は、「起訴免除—即日釈放」の寛大政策に浴して、昭和三十一年夏、三班に分かれて帰国しました。私も最終班の一員として再び懐かしい祖国の土を踏むことが出来ました。

二八歳で軍隊にとられた私は、すでに四三歳になっていました。だが、私は、私の、まる一五年にわたる暗い侵略戦争の歴史の中で、その最終期間をこの「撫順戦犯管理所」で過ごせたことは、本当に幸せだったと思っています。「撫順戦犯管理所——それは有史以来最高の監獄であった」と信じています。帰国後、私たち戦犯は「中国帰還者連絡会」を結成し、高齢のため会を閉じるまで四十数年にわたり（生存者でまだ気力ある者は今も）、「侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する活動」を続けてまいりました。それはひとえに自らが侵略戦争で犯した「罪の償い」のためではありますが、それはまた、「後に続く世代には我われの二の舞だけは踏んでもらいたくない」と考えるからでもありました。

（神奈川県 元中国帰還者連合会常任理事 九三歳）

日本軍の「生体解剖」痛恨の証言

—— 未来に向けて ——

湯浅 謙

私は戦時中、中国で、許すべからざる罪科を犯してしまいました。敗戦後、抑留中に反省の機会が与えられ、捕虜で二年、監獄で三年半、罪を反省・謝罪し、戦後一年経って、日本に帰りました。戦場で重ねた私の罪の告白によって戦争の実態を知ってもらうために、今、余生をかけています。罪の告白と同時に、私(たち)は罪を犯すことを強制されたことも述べたい。今も残存しているこのような権力の構造について考え、再び過ちを犯さない二一世紀に向けて。

特権的な「軍医」から始まった

一九一六(大正五)年、東京・下町の開業医の家に生まれた私は、世の中のために尽くそうという気持ちから医者になり、駒込の伝染病院に勤めました。太平洋戦争が始まる直前、中国との戦いで国力を浪費し息切れしていた時期です。その後は、軍医候補生(将校になる幹部)という特権的立場で、山西省路安陸軍病院へ赴任しました。太平洋戦争が始まって間もない一九四二(昭和一七)年の二月でした。町を歩いてただけで、どれだけ多くの中国人を脅かしていたか。ケンカ嫌いで気の弱い私でも、想像さえしませんでした。陸軍病院に赴任して一か月余り経った頃、病院長から「今日は手術

演習があるから、解剖室に集まれ」との命令が下りました。学生時代に戦地に行った先輩から、生体解剖の話は聞いていましたので、ドキツとして、「来たかー」という思いでした。

日本兵を救うための「生体解剖」実験

解剖室の前で兵隊の敬礼に答えた時の、黄色がかった茶色の少し錆びたドアの把手が目には焼きついています。中には、二人の中国人。一人は三〇歳前後で背が高く頬のがつしりした男で、手を結わかれたままじつと下を向いています。もう一人は小柄な百姓風の男。やはり手を縛られたまま、「アイヤー、アイヤー」と喚いていました。私たちは軍医、看護婦を含めて二〇名くらい。ここで尻ごみしたり悲しい雰囲気に陥ることは厳禁です。二人の中国人を人間として見ることは「許されない」からです。手術材料にすぎない。もし看護婦が、イヤだ、怖い、などと言えば「貴様、イヤなら帰れー」となる。日本に帰されれば非国民、村八分です。「戦争のためなら当然」という軍国主義意識に、慣れていくしか、生きる道はないのです。

病院長の「始め」の一言で、衛生兵が、がっちりした中国人を前に押しました。彼は悠々と手術台の上に寝たのです。それを軍医連中は「日本の軍隊に屈したか」と得意に思うのです。百姓風の男は背中を押されても前に出ず、「アイヤー、アイヤー」と叫ぶばかり。もし私に本当の勇気があったなら、その場から逃げ出したはずです。気が弱くて日本の兵隊を殴ったことのない私は、ここでは「エーイー」と力いっぱい男を押せたのです。組織の持つ力の怖ろしさです。私は「すまない」どころか、「どうだ、やったぞ」と得意でした。天皇制軍国主義思想は、そこまでいくのです。

手術台に男を上げるのは、看護婦の役目で、彼女は「麻酔をするよ、痛くないよ」と、あやふやな中国語で巧みに言葉をかけ、中国人が台に乗ると、私の方を見て「どうですかー」とばかりにニヤツと笑ったのです。後年、彼女に再会した折にその日のことを尋ねましたが、「先生と一緒に解剖をしましたかね」と答えるだけで、その光景は忘れられていました。

なぜ、「忘れる」のか？

なぜ忘れたと思いますか？ 命令されて拒否できず、「何げなしにした」行為には責任を感じることはない。罪という感覚があれば、覚えているはずです。しかも日本はドイツと違い、自らの手で戦犯を追求する動きもなかったし、思い出すすがるもない。七三一部隊で残虐な行為をした男が、後年、広島の原爆資料館を見たことがきっかけになり、自分の告白に行きついた例もあります。まず、思い出すことです。そこからのみ、反省は始まります。反省なき謝罪はあり得ません。

残虐の極致の生体解剖を、なぜやらねばならなかったのでしょうか。戦線が拡大して、第一線にいる部隊に手術のできる軍医がいなくなったからです。内科や小児科、眼科の医者が、日本軍の傷病兵に救急手術をしなければなりません。戦争に勝つためには、生体解剖をして軍医を教育せざるを得ない。戦争のためだから、それは「正しい」ことだったのです。

腰椎麻酔をして手術が始まります。お腹を大きく切つて腸の切断、縫合。気管切開で、真っ赤な血がパツと吹き出しました。ほぼ一時間で手術演習を終え、お百姓風の男は、もう息が絶えていました。死体は以前にも何回か生体解剖した折に掘った穴へ放り込みました。まだ呼吸をしていたがつつり

した男を、そのまま穴へ放り込むのは病院長も気が引けたようなので、私は息を止めるために、全身麻酔薬の残りを静脈に注入して、「よし、これを放り込め」と命じました。

生体解剖は私のいた山西省だけで行われたものではありません。一九四五年春に私は庶務主任になり、機密文書を見ていました。北支那方面軍から「戦況は思わしくない。軍医部として熱心に手術演習をやれ」という命令を受けました。三〇万余の北支那軍は、みな陸軍病院で手術演習をやっていたことがわかりました。ほとんどすべての軍医に、救急手術を仕込んでいたのです。決して自分の意志ではなく、「させられた」のですが、どうしてそれらの軍医たちは、体験を戦後伝えなかったのでしょうか。

「蟻の兵隊」として

その後、太原の陸軍病院に虫垂炎で入院中、敗戦を迎えました。当地にいた約六万の日本人のうち、私も含めて二六〇〇人の軍人が残留させられました。山西省の軍閥と、日本軍の画策によって、国民党軍に編入され、八路軍（共産党軍）に抵抗して戦ったのです。「誰か残らなければ多数が戦犯になってしまう」と脅かされました。そのなかの一人、奥村和一（八〇）さんは、戦後その真相を明らかにするため中国に通いつづけ、それを追ったのがドキュメンタリー映画『蟻の兵隊』です。

私は日本人が残るなら病院が必要、日本の医者の技術には中国人の信用もあり、医者の腕一本で食っていけるという打算も働き、日僑診療所づくりに参加しました。しかしやがて捕虜として収容され、二年後に山西省の太原戦犯管理所へ送られました。

そこで戦時中の行為に対する率直な反省文を、徹底的に書かされたのです。「認罪・坦白」の、徹底

運動です。「日本兵は召集されて残酷な行為に至った事情を中国人は理解している。しかし、中国人は君たちの手でひどい目にあわされたのだから、そのまま許すわけにはいかない。自らの罪状を正確に余す所なく書くなら許されるだろう」と。私はその作業に没頭し、真の知識を閉ざされたまま、国家権力に騙された身であることを悟りました。三年半の暗く狭い獄舎で、取り調べ・反省・対話を重ねて、中国人の人間性に触れ、日本人に合った食事など寛大な配慮に、胸の深みから反省が湧いたのです。

告白し尽くして、ようやく帰国

私の罪は主として生体解剖です。小さな不正確さも言いのがれも徹底追求され、一九五六（昭和三一年）三月に、私たちは初めて太原の街を參觀することが許され、新しい中国の息吹きを感じました。さらに五月から撫順戦犯管理所に拘束された軍人とともに、撫順から、上海、南京、漢口などを廻り、その後、間もなく釈放されました。「国際情勢の好転と、罪の重さを本人が深く反省していることによる」との説明を受けました（だが八名ほどは罪の重さと反省不足のため撫順の拘留所に移されました）。

このようにして私は自分の戦争犯罪を洗いざらい反省することができました。白状すれば許されるが、しなければ厳罰に処せられる獄中環境の中で、労働と学習を通じて被害者の苦しみを知り、私自身の内なる変化に立ち、最後には、自分も平和を願う平凡な一市民なのに、騙されて戦争にかり出された自分を「バカだったな」と悔やむ気持ちと同時に、生体解剖犯罪の重さを自覚できたのでした。

一切の刺激のない環境で、自分のしてきた行為の意味だけを考えさせる中国式の方法は、有効でした。そういう機会がなければ、私はとうてい根本的反省には至れなかったでしょう。戦争が終わった

直後に帰国した人たちには、その機会は与えられなかったのです。中国での残虐行為の当事者たちの「反省」なしには、真の意味での戦後は始まりません。

「隠しの構造」にメスを

一九八九年の夏、東京新宿区戸山の軍医学校跡地から百体を超す人骨が出ました。ところが警視庁は燃やしてしまおうとしました。地域住民が、「あれは七三一部隊などの戦争犯罪に関係があるのではないか」と、専門家に依頼し、鑑定したら、銃剣痕や実験的な手術の痕などが明らかになりました。それを警視庁は「無いもの」にしたのです。私たちは「燃やすな」と、裁判に訴えました。残念ながら裁判には負けましたが、社会問題化したため、政府は燃やすことができなくなり、今は祀つてあります。帰国後、私の反省を公言すると、「中国で洗脳されたからそんなことを言っているのだ」と怒鳴られました。右翼からの脅迫もしばしばでした。事実を覆い隠す仕組みは、二一世紀に入っても、根本にメスが入れられないままです。事実を白日にさらす兆しは、極めて少数の人びとの意識止まりです。家族には少しずつ話しました。彼らは共に中国に住んでいたので諒解します。が、ほかの人たちはノーコメント。医師会では私は特別扱いです。国会議員選挙の際に自民党の推薦人の依頼を拒んで以降、すべて「除け者」です。戦争の事実を覆ったままの教育。マスコミの偏った報道。すべてが「覆い隠しの仕組み」です。

しかし私は忘れません。「罪の認識からのみ、共存と、未来の平和の芽が育つ」という信念は揺らぐことはないでしょう。

（東京都 元西荻窪診療所所長 九〇歳）

張學良と私の關係

儀我 壯一郎

世の中には、不思議な御縁があります。張學良（一九〇一年六月—二〇〇〇年一〇月）と昭和天皇（一九〇一年四月—一九八九年一月）は同年齡で、張學良のほうが、一一年、長命でした。二〇〇八（平成二〇）年六月四日は、張作霖の没後八〇周年の祥月命日です。記念行事などが計画中で、私もぜひ協力したいと希望しています。私的・公的理由は、次のとおりです。

爆死の張作霖と同行していた父

一九二八（昭和三）年の同じ日の未明に、北京から奉天（現・瀋陽）に帰還する張作霖大元帥坐乗の特別列車が、関東軍高級參謀河本大佐を首謀者とする謀略により、瀋陽駅付近の皇姑屯で爆破され、張作霖は瀕死の重傷。数時間後に奉天城内の自宅で死去しました。

同じ車両で、張作霖と同行中の私の父親・張の軍事顧問・儀我誠也陸軍少佐は、間一髪の差で輕傷、九死に一生を得たのです。爆破が、一秒の何分の一早いか遅いかで、張作霖も儀我誠也も、共に死亡、あるいは共に生存したかもしれないし、張學良の父、張作霖が生き残り、私の父、儀我誠也が、即死していたかもしれないのです。「父親の生死存亡を左右する危機」というかぎりでは、張學良と私は、同じ立場におかれていました。

もちろん、当時小学校三年生だった私は、事件の背景も、その重大な意味も、深く知るよしもありませんでした。

当時数え年二八歳の張学良は、張作霖死去の公表を遅らせるなどの、思慮深い周到な対応によって、関東軍による軍事行動の口実を与えず、同年二月二十九日には、日本政府側の執拗な妨害を排して、国民政府との統合を意味する「易幟」に踏み切りました。東三省にも五色旗に代わって青天白日旗がひるがえることになったのです。

昭和三年に早くも「満州事変」的軍事的侵略を始めようとしていた関東軍などの野望は、このようにして挫折し、失敗に終わりました。

「満州を侵略し、華北などへの支配力強化を目指す」という点では、田中義一（陸軍大将・政友会総裁）首相も、関東軍も、基本的には共通していました。

「張作霖の利用価値」をめぐって、二つに割れた日本の支配層

しかし、張作霖政権の「抗日的側面」の位置づけも含めて、日本の「傀儡政権」として利用できるか否かについては、日本の支配層内部に、意見の不一致があったのです。

田中首相は、それまでの日本側の張作霖庇護 ①日露戦争の際の助命、②郭松齢の張作霖に対する反逆の際の関東軍による張援護などを前提として、利用可能ととらえていましたが、河本大作など関東軍と軍部の内部は、打倒、張作霖に傾いていました。この間の事情は、まず、松本清張「満州某重大事件」「昭和史発掘3」（文春文庫）を参照してください。古野直也「張家三代の興亡」（芙蓉書房）、

大江志乃夫『張作霖爆殺』（中公新書）などもあり、張學良の伝記としては、西村成雄『張學良』（岩波書店）が注目されます。

一九二九年一月、当時、張學良の軍事顧問となっていた儀我誠也は、転任（任地広島）により、私を含めた家族と共に帰国することになりました。

右下の詩は、張學良の惜別の詩です。

さらに、同じときに唐の詩人王維の紅豆の詩（左下）もしたため、ほぼ色紙大の二枚が、わが家に大切に保存されています。

詩の日付の一八年は、「民国一八年」であり、一九二九年（昭和四年）に当たります。

紅豆生南国 春来發幾枝
願君多采擷 此物最相思

（注・紅豆は中国の嶺南にあり蔓性の植物。秋に小花を開く。別名相思子。「采」は採と同じ）。



昭和史の反省を迫ったNHKスペシャル

昭和天皇の死（一九八九年）によって、「昭和史」の回顧と再検討が、各方面で進められました。一九九〇年二月九日と一〇日のNHKスペシャル「張学良いま語る」張学良―私の中国・私の日本」は、「昭和史」に深い反省をせまる内容でした（私は、NHKに多くの資料を提供しました）。

その昭和天皇が即位直後に当面した最初の重大事件は、関東軍による満州の支配者、張作霖の爆殺だったのです。



亡父に贈られた張学良の写真

張学良は、磯村尚徳のテレビ・インタビューのなかで、「儀我（誠也）はどうしているか。私は儀我が好きだ」という趣旨の発言をしていましたが、放映の際には時間の関係でカットされました。

ともあれ、惜別の詩を二枚も書いた父への好意は、私としてもうれしくありがたいことです。

父は、一九三八（昭和一三）年一月、天津で、特務機関長として在職中に死去しました。

顧みれば、一九三一年（昭和六）年九月一八日、北

京に滞在していた張學良の留守を狙って、日本の関東軍が柳条湖の満鉄線路をみずから爆破しながら、中国側が爆破したと称して開戦した、欺瞞的・謀略的な手法も、米国のイラク侵略（二〇〇三年三月）の口実が、欺瞞にみちた謀略であることと思ひ合わせて、いまあらためて重視されます。

一九三二年の「満州国」独立、同年の上海事変、ラスト・エンペラー溥儀の「満州国皇帝」化など、日本の支配層による満州の植民地化と、華北などへの政治的・軍事的侵攻が本格化する過程を経て、一九三七年七月七日の盧溝橋事件によって、日中戦争Ⅱ「十五年戦争」は、新しい段階に入りました。

その前年の一九三六年に西安事件が起こります。蒋介石によって共産軍掃討副司令官に任命されていた張學良は、四月九日に、陝甘寧辺区（解放区）の首都に当たる延安をひそかに訪ね、共産党の周恩来と極秘会談を行いました。

その基本的方向は、国民政府軍と共産軍とが戦うことをやめ、日本帝国主義の侵略に対して、一致団結して戦う「抗日統一戦線」の結成、すなわち「攘外安内」でした。中国映画『青春の歌』に描かれたような抗日運動の高まり、とくに一九三五年の一二・九運動などがその歴史的背景です。故郷を日本に奪われた東北出身者中心の張學良軍が、「共産軍と戦うよりは日本軍と戦いたい」と希望するのも当然でした。

そして張學良自身も、日本軍による、「父親張作霖暗殺」の怨みは、まさに骨髓に徹していたのですから、三六年一二月、督戦のために西安を訪れた蒋介石に対して、「第二次国共合作、抗日統一戦線の結成」を強く要求する「兵諫」にいたった心情は、十二分に理解されます。

張学良の遺言

西安事件は、中国が挙国一致、日本の侵略と戦う条件を整えた画期的事件です。張学良は、西安事件後、半世紀以上、幽閉ともいべき状況がつづき、発言の場を奪われていました。一九九〇年二月の張学良のNHKテレビでの発言は、そのこと自体が歴史的事件のひとつです。張学良の歴史的役割と、その傑出した人柄が内外で広く知られたことは、「父親の危機」を共有し、番組作製に協力し得た私にとって、自分のことのようにうれしいのです。詳細は、NHK取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』（角川書店一九九一）を、ぜひ参照してください。本書は角川文庫にも収められて、中国でも翻訳されています。必読の歴史的労作です。張学良は言いました。日本人に対する貴重な遺言です。

「とくに日本の若い人に言いたい。過去のことに目をつぶってはいけない、と。未来の望みは若者にあるわけですから。……私は平和な世の中を望んでいます。みんな平和的につきあい、お互いに理解し合うことを期待しています。もし何かが起きたら、ゆっくり時間をかけて相談する。武力を用いてはいけない。ゆっくり話し合えば、解決できないことは、ありません。武力を用いても何も解決できないことは、すでに明白なこと。それは歴史が重ねて証明済みです。日本は今後、もちろん、武力侵略はしないでしよう。あつてはならないことです。できれば経済侵略もしてほしくありません。他人と協力し、他人を助けてほしいのです……」（一九九〇年八月）。

イラク侵略戦争の即時停戦、米軍の即時撤退を訴えて摘筆します。

（二〇〇七年一月二五日記）

（神奈川県 大阪市立大学名誉教授）

戦争史を学ぶ若者たち……

——最近の大学生の受講態度とその読書傾向

吉田 曠二

昨年はあの東京極東軍事裁判から六〇周年、今年は盧溝橋事変七〇周年の節目にあたる。

はたして日本の若者がそのような日本近代史の重要な流れをどれだけ知っているのだろうか？

ときに新聞には、今の若者がパール・ハーバーの奇襲攻撃も何年の事件であったか知らないし、極端なケースでは日本がかってアメリカと戦争をしたことさえ、意識にない大学生が増えていることを報道している。驚くべき現象ではないだろうか？

はたしてこれでよいのだろうか？ 大学で歴史教育（政治史）を担当している近代史研究者の一人として、わたしも毎年教室で教えながら、自分の目の前に姿をみせる若者の、歴史に対する関心と、その歴史認識については、たえず注目している。若者が歴史をどうとらえようとしているのか？

まずは教師が学生のこころを知ることが大切だと考えて、毎年、教室でアンケートをとりながら、学生の歴史認識を数量で把握している。

八年前（一九九九年）に実施した私のアンケートでは、満州事変以来の日中全面戦争が「日本軍による侵略戦争であったか、自衛戦争であったか」という質問については、侵略戦争であったと認める学生が八九％、自衛戦争が五％、そのどちらでもないが六％であった。しかし三年前からは、自衛戦争であったと答える学生が漸増し、二〇〇四年のアンケートでは一一％、昨年の春には、一七％に増

加し、その分だけ侵略戦争であったとする回答が減少している。

さらに興味深い傾向は、学生に「政治史」を選択した理由をたずねると、いずれの年度でも、一番多いのが「学習目的は明確でないが、ただなんとなく興味があるので」が一番多く、今年の春のアンケートでは四五%、ついで第二位が「日中戦争とアジア太平洋戦争の歴史を専門的に学ぶため」三六%、「この講義を受講した先輩に勧められたので」三六%、「日中戦争については、今まで学校でならわなかったため、その空白を埋めるため」一六%などの順位（重複回答）となっている。

しかし学生の読書傾向について質問すると、「今までに日中戦争・アジア太平洋戦争について、何か文献を読みましたか」の項目では、七一%が「なにも読んでいない」と回答し、読んだことがあると回答した二〇%の学生でも、書名を挙げさせると漫画本が大多数で、小林よしのりの漫画と「はだしのゲン」さらに「戦艦大和」など映画に関連した通俗本に限られた回答であった（〇六年四月実施）。

このような現代的な傾向に染まった学生（新人類）を相手に講義をするのだから、かれらに興味をもたせるには一苦勞である。私の場合は「講義ノート…ドキュメント日中戦争」（三冊）をテキストに活用しているが、教室でその文章を読めば、まちがいに半数以上の学生が居眠ってしまいそうである。そこでわたしの「講義ノート」は自宅で読むようにすすめて、大教室では黒板に字を書く以外は学生の顔の表情と目を見つめながら、講義をしている。時には映像で講義の内容を膨らませようと、スクリーンに映して戦争史の教材を活用するが、映像を上映中は教室が暗くなるので、居眠りには最適の場所となる。教室では二〇分も映像をつづけて見せると、学生の三〇%以上が居眠りをはじめ。その理由はたぶん、基礎的な知識に欠ける学生が、映像の内容をフォローできないからだと思われる。しかしそれを承知で、ビデオを上映したある日のことである。こちらが啞然として驚きの気持ちを

禁じえない場面が発生した。それは極端な風景であったが、一九四四年のレイテ沖海戦ではじめて出撃した日本海軍の神風特別攻撃隊の出撃場面をスクリーンに写してみた。その厳肅な場面がスクリーンに映し出された最中でさえ、居眠りをむさぼる学生が三五%もいたのである（○五年度も半数弱）。そのようなとき、私はビデオを中止して、いつも学生に向かつて注意することに心がけている。「君たちはあまりにも自己本位でありすぎる。今から半世紀前とはいえ、君たちと同じ年齢の青年たちが国家のためにという美名にだまされて、死地に飛び立った瞬間だよ。それをなんとも思わないのか。君たちは他人の苦しみ、痛みがわからないのか。それでも君たちは日本人なのか」と。

私は教室でいささか孤立感を味わいながら、注意したのだが、やはりその効果はあった。期末試験の答案に一人の学生が「あのとき先生に叱りつけられたのは当然で、その声を忘れられません」と記入してくれ、なんとなく救われたような気分を味わった。

このような若者を相手に、わたしども歴史の教育者は今後どのように立ち向かえばよいのだろうか？そこで私は考えた。歴史に真剣に立ち向かうとする学生がまだ毎年、三〇%以上は、いる。まずはその学生に自信をもたせて、いっそう歴史に関心を高めさせ、そのネットワークを活用して、同類の学生に影響を広げること。さらに中間にいる学生をどれだけ吸収できるか？

その具体策として、ビデオ映像をみせたときには、映像から理解できた点、わからなかった点を記入して提出させ、その疑問に私が教室で回答するという方法を採用した。こちらからの一方的な講義では成果があげられない。たえず学生の反応を確かめ、かれらの感覚ではとうてい理解できない場面がどこなのか？それをこちらが理解することで、一歩前進ができると考えたのである。その成果はま

だ実験段階だが、相当効果がありそうな気配である。

さらに今ひとつ重要な課題は、最近の日本における右傾化の傾向のなかで、近代史を客観的に教えることの重要さである。歴史教育は客観的でなければならない。黒の事実を白と置き換えてはならないのである。日中戦争が日本の始めた侵略戦争であった事実は覆い隠せない。それは歴史的事実である。また戦争は当事国からのみ観察したのでは、公平を欠くおそれもある。戦争は相手国があつて、はじめて成り立つものである。私は教室で教える「講義ノート」で、「日中戦争史は日本からだけながめていても、真実はつかめない。相手国、つまり中国の資料からも分析することの必要性」を強調している。戦争は当事国の双方からなめること、「日本はあの戦争でなにも悪いことをしていない」と勇みたつても世界はだれも納得してはくれない。「現実には仮想敵をつくり、その仮想的の姿を偏見をもって歴史においても再現する今の右翼的な歴史教育からは明るい未来が創造できない」ことを力説したい。

幸いにも私が担当する「政治史」のクラスには、〇六年も前期は二五〇名、後期は九五名の学生が登録した。もちろん中国人の留学生も数名含まれている。まさに国際化の歴史教育のはじまりである。その教室で、「日本が日本が」と言つて、過去の日本の侵略行為を弁明するだけでは、一歩も歴史科はすすまない。まじめな学生は、がっかりするだけである。

よくいわれることだが、目を大きく世界に広げて歴史をながめるべきである。

幸いなことに、二〇〇六年の前期（七月）期末試験では、いままで専門的に近代史を学んだことがないという五名の学生が「ただなんとなく過去の日本が正しいことをしていたと、考えていたことが、実際は間違っていたことに気がつきました」と正直に回答してくれた。また別の学生は「なぜ中国や

韓国からいまになっても日本が批判されるのか？ 私はいやでしかたなかったけれど、政治史の講義を聴いて、その理由がわかりました。先生が教室で話されたように、私はその事実を受けとめて反省し、一人の日本人としてこれから国際社会でアジアの人びとと仲良く活動したいです」と記入してくれた。これは千金に換えがたい貴重な回答であった。

若者よ。騙されてはいけない。未来は君たちのものである。あの戦争から何かよい結果が生まれたのか？ 戦争（武力行使）からは何も生まれなかった。そのことを歴史が教えてくれる、という私の意見に八〇％以上の若者が賛成してくれている。

鉄は熱いうちにうたねばならない。社会人になれば、利害がからんでくる。お金に目がくらめば、明るい未来はつくれない。憲法九条の戦争放棄、一切の武力行使をしないという日本の国是を守ること。その主張が歴史教育の基本だと考えている。このことがわかる若者に勇気をもたせたい。〇六年の夏には北朝鮮が核実験を行い、核保有国になった。北朝鮮の核保有に西側の多くの国が反対している。もちろん私も同じ意見である。それではすでに核兵器を多量に保有しているアメリカやロシアはどうなのか？ 核保有をしている大国の核廃絶もマス・メディアはとりあげるべきであろう。

不幸にも日本が第二次大戦の末期、広島と長崎に原爆を落とされ、罪もない民間人が犠牲になった最初の核被害国になった。それを二度と繰り返さない。そのことを世界で誰よりも強く主張できるのは、アメリカでもロシアでもなく、日本なのである。あらゆる戦争を放棄した日本国憲法九条に自信をもつことを若者に教えることが、いま求められている歴史教育の重要課題だと考えている。そのためには、過去の戦争の歴史を正しく学ばなければならない。歴史の歪曲からは未来の平和を展望できないだろう。

（よしだ ひろじ 名城大学大学院及び法学部非常勤講師 政治史担当）

窓

違憲教育基本法の実現を 許さないために

俵 義文

政府・与党は○六年二月一六日に憲法と一体の教育基本法を抜本的に改悪する政府法（以下、違憲教育基本法とよぶ）案の成立を強行した。政府はこの違憲教育基本法を二月二二日に公布・施行し、四七年教育基本法は廃滅させられた。これは、憲法改悪の先取りであり、安倍首相の「任期中の改憲」に向けた暴走である。この違憲教育基本法によって、安倍政権・自民党がめざそうとしている教育や国・社会とはどんなものなのか。

安倍晋三首相はイギリス・サッチャーの教育改革を手本に、内閣官房に首相直属の「教育再生会議」を設置し、「学力の向上」と「規範意識」[モラル]の回復、「だめ教師の排除」などを柱とする「教育改革」をめざしている。具体的には、「教育利用券（パウチャー）制度の導入」「教員免許の更新

制導入」「学校評価制度の導入」「大学の九月入学と高卒後の半年間のボランティア活動」「自虐史観教育の是正」「過激な性教育やジェンダーフリー教育の是正」などの「教育改革」の推進である。

「教育パウチャー制」とは、保護者が自分の子どもを行かせたい学校にパウチャー（利用券）を出し、学校が受け取ったパウチャーの数に応じて予算を配分する、というものである。これは、全国一斉学力テストとその結果の公表、学校評価制度、学校選択の自由化と結びついて、教育における競争をいっそう促進するねらいである。「教育パウチャー制」は、教育の市場化であり、所得格差がそのまま教育格差に直結するもので、現在でもすでに拡大している地域間格差や学校間格差、教育格差をいっそう拡大すること

になる。教育の機会均等の否定である。

こうした新自由主義的教育政策によって、教員、子ども、学校、そして家庭までもが熾烈な競争のつばに投げ込まれることになる。すでに、日本の教育には競争原理が持ち込まれ、様々な弊害が起こっている。安倍政権がめざす「教育改革」は、教育をこれまで以上の競争原理下におくものであり、「改革」ではなく「教育破壊」である。

安倍首相がめざす「モラルの回復」とは、違憲教基法に愛国心をはじめとした国定の道徳規範を盛り込み、これを「教育の目標」として強制する新国家主義的政策である。

安倍首相は、教育基本法改定案に「国を愛する気持ち、涵養する心を育てるということをしつかりと入れるべきではないか」と思います。「国が危機に瀕したときに命を捧げる」という人がいなければ、この国は成り立っていない。「靖国崇敬会主催の公開シンポジウム」と主張していた。国家のために命を差し出す人間をつくるというのは、戦前・戦中の教育の基本であった「教育勅語」の「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ」（戦争になれば天皇のために死ぬこと）を教育の目的にしたことと同じである。安倍首相の「教育の

抜本改革」の行き着く先は、「戦争をする国」のための人づくりということである。

安倍首相は〇七年一月四日の年頭会見で、「改正教育基本法の上にたつて、教育再生会議でさらに議論を深め、具体案を責任を持ってとりまとめていく」と語った。一月二五日開会の通常国会では、違憲教基法にもとづいて、学校教育法をはじめとした約三〇の教育法規が改悪され、さらに、文科省は学習指導要領を改訂する。そして、安倍首相直属の教育再生会議による、前述のような「教育改革」が推し進められることになる。

「教育水準の向上」の美名によって、競争教育をいっそう徹底し、教育格差を拡大する新自由主義的政策と「愛国心」「モラルの回復」などの新国家主義政策はメダルの表裏の関係である。競争教育を徹底し格差が拡大すれば、子どもたちの心はさらに荒廃する。この子たちが「反乱」を起さないように、愛国心や道徳心、国益・国策に従順に従う人間の育成が必要になるからである。

全国一斉学力テストの成績と学校評価制度によって学校は格付けされ、学校選択の自由化、「バウチャー制度」と

連動して、教育の市場化が進み、子ども、教員、学校、保護者は熾烈な競争に駆り立てられることになる。子どもや教員などのストレスはいっそう激しくなり、学校はこれまですら荒れ、「いじめ自殺」や教員の大量罹病・退職・自死などが急増することになるのは火を見るよりも明らかである。

安倍政権は、競争教育によって一握りのエリート「勝ち組」をつくると共に、教育機会の不平等の押しつけで「荒れる」ことが予想される圧倒的多数の「負け組」を管理・統制するために、二つのことをやろうとしている。

一つは、違憲教育基本法第十三条の「その他の関係者」に警察を含め、強圧的に子どもを統制する方法である。そのために少年法の再改悪がめざされている。もう一つは、第二条の「教育の目標」に愛国心・道徳心・公共心など二〇もの国定の道徳規範を盛り込み、この「目標」を日本に住むすべての人びとの精神生活の目標として強制することである。さらに、第十条の家庭教育、第十一条の幼児教育がこれに連動する。これによって、生まれたばかりの頃から国家が心の中で管理・統制して、「国家・国益のため」

を最優先する人づくりをめざそうとしているのである。これは、教育の破壊であるだけでなく、日本社会そのものを壊してしまうものである。

この三年以上、私たちは教育基本法改悪に反対して全国各地で草の根の活動をすすめ、これまでにない大きな運動をつくりだした。特に、通常国会に政府法案が提出されて以降は、全国の活動はいっそう広まり、高まってきた。〇六年の一年間だけでも、全国各地で二〇〇〇か所以上で集会が開催され、地域から反対世論をつくりあげていった。これを基礎にして全国集会が行われ、意見広告が取り組み、さらに国会に向けて、FAXや手紙をはじめ直接の議員要請、院内集会、国会前座り込み、四回の日ユーマンチエーンなど多彩な活動が取り組まれた。

与党推薦者のほうが多い公聴会・公述人の半数以上が、政府法案反対、または徹底審議を求めている。〇六年一月一二日には、公述人・参考人の二〇名が連名で、審議はきわめて不十分であり、国民の代表として述べた数々の問題点がほとんど議論されていないことを指摘し、徹底審議を求めるアピールを出しました。このアピールに対するイ

ンターネットによる賛同署名は、九二時間という短期間で一八七二四筆にもなった。多くの大学人や研究者が法案反対・徹底審議を求める声明を出した。これらのアピールや声明は、政府法案の多くの問題点を指摘し、これらについて国民が納得いくような審議はきわめて不十分であり、法案の内容に即した徹底審議・慎重審議を求めている。

各種の世論調査でも、政府法案反対と今国会での成立反対は七〇％を超えていた。自民党支持者でさえ六〇％が法案に反対ないし臨時国会での成立に反対していた。政府法案の臨時国会での成立を支持するのは一〇数％（自民党支持者でも二五％）にすぎなかった（日経新聞〇六年一月二八日）。また、公立小中学校校長の六四％が政府法案に反対していた。教育基本法「改正」で教育がよくなると考える人は、わずか四％に過ぎず、変わらない四六％、悪くなる二八％というのが世論であった（朝日新聞〇六年一月二五日）。

こうした私たちのたたかいが、マスメディアがあまり報道しないという悪条件にもかかわらず、世論を動かし、前述のような世論状況をつくりだしてきた。国会では自民・

公明の巨大与党は絶対多数だが、教育基本法案に関しては、国民の中では彼らは少数派であり、国会審議を通じてそのことがますます明白になってきた。また、政府法案の問題点や教育基本法改悪のねらいも徐々に国民の中で明らかになってきた。こうして、追い込まれた政府・与党が強行採決という暴挙にでたのである。

教育基本法は改悪されたが、しかしまだ憲法は改悪されていない。四七年教育基本法の理念や精神は生きているのである。私たちは、四七年教基法と一体の憲法と子どもの権利条約を使って、改悪教育基本法の違憲・違法性を具体的にわかりやすく国民の中に広めていく必要がある。そして、安倍政権の違憲教基法にもとづく「教育改革」を阻止するために、憲法と一体の四七年教育基本法の理念や精神を生かし、違憲教基法の違憲性とその具体化を批判しながら、全力をあげて運動することが求められている。子どもと教科書全国ネット21ではこのために五〇円のパンフレットとブックレットを三月初めに発行する予定である。

（〇七年一月一四日記）

（子どもと教科書全国ネット21事務局長）

【編集後記】



◆このテーマに取り組んでから半年、それぞれお忙しい方がたが、こんなにもお心あふれる力作をお寄せくださいましたこと心からありがたく御礼申し上げます。なかでも小川氏、白井氏の長編は、問題の核心に迫る必読の論説です。

読売新聞在社中に中国残留婦人、鈴木則子さんに会ったのをきっかけに、この問題に深入りしたと述べられる小川氏は、関係者に寄り添い、支えながら、精力的に「なぜ」を追い続け、九五年に著された『祖国より「中国残留婦人」の半世紀』（岩波新書）は版を重ね、また『国に捨てられるということ』（岩波ブックス）の上梓を始め、山場を迎えた裁判支援の中心として寸暇のない中の貴重なご執筆。白井氏は朝日新聞モスクワ支局長として在勤中からのソ連・ロシア通。近年は

とりわけ、「ゾルゲ事件」研究で新地平を拓き、内外の専門家が注目する編著書を次つぎに発表されるかたわらシベリア抑留問題にも深い理解を寄せ、理論的支柱として活躍。今回は歴史的視点からこの問題を解き明かした迫真の総論です。

羽田氏には、人生終末期の医療のあり方について考える映画「終りなければすべてよし」の制作に多忙を極めていらした時に、貴重な御原稿をお寄せ頂き深謝。

数奇な共通体験から得た強い反省に基づいた戦争体験を平和と後の世代のために伝えて下さった絵鳩・湯浅両氏をはじめ深刻な幼少期の戦争体験を披瀝された皆様のお蔭で、本号が重層的になりました。

乳児や幼児まで犠牲にした「満蒙開拓団」の悲劇は、白井・小川両氏のご指摘のとおり、明治以来の日本軍国主義もたらしたもの。その根源に立ち向かい、二度と戦争を起こさないために、〈あこら

は、「あの戦争」を今後も追い続けます。

（編集部）

◆満州国での棄民政策。シベリア抑留という棄兵。自衛隊が「自衛軍」になると、何が起きるのか、改めて考えました。（R）

◆当時乳児であつた友人は、引揚船の中で、「泣声がうるさいから海に投げろ」と周りにから言われたけれど、母は、私が息あるうちは、と必死に抱きしめて離さなかつたので、今があると云っていたのを、思い出し、この号で戦争のむごさをあらためて実感しました。

それぞれの立場からの戦争についての発言、深く胸にしみります。（Y）

『310号』訂正とお詫び

5ページの山下清子さんの御住所は（高岡市）でした。お詫びして、訂正します。

【311号の編集協力者】

荻原有希／小野良子／小俣光子

黒澤照代／郷原さつき／斎藤千代

「あごら」は、人と人が出会うひろば——

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……心おきなく話し合える仲間がいる。——そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える——「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊『あごら』の誌代込みで月額七〇〇円（在学中の方は三五〇円）。一年分（八四〇〇円、学生の方は四二〇〇円）前払いが原則ですが、半年分でも二か月分でもご相談に応じます。入会金は二〇〇〇円（学生の方は無料）。ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

「BOC」の登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれた「BOCバンク・オブ・クリエイティビティ」は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上「あごら」会員の方に限ります。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル

連絡先
電話 03・3354・3941 代表 FAX 03・3354・9014

Eメール XLV05467@nifty.com #t4boc@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 311号（4／5月合併号） 「あの戦争」を語り継ごう I

- 編集 あごら新宿 ●発行 2007年5月20日 ●印刷 藤田印刷(株)
 - 発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル3F
 - TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com
 - 定価 本体1,800円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部
-



9784893061652



1920036018000

ISBN978-4-89306-165-2

C0036 ¥1800E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,800円+税

平等と平和を追求する 『あごら』近刊シリーズ

平和憲法は
日本に何をもちたか

憲法六十歳に想う

「あの戦争」の
負の遺産を追求

「あの戦争」を語り継ごうⅡ

「少子化」は
本当に問題なのか……

女性の視点から「少子化」を考える

ふえ続ける
パートと派遣

「女子労働」の問題点

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団

BOC

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

男女共同参画の
BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティのBOC出版